

魔法少女リリカルなのは は 蒼の守護者

みずき

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

世界を滅ぼすか守るかそんな戦いを繰り返す守護者の物語

いつかは壊れる仲間

世界を守るために滅ぼさなくてはならない矛盾

それらを抱えて生き続ける全ての力の源たる永遠の少年の物語

元、M、O、の部屋、現、久遠のほんだなの旧掲載一覧に同じく、みづきの名で投稿
していたものです。

リアルが忙しく書きが書けなくなつてしまつていたものでせつかく書いたもののないで、投稿してみて続きを読むみたいなみたいな感想が頂けたら少しづつでもまた書いて行こうかなと思います。

目次

プロローグ	——	——	1	第六話 謎の魔物との戦い、そしてとうとう温泉に？	——	——		
第一話 僕とお姉ちゃんの魔法との出会い	——	——	6	第七話 聞こえても届かない声	——	160		
第二話 僕とジュエルシードとファルさんと	——	——	39	第八話 出会いは砲撃と共に？？ごめんなさい	——	131		
第三話 ライバル登場？僕のライバルは多分ファルさんだと思う	——	67	第九話 時空管理局？世の中酔狂な組織もあるもんだね	——	217	第十話 星夜の初めての実戦とアースラでの生活・・・せつかく作ったケークが（涙）	——	191
第四話 僕と星夜の魔法特訓！ついでに温泉旅行でリフレッシュ・・・できるといいなあ	——	247	第五話 今度こそ温泉、僕の邪魔する奴はお星様にしてやるのです	——	109	92	109	

プロローグ

魔法少女リリカルなのは

蒼の守護者

プロローグ

「ん〜、変だなあ」

「そうだね。どうする瞬兵くん?」

「大きな事件がまとまつて起こってる。放つておくわけにもいかないか

「じゃ、僕が行つてこようか?」

「ううん、いいよ。僕が行くから」

「瞬兵くんが行くの?」

「そこまでするほどの事件じゃないと思うぞ」

「ま、そななんだけど・・・守護者の契約は僕しかできないしね」

「じゃ、素質ある子がいるんだね」

「そーゆうこと」

「それじゃ、仕方ないね」

「記憶はどうするの?」

「封印するよ。シユテルシアのリミッターを解除したら思い出すようにしておく」

「それって意味あるの?」

「そつちのほうが面白そだし」

「あ、そう・・・じゃ、生まれずに死んでしまう赤子をピックアップするね。そのなかから生まれる場所を選んで」

「これかな、父親は事故死、母親は子供の出産に耐えられずに死亡、その時に赤ちゃんも死亡、うん、動く上で中々理想的だけど・・・そうじやなければこっちかな、プロジェクトF・A・T・E・・・人造魔導師計画ね・・・えっと、これかな生まれることができずに消えるか・・・うん、これにしようかな・・・それにこの研究所は職員全員一緒に爆発事故で消滅か・・・うん、一番影響が少ないのでここだね」

「決まつたの?」

「うん、じゃさつさつと行くね」

「うん、行つてらつしやい」

ん・・・水?

いや、培養液かな、にしても狭いな・・・とりあえず、身体に入るのは成功したね。
「見ろ、ナンバーー68が目覚めたぞ!」

「成功したのか!」

ううんと、白衣の科学者が数人、この研究上は今日中に事故で消滅するから・・・始
末しても問題ないか・・・それに、僕が暴れれば何人かが逃げて助かるだろうし
「身体の調子も確かめないといけないし」

僕は力を解放する。

「すどおおおおおおん!」

「・・・しまつた、やりすぎた」

僕の力は部屋の内部を完璧に破壊しそこにいた研究者たちも身体を妙な方向に折り
曲げている。

むう、まだ、上手くなじんでいないのか・・・ま、いいか

「なに」とだつ!?

爆発音を聞き部屋に来た。人たちに軽く視線をやる。

それだけでそこに居た人物が弾け跳ぶ。

僕はどうにか力を抑えて、隣に視線をやる。

二歳くらいの男の子が居た。

「へえ、この研究所唯一の成功体たしか事前調査ではナンバー59・・・今日、起ころる事故で研究員と一緒に消え去る命・・・でも、さつきの爆発で生き残ったか・・・この子も連れて行くかな何より守護者の素質がありそうだし」

この部屋に向かってくる複数の足音が聞こえる。

「・・・とりあえず、ホリータワーー!」

「どどどどん!」

呪文を唱え僕は手を振り上げて振り下ろす瞬間、空から光が降り注いだ。

「爆発事故を起こす場所を除いてほぼ完璧に壊滅させたしうまくいけばこここの研究員も何人か生き残れる」

「ひゅん!」

手をふるとそこに金色の杖が現れる。

僕は近くにいる男の子の手を取る。

「記憶の一時封印と解除条件を設定・・・では、どこに行くかは分からないけどこれから起ころる事件に何か関係のある者の近くに転移」

僕たちの姿はその場から消えた。

その一時間後に研究所は爆発事故を起こし消滅した。

そして物語は幕を開ける。

次へ

第一話 僕とお姉ちゃんの魔法との出会い

初めまして、僕は、如月瞬兵、小学二年生で七歳の男の子です。

僕は訳あって高町家に住んでいます。

ちなみに訳つてのは僕ともう一人が高町家の前に捨てられていたからです。
もう一人についてはまた後でご紹介します。

そして、これは僕たちが魔法を知る話です。

「・・・いつものことだけど、なんでここに、なのはちゃんがいるの」
誰かが助けを求める夢を見た。

起きると人に抱きつき幸せそうな顔して寝てる義姉、高町なのはがいた。

「なのはちゃん、ちよつと、なのはちゃん」

「・・・えへへへへへ、ムニユ」

・・・なに、この、ふにやけた顔は人に抱きついて寝るのがそんなに気持ちいいのかな?

はあ・・・仕方ないなあ・・・

「お姉ちゃん。起きろおおおおおおおおおおおおお！」

んにや！？」

声に反応してなのはちやんが飛び起きた。

「目がさめた？おはよう、なのはちゃん！」

あ、おはよう、瞬兵くん

「あのさ、なのはちゃん、毎日の様に人のベッドに潜り込むのいい加減にやめようよ」「にやはははは、ごめんね。瞬兵」

はあ

僕は
一つため息を
つく
毎日言
つ
て、
毎日謝
つ
てるのになのはちゃんは
・
・
・
・

「なのはちゃん、早く着替えたほうがいいよ」

「うん、じゃあ、着替えてくるね」

なのはちゃんと部屋を出て行つてから僕は服を着替えだす。

今日は僕が料理当番だからね。頑張らないと、高町家に引き取られてしばらくしたつた時に僕は家事の手伝いを申し出て、今では義母と当番制でやっていて今日は僕の番で

す。

いつもならジョギングとか武術の鍛錬をするんだけど、当番の日なので今日はお休みの日だ。

パシャツという音がしたが気のせいつてことにして僕は着替えを終えて部屋を出て下におりるそこには、

高町家、義兄の恭也さん、もう一人の義姉の美由希さん、義母、桃子さん、義父、士郎さんが朝も早くからアルバムを見ていた。

そこには瞬兵くんマル秘ベストショット全集、などという僕としてはあまり直視しないタイトルが書かれていた。

「おはようございます。お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

「おはよう、瞬ちゃん（瞬兵（くん））！」

「あのつかぬ事を伺いますがみなさま何故に朝もはよからアルバムなんて見てるんですか？」

僕の質問に四人はぐりつて感じで僕の方をみると声をそろえて言つた。

「「「瞬ちゃん（瞬兵（くん））が可愛いからよ（だ）（だな）（だね）」」」

・・・・・・・・・・しくしく、なのはちゃんといい、何なんでしょうか、ちらりと
アルバムを見ると僕がとつた覚えのない写真や、明らかに盗撮だと分かる写真もあつ

た。

「もう、いいです……朝ごはん作ります」

あれから、大急ぎで朝ごはんを作つて、僕となのはちやんは学校に行く時間です。

「いつてきまーす」

「いつてらつしやい、気をつけてね」

桃子さん……お母さんつて呼ばないと泣きそうな顔で見つめてくるのでお母さんつて呼んでる。

に見送られて僕となのはちやんは学校へ向かう。

バスにのる直前になのはちやんとはぐれた。

何故か毎日のようにはぐれるんだよね。

色んな人が話しかけてくるからかもしだれない。

でも、校門の前でまた会えた。

何故かやたらと心配してくる。

痴漢にあつてない?と聞かれたときは頭痛がしてきたほどに呆れた。

毎日のことだけどだからこそ余計に頭が痛いんだけど……なのはちやんは完璧に本気にそう聞いてきたようだつた。

こんな子供に手を出さないよと何度も言つているが聞き入れてくれたことはない。

なのはちゃん曰く、そつちの趣味の人がみたら即効で誘拐しそうなほど可愛いとのこと・・・なのはちゃん、人の事いえないけど、何でそんなこと知ってるの？

途中、何人かのお友達と挨拶を交わしたり後ろから抱きつかれたり、上級生に頭をぐしゃぐしゃとなでられたりしながら僕たちは教室に入る。

「じゃあ、なのはちゃん、お昼にね」

「うん、後でね、瞬兵くん」

なのはちゃんと別れた僕は自分の教室に入る。

「おはよう、瞬兵」

「おはよう、星夜」

教室に入った僕に声をかけてきたのは、僕よりは背の高い、けどやつぱりどちらかといふと小柄な男の子、親友兼幼馴染の天野星夜だ。

兄弟ではないらしいけど、僕と一緒に捨てられていた子です。

高町家の近くに住む子供が生まれなかつた天野さん夫婦が引き取つた子です。

僕には名字と名前がありましたが星夜は名前だけだったので、天野の姓を名乗つてます。

「お前、相変わらず姉ちゃんと仲いいな」

「まあ、家族仲がいいのはいいことでしょ」

僕は笑顔で返す、その瞬間に星夜や周りに居た人々は顔を真っ赤にして固まつた。

「……ちよつと、星夜？……星夜つてば！」

「あ……ああ、なんだ、どうした」

まだ顔が赤いままの星夜に僕は盛大にため息をついた。

「どうしたつて、星夜がいきなり固まるからいけないんじやないか」

「うぐ……す。すまん／＼／＼／＼（こいつは男、こいつは男、こいつは男、男でもい……いかんいかん）」

「せ・い・や☆」

「は、はひつ・・・なな、ナンデゴザイマシヨウカ」

僕は一瞬感じた想いのままに星夜の頭を驚掴みにする。

「いま、何を考えたのかなあ～♪」

僕は手に一気に力を込める。アイアンクローという奴です。

多分だけど・・・・・哀しい、背の関係で持ち上げることきはできなかつた。

「んぎやあああああああ！ギブツ、ギブツ！」

「何かいうことはないのかな！かな☆」「ごめんなさい～～～」

言葉を聴いて僕は手を離した。

「みんなも、僕は男の子だからね。忘れちゃだめだからね☆」

みんな顔を青くして慌てて首をブンブンと縦に振った。

ま、実を言うと、僕、自身は男だなんだとかあまり気にしてないけど・・・さすがに小学生でそつちは不味いかなど・・・自分の事は棚上げですけどね。

「みんな、席につけ、S H Rを始めるぞ！」

先生が入ってきてみんなは自分の席に戻つていった。

はあ・・・やな感じ・・・何か、危険で厄介なことが迫つている気がする。

それから授業は一時間目から体育だつたんだけど、着替え中に変な視線をくれたクラスメイト数人をとりあえず沈めたり。

盗撮をしようとしてた上級生を沈めたり。

休み時間に人の写真を売つてた馬鹿を沈めたりしてお昼休みになつたので僕は星夜を誘つて屋上でお昼にすることにしました。

といつても、ほぼ毎日のように星夜と屋上に言つてなのはちゃんとちと一緒に食べるんだけど、

「あ、瞬兵！」

僕に向かって手を振つてくるのは言わずとしれたお姉ちゃん、その周りには、金髪お譲様のアリサ・バニングスちゃん、お淑やかそうなくせに実はいい性格なお譲様、月村

すずかちゃんだ。

「こんにちは、アリサお姉ちゃん、すずかお姉ちゃん、ついでになのはちゃん」「ひ、ひどいよ、私はついでなんて、それに私だけお姉ちゃん抜きだしへ」

につこりと笑つて挨拶をする。
アリサちゃんにすずかちゃんはなのはちゃんの友達でほぼ強制でお姉ちゃんと呼ば
されている。

ま、実際にお姉ちゃんをつけるのは極稀だが、絶対に一日一回は言わないといけない
らしい。

ちなみに二人は僕のスペシャルスマイル+お姉ちゃん攻撃で撃沈中だ。

むく、照れて固まるくらいならお姉ちゃんつて呼んでつて涙目で迫つてこなければい
いのに・・・変なの。

なのはちゃんもついでつて言われたのがそんなに嫌なのか今にもなきそうです。

「ごめんね。お姉ちゃん」

普段、お姉ちゃんつて呼ばれないなのはちゃんは一気に機嫌を治したようですがらし
い笑顔に戻つた。

「こんちは、なのはさん、アリサさん、すずかさん」

「「星夜（くん）、いたの（んだ）？」」

「ひ、ひどい……」

声をそろえて三人に気づいてもらえないかった星夜は暗雲背負つてしゃがみこみ床にのの次を書き始める。

たしかに酷い、毎日のように一緒になのに……これは、

「……まつたく、星夜、早くお昼、食べよ、ね」

必殺、お願ひ笑顔（ちなみにこれは作為の笑顔つて奴です。）で星夜を元気付けようと
する。

「しゅ、瞬兵、可愛い！」

「むぎゅ！」

そしたら抱きつかれました。

んで、後ろから三つほど暗黒のオーラが漂ってきます。

「星夜くくん」

「星夜く」

「ひつ、なな。なんでござりますか、ナノハサマ、アリササマ、スズカサマ」

「「少しだけ、頭、冷やそうか」「」

「ぎやああああああつ」

目からハイライトがなくなつたお三方の物理制裁の前に星夜は成敗された。合掌

「「瞬兵（くん）、大丈夫！」」

「う、うん、大丈夫だけど」

・・・この三人、過保護だ、と心の底から思いました。

「じゃ、お昼にしようか？」

「はい、なのはちゃんの分」

「ありがとう、瞬兵」

「ふくん、今日は瞬兵が当番の日なんだ」

「うん、お姉ちゃんたちも食べていいよ。星夜も」

「しゅ、瞬兵・・・やつぱりお前は天使だ！」

「ふふ、はい、星夜、あくんして」

ぴしつ！

その瞬間確かに時が止まつたと周りにいた人たちが証言していました。

その後、結局他の三人にも同じ事をしました。

それから将来の話をしたりなのはちゃんがアリサちゃんにレモンぶつけられて襟つかまれてガクガク揺すられたりして楽しそうでした。

午後は特に何も授業も終わつた。

あ、お弁当はみんな、おいしいって食べててくれたよ。

「星夜、帰ろう」

「そーだな、なのはさんたちは塾だつたよな?」

「そーだよ。とにかく早く行こう」

「な、ちょっと、寄り道していかないか?」

星夜は妙に楽しそうに僕を誘う。

「いいけど・・・それより星夜は昨日、夢を見なかつた?」

「夢?」

「うん、誰かが助けを求める夢」

「・・・すまん、夢は見たんだが内容を覚えてないんだ」

むく、星夜は本当にもの忘れが激しいんだから・・・

《助けて・・・》

「は?!」

「聞こえた、星夜?」

「ああ」

僕たちは顔を見合させて次の瞬間には声を感じた方向に駆け出した。

「こつちだよね」

「ああ、間違いない」

・・・誰かが見てる・・・いや、何かを探してた・・・でも、何を・・・

「厄介ごとだね」

「何か言つたか?」

「ううん、何でもない」

少し、気にはなつたが今は助けを求める声を追いかけていく。

しばらくするとそこにはフェレット?らしき動物が傷だらけで倒れていた。
てか・・・人の気配がするんだけど・・・これ、人かも知れない

「こいつか?」

「うん、たぶん、そうだよ」

外傷はそれほど深いわけじゃないし。

どちらかというと栄養失調・・・いや気力不足かな・・・精神力かもしれないけど、僕
が応急処置をしようとするとなのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんが駆けてきた。
「瞬兵くん!」

「なのはちゃん」

「その子は?」

「ここに倒れてた。ざつと見た感じは軽傷、でも少し衰弱してる・・・まあ、でも、病院
に連れてけば明日か、早ければ今夜にでも動けるようになるよ。よし、これでおしま

「いっと」

僕は話しながら応急処置を続けて終わらせる。

「す、すごいのね。瞬兵」

「本当・・・鮮やかな治療だわ」

「ありがとう、アリサちゃん、すずかちゃん、さて、なのはちゃんたちはこの子を動物病院に連れて行つてあげて、星夜も付き合つてあげて、僕はこの辺りをちよつと調べてみるから」

「調べるつて何をだよ」

「そこは、ヒ・ミ・ツ☆」

・・・うわゝ自分でやつといてなんだけど寒気が・・・ま、効果のほどは確かだ四人は真つ赤になつて固まり。

首をぶんぶんと縦に振つて慌てて逃げて行つた。

「・・・そこまで照れなくとも・・・まったく、ま、僕、可愛いらしく、使えるものは使つておかないと」

さて、みんながいなくなつてから僕は辺りを調査しはじめる。

「うーん、やっぱり怪我の原因になりそうなものはないし・・・」

さつきのフェレット?、いや人?・・・なんでもいいや、フェレットもどきというこ

とにしよう・・・

なんでこんな所に倒れてたんだろう。

「・・・誰？」

気配を感じたほうを向き声をかける。

「ここにちは、可愛らしい、お嬢さん」

「・・・・・何かご用ですか？」

現れたのは二十代くらいかな、フードを被つた男・・・あれは・・・杖かな・・・
「いえ、もうそろそろ暗くなるというのに子供が一人でこんな所にいれば声もかけます
よ」

言葉遣いこそ丁寧なものだけどこの人・・・危険な気がする。

「・・・そうですね。そろそろ帰ります。」

「それがいいですよ。怪我をしたくなればね」

「ご忠告、ありがとうございます」

「へ・・・・・/ / / / /」

僕が笑顔で礼をいうと男はフードのせいでよく分からないが多分顔を赤くして照れ
ているんだろう。

「あ、いえ・・・/ / / / /（なんでしようかこの子供・・・お持ちかえ・・・いや、ジエ

ルシードのほうが大事、大事)」

「・・・初対面でも有効なんだ・・・ま、自分では分からぬいけど」

「名前を聞かせていただきいてもよろしいですか?」

「え・・・あ、うん、いいけど」

なんか印象が変わったなあ、ちょっと優しくなった・・・でも、悪寒がするけど

「僕は瞬兵、如月瞬兵」

「瞬兵くんですか・・・私はファルト・リングス、ファルと呼んでください」

「ファルさん・・・ですか」

「ええ、それでは、私は探し物がありますので失礼しますね。」

「探し物・・・そうですか、頑張つてくださいね」

「え、ええ、ありがとうござります／＼／＼＼＼

まあ、目的のためには手段を選ばないタイプみたいだけど、関係のない人間に手をだすような人じやなさそудし。

さてさて、帰つて夕飯の準備を、僕はファルさんと別れて帰路を急ぐ。

ん、あれは・・・目の前に車椅子の女の子が居た。

「こんばんは、はやてちゃん」

「こんばんは、瞬兵くん」

「どうしたんですかこんな時間に？」

「んく、ちよつとな、買い物に時間がかかるつてもうて」

「あ、じゃあ、僕が家までおくりますよ」

「瞬兵くん、一人で帰したらあつちゅうまにさらわれてしまいそうなんやけど……大丈夫なんか？」

「はい、じゃ、ちよつと待つてくださいね」

僕は携帯をとりだして家に電話をかける。

「あ、もしもし、お母さん」

『瞬ちゃん、こんな遅くまでどうしたの?!大丈夫?!怪しい人についていつてない?!』

「ちよつ」

『まさか、まさか、もう誘拐されて』

「お母さん！」

『え、何かしら』

「ちよつとお友達をお家まで送つていくから帰るのがもう少し遅くなります。だから、今日の夕飯、よろしくお願ひしますね。僕の分は要りませんから」

『え、一人じゃあぶな』

僕は最後まで聞かずに通話を終了させて電源を切る。

「・・・・・（瞬兵くん・・・それでいいんか）」

「では参りましようかお姫様」

「・・・よ、よろしくお願ひします／＼／＼

「はい、承りました」

僕たちは話をしながらはやてちゃんの家へと向かっていく。

「瞬兵くん、ええのさつきの電話あんな切り方して」

「大丈夫だよ。ちよつと心配性なだけだから」

「そうなん（心配にもなるわ、瞬兵くん、可愛いし・・まあ、実際は外見からは考え方へんくらい頼りになるんやけど）」

「まあ、本当の子供でもない僕をあんなに心配してくれてありがたいのは確かなんだけど」

「え、そうなん？」

「あ、そういうえば、話してなかつたですよね。僕、星夜と一緒に捨てられてたんですよ。それをお母さんたちが見つけて僕は高町家に星夜は子供が生まれなかつた天野家に拾われたんです」

「星夜くんも？」

「はい、検査の結果では兄弟ではないらしいんです。僕は名字と名前がありましたけ

ど・・・星夜は名前だけで・・・僕が如月つて名乗つてるのはひょっとしたる親が会いに来てくれるかもつてことなんですよ」

「そなんなんや・・・」

「そんなに暗くならないでくださいよ。僕は顔も知らない親についてどうとも思つてしませんから」

はやてちゃんが沈んじやいました・・・

「強いんやね」

「はやてちゃんんだつて強いじやないですか」

「・・・え?」

「一人で頑張つてて凄いです・・・」

「・・・・・・・・・」

「だから、力になれることがあつたら言つてください。お買い物だつて付き合いますし、寂しかつたら電話かけてください。必ず会いにくるとはいえないけど・・・でも、おしゃべりくらいなら付き合います。もつと人に頼つたつていいんですから」

「・・・ありがとう」

なんか、泣いてるみたいだけど・・・ま、ここは見てないということにしておきますかね。

あ、はやてちゃんの家が見えてきた。

「はやてちゃん、家についたよ」

「へ・・・あ・・・ありがとう・・・そ、うや、送つてくれたお礼に夕飯、家で食べていか
へん?」

「はい、そのつもりで夕飯いらないつて、連絡したんですから」

「なんや、ちやつかりしとるなあ」

「うんうん、笑顔に戻った、やつぱりこうでなくつちやね。

「クスクス、ま、夕飯のお礼に僕がご飯をつくりますから」

「フフフ、そりや楽しみや」

「はい、期待しててくださいな」

それから僕は料理を作り始め。はやてちゃんは本を読み始めた。

暫くして僕は出来上がった料理を運ぶ。

「あれ・・・はやてちゃんその本は?・

「これは、さつき部屋から持つてきたんや。昔から家にあるんやけど、どうしても開かな
いんよ」

はやてちゃんの持つてる本からは何か不思議な力を感じる。

「この本についての剣十字だね」

「何で、そんな物を持ってきたんだろう？」

「ま、せつかく瞬兵くんが作ってくれたんやから、冷める前に食べよか」「あ、そうですね」

「いただきま～す」

「む・・・おいしい、めっちゃおいしいやん、な、なんか悔しい」

「お口にあつて何よりです。お姫さま」

「・・・瞬兵くん／＼恥ずかしくないん？」

「ふふ、まあ、ほんの冗談ですから」

「(本当に瞬兵くんのお姫さまになりたいんやけど・・・ライバルは多そうや)」

それから暫くはやてちやんが黙りこんで僕たちは黙々と食事をすすめる。

「(「ジ」ちそまさまでした)」

「あ、はやってちやん、その本、少し見せてもらつてもいいかな?」

「ん、ああ、ええよ。元々、瞬兵くんに本の開きかたを調べてもらお、思うてもつてきた
んや」

「あ、そうなんですか・・・じや、ちょっと失礼して」

「僕が手を触ると本は光を放つ。

「わわっ・・・」

『夜天の書』

「しゅ、瞬兵くん大丈夫なん?」

「あ、はい・・・特に変わった様子はないです。あの今、なにか聞こえなかつた?」

「私は何も・・・あ、本が開いとる」

「あ、本当だ」

僕がさつきの光に驚いて落とした本が開いている。

「でも、この本、白紙だよね」

「白紙やね」

「・・・変なの」

「ま、とにかく、開いたつちゅうことでええよ」

「そうですね」

『助けて・・・』

「え・・・」

「どうかしたん?」

「ごめん、はやてちゃん、僕、ちょっと用事ができたから、もう、帰るね」

「へ・・・」

「ごめんね」

言つて僕は声を感じる方に走り出した。

暫く走り動物病院の辺りに来たときに声が聞こえた。

「風は空に、星は天に」

「なのはちゃんの声？」

「そして、不屈の心は・・・」

初めて聞く・・・いや、なんども助けを求めた声が聞こえる。

「そして、不屈の心は・・・」

「なのはちゃんの声・・・復唱してゐる？」

「「この胸に！」」

とうとう、同時だ・・・

「「この手に魔法を！レイジングハート、セットアップ！」」

『スタンバイレディ、セットアップ』

何か不思議な電子音声のような声が聞こえ。

その場にたどり着く。

なんか桜色の光が見える。

「成功だ！」

なんかフェレットもどきが喋つて喜んでた。

「なのはちゃん！」

「ふえ、瞬兵くん!?」

「その、格好なに？ってか、あの怪物なんなの？」

「私にも分かん」

「来ます！」

フェレット叫んだ瞬間、怪物はなのはちゃんを押しつぶそうと跳んできた。

なのはちゃんとつさに手にしていた杖を怪物に向ける。

『プロテクション』

さつきの電子音声が聞こえた瞬間、なのはちゃんを桃色のバリア？がでて怪物を弾き飛ばす。

「なのはちゃん」

「だから、帰ったほうがいいと言ったのに」

なのはちゃんの方に走りだそうとした時に後ろから声が聞こえ僕は羽交い絞めにされる。

「瞬兵くん!？」

「ファル・・・さん？」

「はい、私ですよ、瞬兵くん、あなた、男の子だつたんですね」

「どうして止めるんですか」

「魔法も使えないあなたが行つても怪我をするだけですよ」

「でも・・・」

「なんだこりや!?」

星夜の声が聞こえた。

次の瞬間怪物は星夜の方に飛び上がり押しつぶそうとする。なのはちゃんは間に合わない。

「くっ」

僕はファルさんを押しのけ星夜の前に飛び出て星夜を突き飛ばす。

周りから見れば瞬間移動でもしたように見えたと思う。

怪物が星夜を助けた僕を押しつぶそうとした瞬間に僕が首にかけていたペンダントが輝き。

『プロテクション』

蒼穹のバリアが僕を守った。

「え・・・なに・・・言葉が・・・使えって?」

僕は心に浮かぶ言葉をほとんど無意識の内に口に出していた。

「全ての境を越えて来たれ」

僕はペンドントを握り締める。

「風は天に」

ペンドントの鎖がはじけ飛ぶ。

「水は地に」

ペンドントの輝きが増す。

「光は狭間に」

ペンドントを掲げる。

「星は宇宙（そら）に」

僕の真上に光の円が現れペンドントは其処に飛び込む。

「そして未来を拓く力はこの心に！」

光の円から金色の杖がゆっくりと降りてくる。

「シユテルシア、セットアップ！」

『バリアジャケット、ダウンロード』

杖を握り締めるのと同時に僕の服装が変わった。

なんか女の子みたいだ。

「すごい・・・なのはよりも強い力を感じる・・・それにあれば、デバイスじゃないみた
いだ（にしても可愛いなあ／＼／＼）」

フレットもどきの声が聞こえた。

「すばらしい力ですね。瞬兵くん」

「フルさん……あなたは」

「しかし、美しい翼ですね」

〔八〕

僕は後ろを見る。そこには光輝く綺麗な翼が・・・つて

「ええええええ!?」

パタパタと翼を動かしてみる。動かすたびに光が煌いて……うん、綺麗だ。

「じゃなくつて、何これえええええつ!?」

「しゆ、瞬兵？」

あ、星夜、よかつた、大丈夫?」

あ、ああ・・・」

一
星
夜
？

動きが止まつた星夜を心配して、声をかけた次の瞬間

一 可愛い

一
むぎゅつ

抱きつかれ次の瞬間、光弾が二つ（ちなみに一つはなのはちゃん、もう一つは何故か

（ファルさんが放つた）が星夜を引き離し鎖のような物が星夜を縛り上げた。

最後の鎖はフェレットもどきが使ったみたいだ。

「なのはちゃん？ ファルさん？ フェレットくん？」

「にや、にやはははははは……」

「いけませんねえ、もう少し危機感を持つてください」

「（コクコク）」

・・・・・なのはちゃんは冷や汗かいて、ファルさんはなんか超笑顔で怒り、その言葉にうなづくフェレットもどき・・・何、この展開は…

「つて、そんなことより怪物！」

怪物を探すとちょうど、なのはちゃんを押しつぶそうとして飛び上がっていた。

「させないっ」

僕はなのはちゃんの前に移動し杖を突き出す。

「エルセナ！」

「ずどうんつ！」

さつきよりも強力なバリアで飛び掛ってきた怪物を押し返し。

「グランディ！」

「ズビビビビビッ！」

地面から突き出した土の桐が怪物を貫き大地に縫い付ける。

「今だ、封印を！」

封印つてなにを？

「え、あ・・・」

なのはちやんが慌てて杖を怪物に向ける。

「リリカル、マジカル・・・」

呪文を唱える。

「封印すべきは忌まわしき器！ ジュエルシード！」

ジュエルシードつてなに？

「ジュエルシード！ 封印！」

『シリリングモード、セットアップ』

あ、あの声つてあの杖なんだ。

杖の先端の部分が上がつて、桃色の羽が出てくる。

杖から出た桃色のリボンのようなものが怪物に巻き付いた。

『スタンバイ、レディ』

『ジュエルシード！ シリアル21！ 封印！』

『シリリング』

さらに、桃色のリボンのようなものが杖から出て、怪物を包み込み。なのはちゃんの目の前に青い宝石が出てくる。

「あ・・・」

「これがジュエルシードです。レイジングハートで触れてみてください。」

レイジングハート・・・それがあの杖の名前かな?

なのはちゃんがレイジングハートで青い宝石に触ると、赤い宝石の部分に入つていった。

『リシートナンバー21』

なのはちゃんの服装が元に戻る。

フェレットもどきと何か話しているけど僕は警戒を解かずにファルさんを見つめる。

「・・・どうしました。瞬兵くん」

「あなたの探し物つて、今の、青い宝石なんじやないですか?」

僕の言葉を聴いてフェレットもどきは警戒の眼でファルさんを見る。

「ええ、そのとおりなんですけど・・・今回はおもしろいものを見せていただきましたし今日はこれで退かせてもらいます」

ファルさんはゆっくりとした足取りでこちらに近づいてくる。

「それでは、またお会いしましょう、瞬兵くん」

チュツ！

・・・どこぞの騎士が主に忠誠を誓うようなキスを手の甲にされた。
黒いオーラが三つほど後ろから漂うが、

「それと、そのジュエルシードも最終的には私がいただきますので。瞬兵くんも一緒に」
後ろから漂うオーラはさらに強くなつたがファルさんは意に解さず無敵な笑顔のま
まその場から消えた。

「・・・転移魔法」

「・・・つて、そんなことよりも星夜、大丈夫？」

星夜は相変わらず光の鎖に縛られたままだ。

「ああ、大丈夫だ」

「ねえ、フェレットくん、この鎖、速く解いてあげてよ」

「ああ、うん、今、解くよ」

鎖が消え星夜は立ち上がりつて腕を回したりしている。

「本当にどうも、ありが」

パタン！

フェレットもどきがその場に倒れた。

そしたら遠くからサイレンの音が聞こえてきて・・・つてサイレン!?

「なのはちゃん、星夜、行くよ！」

僕は慌てて杖をペンダントに戻す。

服も元に戻った。

そしてフェレットもどきを抱き上げる。

「う、うん」

「ああ」

「と、とりあえずごめんなさい！」

なのはちゃん、一体、何に謝つてるのかな？

あれから僕たちは近くの公園まで走り、フェレットもどきがなんか僕やなのはちゃん、星夜にまで謝つてきた。

僕達は少し休憩してから家に帰つた。

星夜には事情を後で説明するということでとりあえず今日は帰つてもらい。

僕となのはちゃんはお姉ちゃん（この場合は美由希さん次からは美由姉と記す）やお兄ちゃんたちに怒られて、お母さんがユーノくん（フェレットもどきの名前はユーノというらしい）に悶絶して絞め殺しそうになつたりお父さんの妙なボケが炸裂したりして、僕となのはちゃんはとりあえず僕の部屋に集まつた。

僕たちは学年が違うので今、話を聞くしかないのだ。

「それじゃ、ユーノくんはそのジエエルシードの発掘者なんだ」

「うん、それでそれを調査団が運んでいたんだけど……その最中に事故か事件か分から
ないけど何かが起こって、ジユエルシードがこの町に散らばつちやつたんだ」

僕は二人の会話を黙つて聞いている。

「责任感が強いんだね。ユーノくんは」

「でも、ファルさんは、はつきりとジユエルシードが目的つて言つてた。狙いが願いを叶
える宝石となれば……調査団を襲つたのはファルさん……とは限らないけど、でも、
人為的な可能性はかなり高いね」

「ねえ、瞬兵くん、あのファルさんつてどんな人？」

「さあ、今日会つたばかりだもん」

「でも、かなりの実力者のように僕には思えたよ。でも、この世界に三人も僕の声が聞こ
えた人がいるなんて」

「僕になのはちゃんと星夜か……これつて珍しいの？」

「うん……かなり」

何だかなのはが静かだなと思つて視線をやる。

「スースー……」

え？……なのはちゃん、いつの間に寝てるんだか……

「あ、そだ」

『ユーノくん、聞こえる?』

『え! 瞬兵!?』

『あ、聞こえたね。これが僕たちを呼んだ奴だよね』

『うん、念話っていうんだ』

『ふうん、念話があ・・・まあいや、そろそろ寝ようか』

『さて、なのはちゃんを部屋に運ばないと』

僕はなのはちゃんを部屋に運び、ユーノくんを抱き上げる。

「ユーノくんは男の子だよね」

「うん・・・って僕が人だつて分かるの?」

「気配がね。人のものだから」

「へえ・・・」

「さ、寝ようか」

僕はユーノくんを抱いたまま床についた。

「(瞬兵//・・・幸せ・・・)」

第二話 僕とジュエルシードとファルさんと

「なのはちゃん・・・」

僕は呆れ果てた。

事の起こりはジュエルシードの反応があつたつてことなんだけど、

「おはよう、アリサちゃん、すずかちゃん」

「おはようです、アリサお姉ちゃん、すずかお姉ちゃん」
朝、登校時のバスで二人にあつた。

今日は珍しくはぐれなかつた。

なんかうれしいのでニコニコして いた ようで周りが顔を赤くしてポーつとして、話
しかけてくるのは本当に親しい人だけで 楽でよかつた。

「そういえば昨日」

三人は何か色々と話している。

動物病院の壁がどうのとか・・・あ、昨日のあれか・・・そういうれば壊れてたねえ

「瞬兵、聞いてるの？」

「動物病院の事？」

アリサちゃんに聞かれてつきり動物病院のことかと思つてたら

「フェレットの事だよ瞬兵くん、なのはちゃんの家にいるって聞いたよ」

「あ、うん、ユーノくんだね。昨日、抱きかかえて寝たんだあつたかくて気持ちよかつた」
すずかちゃんにユーノくんのことだと訂正された。

「「抱きかかえて・・・?」」

・・・朝っぱらから黒オーラ出さなくとも、ていうかフェレット（人間だけど）にそこまで怒らなくても、

「瞬兵くん、私が布団に入つてると怒るのに」

「当たり前だよ。なのはちゃん、人と動物、おまけに女の子と男の子、そりや怒るでしょ、
ユーノ君は動物だし男の子だもん」

朝からどつと疲れて教室です。相変わらず声をかけてくる人の多いこと

「おはよう、星夜」

「おはよう、瞬兵・・・で、昨日の事、説明してくれよ」

「ん、今日の放課後ね・・・だつて（魔法なんてこんな所で堂々と話せないでしょ）」

「ああ、分かった」

んで、あつという間に放課後、僕たちは昨日戦った場所の近くで人のいない場所で話を始めた。

あ、ちなみにお昼はいつもと同じメンバーで食べたよ。

「ふうん、ジュエルシードねえ……」

「そ、願いを叶える宝石だそうだけど……どうも叶え方に問題があるものらしいよ」

「ま、あんな怪物が出てくりやそうだろうな」

「そだ」

《星夜、星夜》

「ん、何だ瞬兵？」

《これ念話つて、いうんだって、少し練習してみようよ。できると離れてても話ができる

よ》

「瞬兵と……分かつた、やつてみる」

暫く念話の練習をして、星夜が念話を使えるようになつてから僕は買い物があるので星夜と分かれることにした。

「さくて、お買い物、お買い物♪」

僕は商店街に足を踏み入れ……ジュエルシードの気配、神社からだ。
せつかくのお買い物の邪魔を……

僕は、急いで神社に向かいそこで冒頭の状態に陥った。

なのはちゃんはレイジングハートの起動パスワードを忘れてしまつたらしい。

怪物となつた生物がなのはちゃんに遅いかかる。

・・・僕は呆れていて反応が遅れてしまつた。

「危ない、なのはちゃん！」

なのはちゃんも気づいたが遅かつた。

なのはちゃんが攻撃を喰らうと思つた瞬間になのはちゃんがバリアジャケット（つて

よぶらしい服）に変身して、バリアで生物を弾いた。

「すゞい、起動パスワードなしで起動させるなんて」

「僕も、シユテルシア、セットアップ！」

『バリアジャケット、ダウンロード』

僕も変身して空を飛ぶ、この光の翼、ちゃんと飛べるんだということを僕は知つた。

でも、ユーノくん曰く、僕のこの杖はデバイスじやないらしいんだけど、

「瞬兵くん、何で、飛んでるの？」

「ん～この翼、飛べるみたいなんだ」

「へえ～、いいなあ」

「なのはちゃんも飛べるんじゃないかな・・・」

「二人とも、話してないで速く、封印を！」

「にやはは、ごめん、ユーノくん」

「でも、待つてくれるなんて・・・いい怪物だね」

「瞬兵、それ、何か違う」

おお、ユーノくんに突っ込まれた。

「とにかく、バレッジファイア！」

どおおおん！

爆発が怪物を吹き飛ばし、

「シックスレイド！」

七色の光のバインドで縛る。

「なのはちゃん！」

「分かった！」

「僕は向こうの相手をするから」

「向こうって、ファルさん、いつの間に・・・」

「毎回、封印が終わる頃に来て様子を見てるだけ怪しいよね」

「ユーノくんもそう思う？・・・ま、とにかく、お願ひ、なのはちゃん」

「ん！リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル16！」

「ここにちは、 ファルさん」

「ここにちは、 瞬兵くん」

「もう、 やつぱり、 ファルさんはかなり強いな・・・隙が殆どない。

「もう、 封印は終わつたので諦めて帰つていただけませんか？」

「ふむ、 あなたが言うならそれでも構いませんよ。最終的には私が手に入れるので誰が何個持つていようと関係ありませんから、 まあ、 所有者の数は少ないほうがいいんですけど、 それに、 封印されてるものを見つたほうが効率的です。自分で探さなくていいんですから、 だから暫くはあなたたちが集めるのを見学させてもらいます」

「言つてくれますね。 そんなに、 簡単に盗らせると思いますか？」

「いいえ、 ですが人間、 必ず失敗というもがあるんですよ」

「確かにそれは事実だけね」

「だめだ、 隙はあるけど攻めるには決定的に足りない。」

「まいつたねこれは、 しかも僕じやなくてなのはちゃんとユーノくんの方を狙つてる。僕の弱点をよく分かつてらつしやる。」

「瞬兵くん、 終わつたよ」

「（）ぐるうさま、なのはちゃん」

「では、今日も帰らせていただきます。瞬兵くん、またお会いしましよう」

転移魔法を使いファルさんは消えていった。

「・・・ふう」

僕は変身を解除する。なのはちゃんも変身を解いた。

でも、コレって変身なのかな?

ま、別にいいかな、にしても、僕とファルさんつて一応は敵どうしのはずなんだけど
なあ・・・

「瞬兵くん、ファルさんには気を許しちゃダメだよ」

「分かってるよ。敵なんだから」

「違うよ。そういうことじやないんだよ」

「??」

『分かつてないみたいだよ。なのは』

『私が瞬兵くんを魔の手から守らないとユーノくんも手伝つてね』

『もちろんだよ。なのは（二人は僕が守らないと）』

『そういえば、ユーノくん、瞬兵くんと一緒に寝たんだつてね・・・後でおしおき』

『ええええええええええつ！』

「なのはちゃん、ユーノくん、帰ろう」

「うん」

「そうだね」

「帰り道は三人で……二人と一匹かも知れないけど……でも、ユーノくん人間だし三人でいいよね。」

「あ、そういうえば、明日はお父さんのサッカーチーム、試合だつけ」「うん、そうだよ。アリサちゃんとすずかちゃんと応援にいくんだ」

「そつか……僕は明日は特に予定ないし、図書館にでも行こうかな」

「あ、なら私たちと一緒に応援しに行こうよ」

「んく、でも、魔法の練習もしたいし……時間が余つたら行くよ」

「そつか、星夜くんも応援にくるみたいだよ」

「星夜も行くのか……それにしてもファルさんはどんな願いを叶えたくてジュエルシードを集めてるんだろう。」

「あの人、私利私欲で集めているわけでもなさそうだけど……」

「ま、いいか、考えたつて分からぬよね」

「何が？」

「ファルさんの目的」

「うん、考えても分からぬよな。やつぱり、直接お話を聞かなきや
その夜、

「さ、ユーノくん、寝よう」

「ぼ、僕はこのバスケットで寝るから」

「何で?」

「(それはなのはが怖いから)」

「あ!・・・ユーノくん!」

「うん」

「ばたむ!

ドアを開いてなのはちゃんが駆け込んでくる。

「瞬兵くん!」

「うん、シユテルシア、セットアップ!」

『バリアジャケット、ダウンロード』

「僕は変身する。

「瞬兵くん? 何で家の中で」

「いいから捕まつて。ユーノくんも」

「あ、うん」

「わかった」

ユーノくん・・・何故に胸元に入るの?

なのはちゃんもいつものように黒オーラださないで・・・

「いや、とにかく・・・（魔力の場所は・・・学校！）開け次元の扉、星と星を繋ぐ時の回廊、全ての境を越え我等を彼の地に導け！スターイゲート！」
僕たちが来たのは僕たちが通う学校、いつもお昼を食べてる場所、屋上に居るみたいだ。

「なのはちゃん、先に行くね」

「え、しゆ」

僕はユーノくんをなのはちゃんに預けて光の翼をはためかせて一気に屋上へと飛び上がる。

「風に躍るものよ満ちたる水気（すいき）を含みて猛る渦となれ！フエザーダスト！」
光の翼から舞い散る煌きが羽根となつて怪物に襲い掛かる。

「行くよ。シユテルシア」

『イエス、マイマスター』

「舞い踊れ光の舞を！エレメンタルダンス！」

僕の周囲に現れたいくつもの光の弾が怪物の周りを舞い踊り魔法弾の色と同じ色の光線を次々と放つ。

「瞬兵くん！」

「あ、なのはちゃん、飛べるようになつたんだ」

なのはちゃんの足に小さな桜色の羽根がついている。

どうやらそれで飛んでいるようだ。

「とにかく、封印、よろしくね」

「分かつた」

なのはちゃんが封印に行つたのを見届けて僕は虚空に視線を向ける。

「いるんでしょう、ファルさん」

「ええ、もちろん」

僕の声に応えて空中に姿を現すファルさん、僕は杖をファルさんに向ける。

「いつものことですが、よく分かりますね」

「気配を読むのは得意だからね。逆に隠すのも得意だけど」

「それにもしても、お二人ともすばらしいですね。魔法を知つたばかりとはとても思えません」

「そうですか・・・所で、お話、聴かせてもらえませんか？」

「話?」

「あなたが、何故ジュエルシードを求めるのかを……です」

「……それを聴いてどうしようど?」

「手伝えることならお手伝いしようかと思つて」

「それは、嬉しいですが、残念ながらその提案は却下です。瞬兵くんに協力していただいてもおそらくどうにもなりませんから」

「そつか……交渉決裂だね。でも、理由が分からぬなら渡すわけにはいかないよ。だつて、ジュエルシードが危険な物だつてことは事実なんだから」

「そうですね。そんな危険な物を理由も知らずに渡してもらえるとは私も思つてません。私は目的のためには手段を選びませんが、それでも他者を自分の事情に巻き込むのを肯定しているわけでもありません。ですから巻き込まないですむならそれでいいんです。だから理由は話せません」

「……つまり、あなたは僕たちを巻き込みたくないから理由を話さずにジュエルシードを奪うためにのみ僕たちと戦うと?」

「そういうことです」

「分かつたことといえば、まずあなたがしようとしていることは危険ではあるけれど、それは悪いことに使うのではない。さらに僕たちを巻き込まないって発言からすると何

かと戦うつもりで、そしてそれはとても強く危険な存在、死ぬ可能性が極めて高い事を
しようとしている」

「…………驚きましたね。そこまで分かつてしまふとは、正解ですよ。自分の命の保
障もできないのに他の人ならいざしらず貴方だけは絶対に巻き込めません、ええ、貴方
だけは」

「僕だけは？」

僕が不信に想い問いただそうとした瞬間に桜色の砲撃がファルさんを襲う……ファ
ルさんはあっさりと避けたど、

「それ以上はダメなの」

「そうだよ。これ以上は近づけさせない」

「なのはちゃん？ ユーノくん？」

「瞬兵くんは下がってるの」

「そうだよ、こいつは危険だよ（主に身体が）」

「いやいや、立派なナイトですねえ、でも、私も負けるつもりはありませんよ」

僕はもう、どうでもいいやという気分で三人の口げんかを右から左に流している。

すると突然、後ろに回りこんだファルさんにほっぺにキスされた。その瞬間、砲撃が
ファルさんを襲うが転移で逃げてしまった。

「次こそは絶対に仕留めるの、ね、ユーノくん」

「うん、もちろんだよ。なのは」

「二人が怖い……別にほつぺくらい構わないのに……
いつもの二人はどこへ？」

「とにかく、帰ろうよ。なのはちゃん、ユーノくん」

「了解なの」

「うん、ジュエルシードもこれで五つ目だね」

「帰ろうとした瞬間になのはちゃんがバランスを崩して倒れそうになり慌てて支える。

「なのはちゃん、大丈夫!」

「大丈夫……ちょっと疲れちゃつただけだから」

「本当に大丈夫?かなり顔色よくないよ」

「にやはは、へーきへーき……」

「……全然、平気そういうじゃないし、仕方ないな、僕はなのはちゃんを抱きかかえる。

お姫様抱つこという奴だ。

「ほえ!?瞬兵くん、だ、大丈夫だから……」

「いいから、大人しくてる」

「はい……」

「ユーノくん、おいで」

ユーノくんはなのはちゃんの上にびよんと飛び乗る。

じや、ゲート・オープン、僕たちはなのはちゃん部屋まで転移する。

それと同時に僕もなのはちゃんもバリアジャケットを解除してなのはちゃんをベッドの上に寝かせる。

「ごめんね。瞬兵くん」

「別にいいよ。それよりしつかり休まないとダメだよ。無理しても成果はでないんだからね。わ・かっ・た・ね☆」

「はい、ごめんなさい（うう、凄く怒ってる）」

「じゃ、ユーノくん、行こう」

「うん、なのは、しつかり休んでね」

僕とユーノくんが部屋から出ようとすると、

「まつて・・・あの」

「・・・なに、なのはちゃん」

「今日・・・一緒に・・・寝てくれない？」

「・・・まつたく、仕方ないなあ

「いいよ。まったく、甘えんばなお姉ちゃんなんだから」

「・・・//（その笑顔は反則・・・あ、ダメ）」

「//（・・・可愛い・・・あ、もうダメ）」「ん？・・・つてユーノくん!?なのはちゃん!?

「ちよつ、大丈・・・ま、いいか、寝たみたいだし気絶してるのでかもしれないけど」
ユーノくんを抱えて僕はなのはちゃん隣に入る。

「おやすみ、なのはちゃん、ユーノくん」

そして次の日の朝、

「ん・・・朝・・・時間は・・・えええええええつ!?」「にやああああああつ!?何、何?」

「キュウウウウウウウツ!?」

「なのはちゃん、急いで着替えて僕も部屋に戻るから」
僕は大慌てで部屋を出て行こうとする。

「え、何で?」

「時計、時計」

それだけ言つて僕は部屋に着替えに戻り、一拍の後に、
「ほえええええええええええつ!?

どつかで聴いたことがあるような叫びが響きどつたんばつたんと素晴らしい騒音を立てるなのはちゃんとやんなのでした。

「ユーノくんもなのはちゃんも出かけたし、僕も行こう」

僕は一人でなのはちゃんと魔法の練習をしている場所まで行く。
ではでは、魔法の練習を始めましょうと、

「ジュテルシア、限定空間を」

『了解、限定空間現出』

僕の周囲がキラキラとした光が舞う青い空間に変化する。

「ジュテルシア、仮想敵を」

『了解、敵数、二百』

ジュテルシアが応え、黒い人型の影が二百体、僕に襲い掛かってくる。

僕はジュテルシアを杖の状態に構える。バリアジャケットは展開しない。

「まずは小手調べ・・・」

僕は空に飛びあがり。

「クリスタルダスト！」

杖を振る。

現れた、氷の刃が虚空を裂き影に降り注ぐ三十体ほど氷の刃を切り裂き消える。

「次は誘導弾の練習、プリズミックスファイア！」

僕の周りに様々な色の光弾が現れるその数は四十個、普通の人間なら絶対無理、僕でも同時に動かすとかなりきつい数だ。

「GO！」

ざあつ！

光弾が一斉に動きだし僕に近い影を攻撃しだす一体につき弾が一つで一体は五回弾を喰らうと消えるように設定されている。

それから數十分後、僕は全ての影を倒していた。

「はあっ、はあっ、はあっ……さすがに疲れた」

僕はその場に座り込んで息を整える。

「シユテルシア、限定空間解除」

『限定空間解除』

辺りの景色が元にもどり僕はその場にゴロンと横になる。

ん、草が気持ちいい、日差しもぽかぽか……眠い……

「おやおや、こんな所で寝てると狼に襲われてしましますよ」「ん……うん……」

僕はゆっくりと眼を開ける。

「ファル……さん？」

「はい、私ですよ」

「何でこんなところに？」

「あなたの可愛い寝顔に惹かれまして」

「狼つて？」

「おや、昔からいいませんか？男は狼だと」

「・・・それ、何か違うと思う」

「そうですか？」

「うん」

ファルさんつてこんなずれた人だっけ？

「それで何か御用ですか？」

「いえ、貴方の寝顔を見に来ただけです」

本気なんだろ？か・・・でも、何か寂しそうな瞳・・・

「ファルさん、もう一度、聞いていいですか？」

「何をです」

「ファルさんがジュエルシードを探す訳を」

「残念ですが答えは前回と同じです」

まあ、そんな簡単に答えは変わらないよね。

「ねえ、ファルさんも、横になつたら？ 相変わらずのローブにフードで怪しい格好だけどここなら誰もこないし」

「怪しいですか？」

「黒いローブに黒いフード、誰が見ても怪しいと思うけど」

「・・・これでどうです」

そう言つてフードを外したファルさんは大方の予想通りかなりの美青年・・・まだ美少年かも知れない。

「うん、素敵ですよファルさん」

「・・・あ、ありがとうございます／＼」

ファルさんは僕の隣に横になり僕たちは一緒に空を見上げる。

「気持ちいいですね」

「そうですね。ファルさん、少しは肩の力を抜かないとダメですよ。今みたいに」

「ええ、とても、大事なことですよね。そんな当たり前のこと、ずっと忘れていた気がします」

「さて、僕はそろそろ行かないと、ゆっくりしていくつてくださいねファルさん」

「ええ、ありが……とう……ござ……」

「クスクスクス、寝ちゃつた……じゃあ、またね、ファルさん」

僕はファルさんをその場に残して帰路へついた。

翠屋の近くにまでくるとそこにお父さんのサツカーチームの選手がケーキを食べて
いた。

「試合、勝つたんだ」

「お~い、瞬兵!」

星夜がそこに居た。

星夜が僕を呼んだ瞬間に視線が集中したのは気のせいではないだろう。

・・・なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんも一緒かあ、とりあえず僕は空い
てる席に腰を下ろす。

「ねえ、何で星夜もごちそうになってるの? 星夜つてサツカーチームに入つてないよね」

「それは」

「試合に出れなくなつた人の変わりに出てくれたの」

なのはちゃん、思いつきり星夜の言葉を遮つたよ。

「なかなかの活躍だつたわよ」

「うん、すごかつたよ」

アリサちゃんとすずかちゃんが珍しく星夜を褒めてる。

「あれ、なのはちゃん、どうかしたの？」

「う、ううん、なんでもない（瞬兵くんが帰るまえにジユエルシードの気配を感じたような気がしたんだけど）」

「それなら、いいけど（んと・・・ジユエルシードの気配を感じるけど発動してないみたい・・・これじやさすがにどこにあるかまでは分からない）」

「おい、瞬兵」

「なに、せ、むぐつ」

呼ばれて星夜のほうを振り向いたら口にケーキを突っ込まれた。

「おいしいだろ」

「むぐむぐ、ごくん・・・おいしいのは当たり前でしょ、お母さんが作ったんだし、僕が作ったのも入ってるよ」

「〔〔（間接キス・・・星夜（くん）、あとでシメる）〕〕

何か、お嬢様がたが怒つてる・・・星夜、ご愁傷さま。

「でも、星夜がねえ・・・」

僕は星夜をジト目で見る。

「な、何だよ。その目は」

「だつて星夜が休みの日にわざわざサッカーチームの応援じやなくて助つ人なんて」

「それは・・・（瞬兵が応援にくるかもつて聞いたからなんて言えない）」

「それはね。瞬兵くんが応援にくるかもつて私がいつたからだよ」

「す、すずかさん・・・」

「ごんつ！」

「へえ・・・僕が、応援にくるかも、ねえ・・・不潔」

星夜はテーブルに突つ伏して、その頭の上に何かが落ちたような音が聞こえた気がする。

「変態、すけべ、最低」

「がんつごんつげんつ！」

今度は三連発分聞こえた気がする。

「「（今日は、許してあげよう）」」

ん、お嬢様方の怒りが何故か収まつたようだ。

「ううう・・・瞬兵！」

うわ、本気で泣きそう・・・仕方ないなあ、

「星夜、今日は頑張つたんだね。えらいえらい」

笑顔で星夜の頭をなでる。

それだけで星夜の機嫌はあつという間に元に戻った。

単純・・・いいのだろうかこんなので？

お嬢様方はまた怒つてるし、別にたいしたことじゃないのに、それからいつものようにおしゃべりをして星夜がひつひついて来て鉄拳制裁されて隠し撮りしてた奴が星夜に沈められて、これといって変わったこともなく夜になつた。

ユーノくんは鉄拳制裁とか隠し撮りとか明らかに異常だつて言つてたけれど、僕にとっては毎日のように起ることなのでよく分からぬ。

「？」

『ユーノくん、なのはちゃん、僕の部屋へ！』

『今、いくの』

『僕も感じたよ』

『シユテルシア、セツトアップ！』

『バリアジャケット、ダウンロード』

僕がバリアジャケットを纏うの殆ど同時に二人が入ってくる。
なのはちゃんがセットアップするのを見届けて、

「捕まつて！」

二人がくつついたのを確認して、ゲートを開く。

「ゲートオープン！」

そして、転移した。

「これは……」

転移した瞬間に結界を展開した。

そこで見たものは、巨大なうごめく大樹。

「……私の……せいだ……。気づいてたのに……」

「僕も……感じてたのに……」

まさか、ここまで大事になるなんて、こんなことならあの時、探しにいけばよかつた。
「行こう、なのはちゃん、これは僕たちのミスだ」

「うん！」

「僕が被害が広がらないように抑えるから」

「うん、私がサーチする」

「ファイア・ブレット！」

「ズズズズズズ！」

連續で放つ炎の弾と

「トルネード・アサルト！」

竜巻を組み合わせて炎の竜巻で大樹の動きを止めて僕も魔法でのサーチを開始する。

「見つけた！」

僕となのははほぼ同時にジエルシードを発見し、

「なのはちゃん！」

「うん！」

「スター・ライト」

「ディバイン」

「バスターー！」

僕となのはちゃんが同時に放つた魔法は僕らが探し出した目標を見事に直撃し、ジユエルシードを封印した。

「なのはちゃん」

「瞬兵くん」

「悔しいね」

「うん」

こうなる前に回収できたかもしれない。

それは僕たちの心に確かに傷として残り、同時に次はこんなことは起こせないと強く決意させた。

ユーノくんは僕たちを一生懸命に励ましてくれて凄く嬉しかった。

「すごい、威力ですねえ・・・」

「ファルさん・・・」

僕が声がしたほうに振り向くと僕とファルさんの間になのはちゃんとユーノくんが割り込んでくる。

「瞬兵くんには近づけさせないの」

「僕もそのつもりだよ」

「おやおや、随分嫌われたものですね」

「当たり前なの、この間のお返し、デイバインバスター！」

さつきまでの落ち込みは一体なんだつたの？
なのはちゃんの砲撃をファルさんが避けそこに、

「チエーンバインド！」

ユーノくんのバインドが飛ぶがあつさりとかわされる。

「ふむ、まだまだ、未熟ですね。これでは」

ファルさんの姿が消え次の瞬間、

ゴスツ！

僕の拳がファルさんを捉えていた。

「あいたたたたた」

「ファルさん、 そう何度も好きにさせてあげません。 この間は聞き流していて反応できなかつたけど」

「分かりました、 今日は諦めます、 では、 またお会いしましょう」

「 ファルさん転移で帰つていつた。

本当に一体全体、 なにがどうなつてるんだか・・・

「とにかく、 今日は帰ろうよ」

「賛成」

第三話 ライバル登場？僕のライバルは多分ファルさん だと思う

みなさん、こんにちは、如月瞬兵くんです。

あれから一週間、時の流れは速いです。

「なのはちゃん、まだ、時間かかるのかなあ」

「ほーら、ユーノ。おいでおいで♪」

「キュッ？」

僕は今、美由姉と一緒にリビングに居る。

美由姉に呼ばれたユーノくんは走つていって、飛びついた。

「あはっ！よしよし。ユーノは賢いね♪」

・・・まあ、あたりまえだよね。

人間なんだからさ、今は美由姉の顔を舐めている。

・・・・・正体バレたら殺（や）られるんじやないかとかなり心配、何せ美由姉は嫌がるユーノくんをお風呂に引きずり込んでたし。

お父さんもお兄ちゃんも過保護だしなあ・・・恐ろしいことになりそうだ。

まあ、可哀想だから、あれからお風呂は僕が入れてあげてる。

たまに変な視線が来るけど、ユーノくんはそんなことしないと思うし。

(実際は毎回じーっと見てる)

「なのは、まだか?」

「ごめん。もうちょっと~」

僕たちはこれからお出かけなんだけど・・・

なのはちゃんの準備が終わりません。

時間がかかりすぎだと思いますが女の子はそうゆうもの・・・だそうです。

お母さんと美由姉が、そう言つてました。

あ、僕の準備はばっちり終わつてます。

「あれ? 今日はどこかにお出かけ?」

美由姉が聞いてくる。

「言つてなかつたつけ?」

「うん、聞いてない」

「すずかちゃん家でお茶会です」

そう、今日、僕となのはちゃんの二人は月村家のお茶会に招待されてるのです。アレから暫くしてなのはちゃんの準備も無事に完了。

星夜も誘われるので途中で合流予定なんですが、待ち合わせ場所に…まだ、来ません。

待ち合わせは二十分前なのに、何、やつてんだろう。

「来ない」

「来ないな」

「来ないね」

お兄ちゃんがちよつと怒つてます。

そんなに早く、忍さんに会いたいんだ。

あ、忍さんはお兄ちゃんの恋人、僕は苦手だからあまり顔を会わせないんだけど、お兄ちゃん忍さんに会いにいくんです。

あ、來た。

「はあ、はあ、はあ、遅れて、悪い！」

「本当に遅いよ。星夜」

「あはは、寝坊しちまつてな」

「・・・はあ、いいよ。行こうなのはちゃん、お兄ちゃん」

「ああ・・・」

「うん」

僕たちは目的の場所へと歩を進める。

そして僕達は今、すずかちゃんの家の前に居ます。

「予定の時間より随分遅れちゃったね。アリサちゃんたち怒つてるかな?」

「多分、アリサちゃんは怒つてると思うよ。なのはちゃん、遅れるつて連絡入れてないよね」

「忘れてた……」

まあ、僕も忘れてたんだからなのはちゃんのこと言えないけど……

「何度が来てるけど、やっぱデケエ家だな」

星夜、家が小さくなつたりしたら怖いよ。

「そんなことより、星夜、遅刻したの星夜のせいだからね」

少し遅れてもいいように余裕のある時間に待ち合わせたのに、あんなに遅れるから悪いんだよ。

「……それはつまり」

「きっとおしおき」

「やつぱり、そうなるのか」

「にやはははは……」

にしても、お兄ちゃん、星夜が来てから無言で星夜を睨んでる。
お兄ちゃん一言も話さないのは怖いよ。

《なあ、瞬兵》

《なに?》

《なんで恭也さんは俺を睨んでるんだ?》

《うーん、俺の大事な妹と弟に手をだすな・・・かな》

星夜だってお兄ちゃんにとつて弟みたいなものなのに過保護度合いがなんでこんなに
違うのかなあ?

ピンポーン!

僕が星夜と話しているうちになのはちゃんが呼び鈴を鳴らして、しばらく待つて
いる
と、扉が開きました。

「恭也様、瞬兵様、星夜様、なのはお嬢様、いらっしゃいませ」

「ああ、お招きに預かったよ」

「こんにちわ~」

「お久しぶりです、ノエルさん」

「こんちは」

僕達を出迎えてくれたのは、忍さんの専属メイドのノエルさん。

無口な人です。

美人でもあります。

「はい。ではどうぞ。こちらです」

そして僕達はノエルさんに、すずかちゃんの所へ連れてつてもらいました。当然ですけどアリサちゃんはもう来ていてすずかちゃんとお茶を飲んでる。

忍さんもいるし。

「あつ、瞬兵くん、星夜くん、なのはちゃん、恭也さん」

「遅れて、ごめ」

僕が二人に謝ろうとした瞬間、月村家に住む大量の猫が飛び掛ってきた。

すどしゃつ！

「「「「(ト)」に来るたびにこうなる・・・し」」

「お、重い～、会えて嬉しいのは分かつたらどいてえ！」

あれから数分後、僕は猫地獄から抜け出した。

「ひどいよ、僕を見捨ててみんなで楽しそうにお茶するなんて」

「猫たちがこんなに楽しそうにするのは瞬兵くんが来てくれたときだけだから」

さすがすずかちゃん、相変わらずの性格だ……ならば、

「ひどい……みんな、大っ嫌い!」

目を潤ませて泣きそうな顔をしさらにそこに上目遣いで一言を放つ。

ぼんつ!

次の瞬間、その場に居た皆様は完全に硬直しつつも顔を赤くし何か恍惚とした顔で倒れた。

秘儀、涙目で拗ねた顔、うむ、凄い威力だ。

「でも、どうしようか、これ……」

なんか、萌えとか、うふふふふとか、もつといじめたいとか、カオスな寝言が聞こえる。

あ、鼻血……

……なに、この危険な空間は、

僕、本当にこの人たちの友達や家族やつてていいのだろうか?

「……ユーノくん、ユーノくん」

「瞬兵／＼／＼

「ユーノくんまで……」

・・・・・

「・・・うう、さびしい、誰でもいいから早く現実に帰つてよ」

僕は一人でお茶を飲む。

うん、さすが月村家、おいしいお茶だ。

みんなが正気に戻つたのはなんと三十分後だつた。

「お兄ちゃんと忍さん行つちやつたね」

「二人は恋人同士・・・だからな」

「まあ、僕としては忍さんと話さなくてすんで嬉しいけど」

「瞬兵くん、何でそんなにお姉ちゃんのこと嫌いなの？」

「すずかちゃん、嫌いってのとは違うよ。苦手なだけ、何せ、前に来たとき無理矢理お風呂に連れ込まれそうになつてね」

「お姉ちゃん・・・そんなことしてたんだ」

「ま、入つてないから

「あんた、よく、忍さんから逃げられたわね」

「んとね。さつきと同じようなことをして撃沈して逃げたの」

「ああ、あれ・・・」

思い出したのかみんな顔が赤い。

ユーノくん、今、フェレットなのに・・・

「確かに、物凄い、威力だつたわ」

「「「(コクコク)」」」

ま、あのお兄ちゃんと忍さんがぶつ倒れて鼻血出したくらいだし。

破壊力は折紙つきだよね。

ちなみに本気の笑顔で人を殺しかけたことがあるけどすぐに蘇生させたので問題はない。

被害者は星夜だ。

いや、あの時は本当に焦つた。

鼻血は中々止まらないし、心臓は止まりそうだし、顔は我が人生に一片の悔いなしつてくらいに幸せそうで、うう、本当に大変だつた。

だから、僕はあれから本気の笑顔は人に見せてない。

まあ、それでも笑顔が危険なのは周りの反応をみるとよく分かる。

それでも、相手を撃沈させない笑顔を自然にできるようにするのは大変だつた。だから普段の笑顔が偽者つてわけではないのだ。

ただそれ以上の笑顔を出すまでもないのだ。

極稀にだけど本気の笑顔が無意識ですることもあるけど、

そこまで、考えているといつの間にかユーノくんが猫に追いかけられたのでユーノくんを抱き上げる。

猫に追われるのは辛いのです。

そう、たとえ懐いているからだとしても、辛いんだよ。

「はーい。お待たせしました。イチゴミルクティーとクリームチーズクッキーです」

でた、すずかちゃん専属、ドジツ娘メイド、ファリンさん、今日は、大丈夫かな？

「きやつ」

さつきまでユーノくんを追いかけてた子猫がファリンさんの足元をちょろちょろと駆け回る。

・・・猫、頭いいな、ユーノくん取り上げた仕返しか、
しかし、甘い。

僕はユーノくんをなのはちゃんと預け・・・投げて、ファリンにさんに瞬足で近づき支える。

がつしやーんつ！

お茶もお菓子もダメになつたけどファリンさんは転ばすにすんだ。

「あ・・・／＼／＼

「「「（あの猫、余計なことしやがつて）」「」」

「大丈夫ですか、ファリンさん？」

「あ・・・はい、申し訳ありません//／

「つて、あれ、さつきの子・・・っ!?」

《二人とも!》

《分かつてるの》

《うん、ジュエルシードの気配》

《ユーノくん行つて、探すのを口実に僕たちも抜け出すから》

《分かつた》

念話を終えた直後、ユーノくんがジュエルシードの気配に向かつて走り出す。

「あ、ユーノ」

「なのはちゃんと探してくるから二人はお茶してて」

「え、ちよつ、待ちな」

「ごめん、行つてくるね」

「え、なの」

「気をつけ」

三人の言葉を最後まで聞かずに僕たちは走りだす。

僕たちは気配の感じるほうに一直線に走りそこにいたのは先ほどいなくつた。

「ね、猫お!?」

「なのはちゃん、あれさつき、ファリンさんをコケさせた子猫だよ」

「あ、あんなにおつきくなつちゃつたの!?」

「とにかく、シユテルシア！」

「レイシングハート！」
「セットアップ！」

僕たちはバリアジャケットを纏う。

「でも、どうしよう？」

「うん、変身したはいいけどこれは・・・敵つて言うんじゃないからね」

「うん」

正直、なのはちゃんも僕も困っていた。

ジユエルシードは回収したいけど、むやみに魔法を撃つて怪我でもさせたら言い訳できないし、とんでもないことになつちゃう。

そう考えて僕もなのはちゃんも撃つのをためらつて、攻撃（ひよつとしたらいやれ付いてるつもりかもしれないけどあんなのにじやれ付かれた怪我する）を、ただ避け続けていると、

シユバアアア!!

『ニヤアアア!!』

横から一迅の閃光が巨大子猫を襲つた。

「魔法の光!?

ユーノくんは慌てて魔法の飛んできた方向を見た。

もちろん、僕たちも同じ方向を見ている。

そこに居たのは、黒衣に身を包んだなのはちゃんと同じぐらいの少女だつた。

「君は・・・?」

僕が訊ねようとした瞬間、黒衣の少女は魔法を再度巨大子猫に向けて放つ。

『みやおおお!』

仕方ないか、僕は猫と少女の間に割り込み。

「エルセナ!』

バリアをはり子猫を守る。

「敵だから、やりすぎとか言うつもりはないけど、この子にこれ以上手は出させないよ』

僕が後ろを見ると、巨大子猫はぐつたりしていた。

あ、よかつた息はあるみたい。

「ひどい・・・」

なのはちゃんが、巨大子猫に近寄り優しく頭を撫でた。

『みやお…おお』

僕は視線を少女に戻す。

少女は僕たちの前に降りてくる。

「君、一体誰！いきなり出てきてなんのつもり!!」

「ジュエルシードが必要だから……」

「何のために？」

「答えるも、多分意味がないから……」

そして、少女は、なのはちゃんを見て呟く……

「同系の魔道師……ロストロギア探索者か……」

「ロスト……ロギア……？」

『ロストロギア』っていうのは、次元世界に時折、進化しすぎた技術や魔法などが流出することがあるんだ。

すでに滅んだ世界からの発見、古代遺跡からの発掘……。

正しく扱う技術が確立されていない莫大な力や、それを発生させる手がかりとなる技術や知識、物品。

そういうつた危険な遺産のことを『ロストロギア』と言われてるんだ』

「つまりジユエルシードもロストロギアってことだね」

「そうだよ」

ユーノくん丁寧な説明ありがとう、って少女の後ろに影があらわれそれは魔力で刃を作った杖を少女に振り下ろす。

「危ないっ！」

がきいいいんつ！

僕は少女の後ろに回りこみ。

振り下ろされた杖を受け止めた。

少女は驚いた顔で僕をどうして?という瞳で見ていたが構っている暇はない。

「はあっ！」

僕は襲撃者を押し返す。

襲撃者は軽く後ろに跳んで距離をあける。

「ファルさん・・・」

「何故、じやまをするんですか?」

「まだ、話も聞いてないのでいきなり殺されちゃ困るよ。思いつきり殺すつもりだつたでしょ」

「当たり前じやないです、最後に私が奪うのに二つに分けられていては面倒ですか、

なら、どちらか片方を始末してもう一方に全て集めてもらつて奪います。もちろん、私が味方するのは貴方のほうですが」

「…そういうわけにはいきません。僕はファルさんの事情も、あの子事情も聞かせてもらいます」

「…余計なお世話ですよ」

「別に構いませんよ。その余計なお世話に揺らいでる人を放つておけませんから、なのはちゃん、そつちをお願い、けど気をつけて、その子…ファルさんほどじやないけど強いよ」

「分かつてる」

「ファルさん、こうなつた以上は力づくでも話してもらいます！」

「…仕方ありませんね。グラティエール、セットアップ！」

『イエス、マスター』

ファルさんが初めて、デバイスをセットアップしバリアジャケットを纏う。
軽装の鎧だ。

杖だつたものは剣になつてゐる。

「いきますよ」

僕は距離を詰めて杖を振る。

当然そんなものは軽く避けられてしまうがなのはちゃんと引き離すのが目的だから別にいいんだけど、本気じやないとはいえ、今のスピードの攻撃を避けた。

「チャージ・ボルト!」

杖から放たれる一筋の雷撃をこれまで避けられる。

やつぱり、かなり強い。

「すごいですね。今のも本気じやないのでしょう?」

「そうだけど……それでも、簡単に避けられるような速さじやないよ。少なくともあつちで戦ってるなのはちゃんとたには魔法を使わないと絶対に避けられない、二撃目は特にね」

「そうでしようね。実際ちょっと焦りましたよ。まさか、避けた先に魔法を撃たれるとは」

「じゃあ、今度は少しだけさつきよりも強くいくよ。フリーズ・アサルト!」

ファルさんの真上に六つの氷の刃が現れ降り注ぐ。

「エール、クラストソード!」

『カートリッジロード』

ファルさんの持つ剣から薬莢が飛び出す。

魔法陣は四角で、角に円が書かれその中の二つは剣十字が、もう二つはヘキグラムが

描かれている。

魔力が上がった!?

「はっ！」

速い・・・しかも六つの刃を三振りで全部碎くなんて・・・

「エール！」

『カートリッジロード』

「ブレイズ・ファンタム！」

「くつ、イフリータ・キツス！」

ファルさんの剣が炎を纏い。

その姿が揺らめいて消える。

僕は炎の加護で一時的に力を上昇させ。

がきいいいいいんっ！

感じたままに杖を振るい炎を纏つた剣を受け止めた。

「くうつ・・・」

「よく受け止められましたね。けど、」

重い・・・不味い、振り切られる！

ほんの少しの間、拮抗した僕らだけど、僕は身体ごと押し切られ、そのまま木に激突

する。

「ぐつ・・・・げほつ・・・・」

く、この格好で接近戦はやつぱりきついか・・・

『スタイルチエンジ、アサルトフォーム、ダウンロード』

僕が立ち上がるうとするとシユテルシアが反応し杖が剣になりバリアジャケットも変化する。

「・・・え?」

何これ・・・また、変身した?

「そんなこともできたんですか(ふむ、白のロングコートに青の制服のような服・・・そして青の半ズボン・・・絶対領域(ふともも)がすばらしいですね)」

「いや、初めてだけど・・・けほつ・・・でも、随分動きやすくなつたよ」

「ふむ・・・」

「じゃ、続きをつて言いたいとこだけど・・・残念ながら」

「ええ、もうジユエルシードはとられてしまつたようですね。仕方ありません。帰らせてもらいます」

「ふう・・・一応、終わつたけど・・・」

ファルさんは転移魔法で消えた。

《瞬兵、大丈夫?》

《大丈夫だよ。ユーノくんとなのはちゃんは?》

《僕は平気だけどなのはは、気絶させられちゃって》

《分かった、今、戻るね》

僕はなのはちゃんたちの所に急いで戻る。

「ユーノくん」

「瞬兵、無事でよかつた、つてあれ・・その格好は?」

「ん、なんか知らないけど変わった」

「(可愛い・・・絶対領域が眩しい//)」

「・・ん・・・ん」

「なのは!よかつた、目が覚めたんだね」

「ユーノくん」

「大丈夫、なのはちゃん」

「瞬兵くん、うん、へーき、へーき」

「あの子から何か聞けた?」

「ううん、でも、悲しそうな顔でごめんねって」

「そつか」

「なのは、瞬兵、そろそろ戻ろうよ。二人が心配するよ」

「二人つて星夜もいるんだけど……」

「……そういうえば居たつけ」

ユーノくん……結構酷いね。

「ま、とにかく、気絶してる。猫ちゃんを連れて帰ろう」

「うん」

はあ、あれから、何で猫が気絶してるか、どうしてこんなに遅かつたか言い訳を考えるのに疲れた。

みたいと説明した。

そしたら、星夜が詳しい話をしろと迫ってきて明日、詳しい話をする事になつた。で、時間はもう夜、今は僕の部屋で二人してベッドに寝転がつてダレています。

「あ、今日は疲れたねえ」

「でも、あの子、どうしてあんなに寂しそうで悲しそうな瞳をしてたんだろう

「事情なんて人それぞれだよ。僕たちだつてそうなんだから」

「でも……」

「ただ、言えるのはファルさんにとってあの子にしても、本当はやりたくないんだろう

ね。でも覚悟つていうか一度これつて決めちやうと人の言葉つて中々届かないから……」

「…………」

「だつてさ、僕たちがやつてるのつて危ないことだよ。それを危ないからダメつて言われて、なのはちゃん辞められる？」

「……無理、最後までちゃんとやりたい、二人の話も聞いてあげたい」

「ね。つまりはそういうこと、理由は分からないけど二人はもう、決めちやつてる。それを覆そうつていうんだ。ちょっとやそつとじやダメだよ」

「私、諦めないよ」

「うん、僕も……だから、一緒に頑張ろう、お姉ちゃん」

「えへへ……」

「ふふふ……今日は一緒に寝ようか」

「瞬兵くんがそんなこと言うの、珍しいの」

「クスクス……まあ、偶にはね」

「おやすみ瞬兵くん」

「うん、おやすみなさいなのはちゃん」

僕たちは眠りにつく、ユーノくんを部屋に入れるの忘れてるのに気づいたのは次の日

の朝だつた。

次の日の昼休みに僕は新たな頭痛の種を発見する。

「は?」

「ですから、瞬兵くんにはぜひ、今日の放課後に行われる。私（わたくし）たちの主催するお茶会に出席してほしいのです。場所は私（わたくし）の家ですわ」
「…そりやこの学校、お金持ちが多いからこういう人もいるだろうけど、

「でも、今日は星夜と約束が」

「ならば、明日にしましようか」

「あの、先輩、そもそも名前も知らない人に誘われても」

「そうでしたわね。私（わたくし）は沢近綾香と申します」

「は、はあ、知ってるみたいですけど、如月瞬兵です」

「もう、何て可愛いんですの」

「…」

むく、何もお昼休みに来なくても、この人、後ろからの黒オーラに気づいてないのか、無視してゐるのか、どつちにしてもかなりの兵（つわもの）だ。

「〔〔〔〔(・・・・行かせない)〕〕〕」

「残念だけど、明日は私と出かけるのよ」

「明後日は私の番よ」

「明々後日は私なの」

「その次はまた俺だ」

た、畳み掛けてる……アリサちゃん、明日はそんな約束してない、すずかちゃんも、なのはちゃんはそもそも一緒に家だし、星夜まで、そんなに行かせたくないのかな?

五人はいつの間にか臨戦態勢つて感じで口喧嘩を始めた。

だんだん五人の距離が縮まつてくる。

うるさい……まだ、続く……そろそろお昼休みが終わっちゃがしやんつ!

「あ……」

僕のお弁当箱、ひっくり返した。

「…………せつかく、お母さんが作ってくれたのに、

五人はそのことに気づかない。

「……ごにんと・も」

「」「ハイ……」

僕のすばらしい笑顔に五人は固まり。

「ちょっと、クールダウンしよっか☆」

五人とも冷や汗ダラダラで充分に冷えてるだろうけど、これくらいで許すつもりはない。

「さ、おしおきだよ」

その後、五人分の悲鳴が響いた。

何があつたのか五人に聞いた人がいるが、五人はその時なにがあつたかをきれいさっぱり忘れてしまつたらしく、結局、何があつたのか僕以外知らない。

でも、僕をお茶に誘つてたのも忘れてくれてラツキーだつたかも・・・でもこの沢近綾香つて先輩、この後に何度も現れては、いつもの四人と喧嘩していくようになつた。

そして今も絶賛喧嘩中（変な言葉だ）、

もう既に僕の耳には、「ぎやーぎやーぎやー」と騒いでいるようにしか聞こえない。

「もう、うるさ~いっ!!」

ああ、頭が痛い・・・

もう、誰もいい、誰もいいから・・・

誰か僕に平穏な時間をください。

第四話 僕と星夜の魔法特訓！ついでに温泉旅行でリフレツシユ・・・できるといいなあ

「天光満つる所に我はあり、黄泉の門、開くところに汝あり、出でよ。神のイカズチ！、インディイグネイション！」

「どがつしやくんつ！」

地に描かれた魔法陣に極大の雷が落ちた。

「ここにちは、如月瞬兵くんです。」

「の雷の魔法です。」

「擬似的に再現してみました。」

「上手くいって、満足な結果です。」

「・・・すげえな」

「よし、じゃあ、星夜、約束どおり魔法の特訓しようか」

「ん、頼むよ」

星夜が魔法を使いたいっていうから少し訓練してみることにしたんです。

確かにデバイスがなきや魔法が使えないってことはないので多分使えると思います。そう簡単には使えるようにはなれないと思うけどね。

最初は防御魔法と結界かな、この二つ同じように聞こえるけど実際はちょっと違う。防御魔法は身を守るための魔法、結界は内と外の隔離するものだ。

「星夜は念話をデバイスなしで結構早く使えた。だから素質はあるから、まずはその半覚醒な魔力を完全に覚醒させようか」

「どうやって?」

「僕はデバイスなんて持つてないから・・・」

その言葉に何かを感じたらしく冷や汗を流して後ずさる。

「ちょっと、我慢してね。デイベイーン」

「ちょっと、まつ」

「バスター!」

全力全開とは行かないけど出力ちょっと高めでなのはちゃんの魔法を星夜に向けてぶつ放す。

「うわあああああああああつ!」

「どーおおおおおおおんつ!」

おお、プロテクションが発動した。

でも受けきれずに結局直撃したけど……

「うきゅう……」

うむ、完璧に気絶してる。

けど魔力の覚醒には成功したみたいだ。

さて、星夜が目を覚ますまで他の魔法を練習してようつと、

「シユテルシア」

『了解、敵数、四百』

剣を持った影が四百体現れる。

「まずは、これで……全部、纏めてぶつ壊す！ブレイククラッシュヤー！」

「おおおおおおん！大地が割れそこから光が噴出し、影を五、六十体ほど飲み込む。

「闇払う、命の神聖よ！サクリファイス！」

光が四、五十対の影を消し去る。

「まだまだ、コールド・ペネトレイター！」

氷の槍が目の前の影を一直線に貫き通す。

「う、ううん……」

星夜の目が覚めたみたいだ。

「我が呼び声に応えて来たれ、守護者の剣よ踏み潰せ！イクスゴツド！」
「すどおおおおおんつ！」

「あ、足い！」

巨大な足が虚空から現れ、影を踏み潰す。

「神星の焰よ。その秘められし力をここに示せ、流星煉獄！メテオ・カタストロフ！」

僕の周りに一瞬、星図が浮かびあがりその光が空に上り周囲に流星となつて降り注ぐ。

残りは三十体くらいか。

「シユテルシア、スタイルチエンジ、アサルトフォーム」

『了解、アサルトフォーム、ダウンロード』

僕の服装が変わり杖が剣になる。

「アサルトフォーム、ダウンロード完了」

僕は影に向かつて走りだす。

「死天滅殺！」

ある程度まで近づき、一瞬で間合いを詰め影を一本切り倒す。

「壊界！」

続いてその場でくるりと回る次の瞬間、周囲に線が走り十五体ほどを切り裂く。

「閃命雷光斬！」

影の一団を走りぬける。

先ほどと同じように空間に線が走り、十体ほどの影が消え去る。

後、五体・・・

「汝が罪・・・この刃で！星薙！」

さんつ！

僕が放った一閃は一直線に走り三体の影を切り裂く。

「千夜の夢幻のことく！夢幻千夜！」

僕は影の一体とすれ違う、外から見ればそう見えるだろうけど実際はバラバラになるまで切り裂いた。

「さて、最後なんだけど・・・どうしようか、最強技でも使つてみようか・・・でも、身体にかかる負担が大きいからなあ、実際、技を連発したせいで身体がちょっと痛い・・・やつぱし、あのスピードでの戦闘は負担が大きい」

いつもなら魔力強化でこんなことないんだけど・・・魔力が使えない状態での戦闘もやらないと、特に最強技は魔力強化してもぶつ倒れる可能性があるし・・・あれ、もしかして魔力強化なしだと死ぬかも・・・うん、やめておこう。ちなみにこの思考している間も僕は影と切り結んでいる。

・・・あ、もういい面倒くさい。

僕は影を剣ごと切裂いた。

「ま、その気になればこんなものか、技なんか使わなくて結構いける」
「…………（瞬兵だけは敵に回しちゃいけない）

僕はぽかんとこつちを見ている星夜の方を振り向く。

「どうだつた、星夜」

「いや・・・なんつーか、非常識な」

「そんなことないよ。突き詰めれば、まだ上にいけるよ。まだ本気だしてないし、相手はただの影、雑魚だもん、なのはちゃんもデイバインバスター連発で影、五百体の殲滅に成功してるし」

「人ってすげえ、生き物なんだな」

「ま、まだ上には言つてもそこまで行くには二十年ほどかかるだろうけど」

「つて、おまえ、七歳じやん！」

「そこは、ほら、気にしない、気にしない」

「気にするわ！」

むう、突つ込むが激しい。

ま、確かに自分でも不思議だけど、できるんだから仕方ないよね。

「そんなことより、星夜、先ずは防御魔法と結界だよ」

僕の言葉に星夜は表情を引き締める。

お、カツコイイ、いつもこうならいいのに・・・って、それは星夜じやないか、僕は今
の星夜が好きなんだし、

あ、もちろん友達の好きだよ。

「僕がやるの見て覚えてね」

「お、おうっ！」

「ちがう、こうだつてば」

「こ、こうか？」

「うんうん、上手い上手い」

「ホントか・・・つて消えちまつた」

スパンッ！

「氣をゆるめるからだよ」

「な、何でハリセン」

「シユテルシアを変化させた。でも、そんな地面にめり込むほど強くは打つてないんだ
けど」

「でも、実際にめり込んだんだが

「ごめんね」

「・・・(なに、そのテヘツつて顔、めっちゃ、可愛い、文句もいえん)」
とまあ、そんな感じで数日間、みつちり、教え込んだ結果、防御魔法、結界、バイン
ドの三種を星夜は習得した。

でも一週間と立たずに習得したんだから凄いよね。

そして今日は待ちに待つた。温泉旅行の日、ああ、ついたらすぐに温泉に入ろう。
僕だつてリフレッシュしたいんだよ。

なんと連休を利用しての二泊三日の家族旅行。
高町家十月村家+アリサちゃん+星夜の団体旅行、
残念ながら今回は天野夫妻は不参加だ。

なんか大事な用事があつて一週間ほど留守なんだと星夜に聞いた。

ゆっくりくつろげるといいなあ・・・うう、このメンバーつてのが不安を誘うけど、
結構な大所帯だから、車は二台用意して分かれて乗る事になつた。
でも早速ここで問題が起きた。

片方にお父さんとお母さん、お兄ちゃんと忍さん、星夜が乗る事になり、

もう片方にノエルさん、ファリンさん、美由姉、なのはちゃんたち三人組みが乗る事になつたんだけど、

僕がどつちに乗るかで早速揉めた。

「「どつちがいい?」」

なのはちゃんと星夜が聞いてくる。

「僕はお父さんたちと一緒に乗るからね」

言つた瞬間、一組は喜びに沸き、一組は暗く沈んだ。

「だつて、星夜だけだと子供一人だし、こつちのほうが空いてるしね」

「よつしや、瞬兵、早速のろうぜ」

「ユーノくんもこつちおいで」

「キュツ」

ユーノくんが僕の腕に飛び込んでくる。

なんか、ユーノくんが勝ち誇った顔してる。

「「「「「（あの、クソフェレットがあ）」「」「」「」「」」

とたんに満ちる黒のオーラ、

だから何で、こうなるの・・・僕の癒しはユーノくんだけなの・・・それも怪しい
気がするけど、とにかく、気をとりなおして、

「お父さん、速く行こう」

僕はお父さんにひしつと引っ付いて上目遣いでお願ひする。
「ほんっ！」

「・・・あれ、しまつた、失敗した。」

月村家、お茶会の悲劇が再発した。

みなさん、鼻血だして、顔真っ赤でぶつ倒れてるけど、本当に幸せそうな顔だ。

くつ、瞬兵くん、一生の不覚、もう時が解決してくれるのを待つしか僕にはできない
のだった。

「んふふ、おんせくん、おんせくん、たゞのしい、お風呂く、えへへ」

あれから一時間後、前回より長かつた。

僕たちはやつと温泉に向けて出発した。

僕はもう、上機嫌でニコニコして歌まで歌つてゐる。

時々聞こえる盗撮の音やなんか幸せそうにこつちを見てる人たちも今は気にならな
い。

「「「「(なにこの可愛い生き物)」「」「」」

「瞬兵、そんなに嬉しいのか?」

「うん、すっごく嬉しい」

星夜撃沈・・・でも、そんなこと今の僕は気にならないもんね。

後で聞いたところ今の僕の写真を見て別の車のみんなは大層、嘆き悲しんだらしい。
ま、どうでもいい話だ。

でも、温泉に着く前に星夜が車に酔つて大変だつた。
うん、これもきっとどうでもいい話だ・・・多分ね。

「どうどうついた、温泉く、お父さん、お父さん、温泉、行つてきていい？」
「あ、ああ・・・入つてくるといい／＼」

「（・・・あなたばっかりずるい）」

部屋に荷物を置き。

早速僕は温泉に繰り出そうとする。

しかし・・・

僕は気づいてしまつた・・・近くに魔導師がいるということに・・・
そして発動していないがジユエルシードが近くにあることを・・・最低

「やつぱり、その前にお散歩してきます」

「(ど、どうしたんだ (のかしら))」

僕はとぼとぼと旅館からでて森の方に足を進める。

・・・よくも、よくも、僕の温泉を、リフレッシュを、一発ハリセンで叩いてやる。
それから僕は、魔力と気配を探り、それを探し出す。
「見つけた・・・シユテルシア、ハリセンモード」

『イ、イエッサー、マスター』

シユテルシアをハリセンにして握りしめる。

「クスクスクス・・・自分の罪を後悔するがいい」

僕は見つけた二人の後ろに瞬時に移動する。

気づいた二人は慌てて身構えようとしたが・・・遅い。

スパスマード!

二発のハリセンの音が森に響いた。

地面にめり込んだ二人が十数分後に目を覚ました。

二人は、戦闘体勢に入ろうとしたが僕がギロリと睨みつけると、

「ゴメンナサイ」

土下座して全面降伏した。

そ、そんなに怖いかな……ちよつとだけショックかも……
でもこれぐらいじや許さないのです。

「それで……お話は聞かせてもらえるのかな、かな☆」
すばらしき、超笑顔で問い合わせる。

「そ、それは……」

少女は冷や汗ダラダラでそれでも事情を話そうとはしない。
もう一人の狼女はそれが自然の摂理ですといわんばかりに平伏しふるふる震えている。

失礼な……

《《ご、ごめん、フェイト、こいつにだけは逆らえない》》

《《いいよ、アルフ、私も、同じだから》》

《《ふうん、フェイトちゃんとアルフさんって言うんだ》》

「ひいつ」

「僕の温泉を、リフレッシュを……邪魔しておいて、僕の目の前で内緒話とはいいで胸
してるね」

二人は抱きあつてガタガタと震えている。

「さあ、お星さまになる覚悟はいいかな、かな☆」

「「ゴメンナサイ」」

二人は再度土下座した。

「・・・・・」

ま、これくらいでいいか、

僕は先ほどまでとは違う笑顔で二人に笑いかけた。

「僕は如月瞬兵だよ。二人の名前は?」

「あ・・・フエ、フェイト、フェイト・テスター・ロツサだよ//」

「あ、あたしはフェイトの使い魔アルフさ//」

「うん、よろしくね二人とも」

フェイト・・・運命か、うん、なんかちょっとやな感じの名前・・・
で、こっちの狼女はアルフか、フェイトちゃんが名前をつけたのかな?

「ところで何で名前を聞いたの?」

「そうだよ。さつきの念話、聞いてたんだろ」

「それはね。ちゃんと君たちの口から聞きたかったからだよ」

につっこりと笑う。

ボフンッ!

二人ほど別世界へ旅立つた。

「・・・僕、またやつちやつた？」

僕の言葉に答えてくれる人は無論誰もいなかつた。

それから先に目を覚ましたアルフさんは僕にフェイトちゃんを預けて旅館に向かつていつた。

ちなみに、ハリセンで五回ほどしばき倒した。

それで僕はただいまフェイトちゃんを膝枕している。

おのれ・・・僕の邪魔をしといて自分だけ温泉なんて・・・でも、フェイトちゃんを一人、置いておくわけにもいかない。

しかし、それでも一応、僕は立場上は敵のはずなんだけど、敵に主人を預ける使い魔つて一体・・・

確かにフェイトちゃんが倒れたのは僕のせいだけど・・・

僕のせいなんだけど・・・

僕、笑つただけだもん。

悪いことしてないもん。

ううう、せつかくの温泉旅行が・・・僕の温泉が、リフレッシュがあ・・・つて、こ

の気配は、

「ファルさん、趣味が悪いですよ」

「やはり気づかれましたか」

僕の声に応え、近くの木の影からファルさんが姿を現す。
「それで、なんの用ですか、僕たちがこうしてる間にジュエルシードを探しにいけばいいのに」

「したから」

「・・・それでよく苦手なんて言えるね」

「いえいえ、ただ、追いかけて突き止めただけで、魔法で調べた訳ではないのですよ」

それって一歩間違えればストーカーじゃないかと・・・

やだな、こんな美形がストーカーって、イメージ崩れる。

「しかし、随分ご立腹のようですが」

「温泉に入りそびれたの」

「なるほど・・・楽しみだつたんですね」

「はい、それはもう」

僕は深く息を吸う。

「とつても、とつても、とくつても、楽しみにしてたのに」

「それは、残念でしたね」

ファルさんが頭を撫でてくる。

なんか、気持ちいい、僕の顔はきつと照れて少し赤くなつてゐるだろう、
僕はファルさんを見上げて、照れ笑いしながら、

「ありがとう」

と呟いた。

そして結果はファルさんも倒れた。

「・・・・・・・・・もう、いや」

ううううう・・・・・早く、早く、

「早く、僕を温泉に入らせろ〜」

やつぱり答えてくれる人は居ないのだった。

第五話 今度こそ温泉、僕の邪魔する奴はお星様にしてやるのです

「うん・・・ここは?」

「あ、ファルさん、やつと目を覚ましたね」

「・・・瞬兵くん?」

「はい」

「・・・あの、この体勢はまさか?」

「膝枕です」

「何故?」

「ファルさんが倒れてきたんですよ・・・頭をぶつけそうで仕方なしに魔法で引っ張つたらここに倒れてきて、フェイトちゃんが半分使つてから半分だけど」

そう、倒れたファルさんは頭を木にぶつけそうでこっちに引っ張つたら何故かここに

倒れた。

フェイトちゃんの上に倒れそうで慌てて動かしたけど、
にしてもファルさんは二時間もぶつ倒れていた。

フェイトちゃんは四時間目に入つた。

「ファルさん、ちゃんと寝てないでしょ」

ま、フェイトちゃんもだけど・・・二人・・・アルフさんもだつたから三人か、幸せ
そうな顔して人の膝で寝やがつて・・・

僕、いつになつたらここを動けるの、足もいいかげん痺れてきた。

「ばれてしましましたか」

「・・・ファルさん、何かしなければならないこと、それがあるなら無茶はしないことで
す」

「・・・・・」

「でないと、何もできないまま終わりますよ」

「分かつてはいるんですけどね」

ファルさんは目を伏せて僕から目を逸らす。

「分かつていませんよ。実現できなれば分かつてなどいません」

僕の言葉に沈黙して言葉を捜しているようだ。

「まつたく、仕方ない、もう少し寝ていいですよ」

「え？」

それから僕は歌いだす。

周囲に響く歌にファルさんはまた眠りに落ち、フェイトちゃんはさらに幸せそうな顔になり、いつの間にか狼形体アルフは身体を丸めて眠つており。

集まつた森の動物も僕の傍で眠つている。

僕はそのまま暫く歌い続けた。

「さて・・・つい、ほだされてしまつたがどうしようかこの事態」

膝にはファルさんとフェイトちゃん、さらに横にはアルフさん、その周囲には動物たち・・・

なんか、収集がつかないような・・・特にファルさんとフェイトちゃんは、明確に敵同士だからなあ・・・

なんせどつちもジユエルシードを狙つてるわけだからね。

ふう、なんか僕も眠い・・・

「ん・・・んん・・・うるさ、なにい」

あまりの騒がしさに僕は目を覚ました。

「アルフ、ずるいよ」

「フエ、フエイトだつて、ずっと膝枕してもらつてただろ」

「いえ、やはり頼つてもらうほうが、あなた、自分がどんな顔をしてたか分かつていますか？」

「そ、それは……」

「いや、自覚があるようですね」

「するい」

はい？

何がどうなつて、えと何で三人が喧々囂々と口げんかしてゐるの?

本当に、なにこの状況、……あれ、そういえば、今、何時……

「あああああああああああああああつ！」

[?]

午後九時！？

四百九

「ごめん三人とも僕、戻るね」

「え、あ・・・」

「ちよつ・・・」

「お気を…・・・」

最後まで聞かずに僕は走り出す。

結構本気で走ったので疲れたけどあつという間に旅館まで帰った。

その後、旅行参加者全員に泣きつかれて潰されて、その後は全員にお説教された。

金員をKOCへかう株式会社

ううう・・・温泉は入れない身動きとれなくなる。

僕が悪いんじやないやい

結局、この日は僕は温泉に入れなかつた。

!?

ジユエルの気配。フフ。クスクスクス。あはははははははははははははつ。

温泉の邪魔の次は睡眠の邪魔

もう、
許さん。

僕は気配を消し寝てるみんなに気づかれないよう部屋を抜け出し旅館をでる。

シユテルシア、セツトアツブ

『イ、イエツサー』

バリアジャケットが展開され、

「ゲートオープン」

ジュエルシードの気配のある場所に転移する。

其処は橋のかかった湖の上でそこにはジュエルシードが放つ光の柱、荒れ狂う水の怪物、

湖の大きさは結構大きい。

「シュテルシア、結界を」

『イエス、フィールド展開』

結界が張られ僕は水の怪物を睨みつける。

近くにファルさん、フェイトちゃん、アルフさんがいるみたいだ。

と思ったの同時にフェイトちゃんアルフさんが水の怪物に向かつて森の中から飛び出してきた。

珍しくファルさんも戦う氣で居るらしく僕から見えない位置に飛び出したようだ。

「三人とも」

声をかけた瞬間、三人はその場に固まつた。

「ひいつ（ま、また怒つてらっしやる）」

「（こ、怖いですね・・・）」

「シユテルシア、リミッター限定解除」

既にシユテルシア無言だ。

限定解除の影響で僕の背の翼はさらに輝きを増し周囲を明るく照らし出す。

僕は非常に凶悪な目で三人と怪物を睨みつけた。

三人は瞬時に目の前まで来てひれ伏し、怪物も水の身体をガタガタと震わせている。

僕は片手を上空に上げる。

其処に魔力が収束しそれはみるみる巨大な魔力の珠になる。

大きさは下の湖よりも大きいだろう。

僕はそれをためらいなく振り下ろした。

三人はそれを見て慌てて逃げようとする。

だが間に合うはずもなく。

ずつがあああああああああんっ！

大爆発をおこし三人を巻き込む。

「まだまだ」

僕は爆発が収まる前に杖を掲げ、

「虚空に浮かぶ星たちよ。汝らの力を今ここに示せ」

呪文が響く中、空一面に次々と魔法陣が描かれていく。

「我等が道を遮る存在（もの）、我等に仇なす存在（もの）に聞かせよ」

その数は十を越え、二十を越え、さらに増える。

「響き渡るは星の歌声、命の囁き、世界の息吹」

もう既に魔法陣の数は八十を越える。

「我が紡ぐは永遠の旋律」

魔法陣が百を越える。

「全ての命あるものに今こそ裁きを与えることを」

魔法陣に魔力が収束され始める。

「断罪の聖刃よ。白き翼となれ！」

全ての魔法陣が発射体制に入る。

「スター・ダスト」

杖を振り下ろす。

「ブレイ、もががつ」

僕はなのはちゃん、ユーノくん、ファルさん、フェイトちゃんアルフさんに止められ

た。

「瞬兵くん、ストップ」

「瞬兵、落ち着いて」

「そうだよ。瞬兵お願ひだから」

「あんた、ここを焼け野原にでもするつもりかい！」

「そうです。瞬兵くんらしくないですよ」

「むぐぐぐぐぐ・・・（邪魔するな～）」

「ジュエルシードも暴走しちゃうよ～」

「むぐぐぐぐぐ～（ジュエルシード如き蒸発させてやる～）」

みんなは僕を掴んでなんとか止めようとしている。

ふと下をみると水の怪物は逃げようとしていた。

「むぐぐぐぐぐ～（逃がさ～ん）」

僕は全員を振り払いそこから転移し怪物の目の前に飛ぶ。

「僕から逃げられると本気で思つたの？」

怪物は僕から離れようと今まで逆方向に逃げようとする。

「みんながダメッて言うから仕方ない・・・これで勘弁してあげるよ～」

僕は杖を構える。

「極光の星たちよ。回り廻れ・・・天星八十七式裂光流星乱舞！」

きゅどどどどどがどがど！

僕の周囲に現れた光は一斉に怪物に向かい炸裂した。

「・・・瞬兵、温泉に入れなかつたのがそんなに悔しかつたんだ」
ユーノくんの咳きに、

「当たり前でしょ！」

光速の速さで言葉を返した。

「あ、疲れた・・・ねえ、僕もう戻るから、僕が戻つてからジユエルシード争奪戦してね」
「「「「え!?」」」

「なんか文句ある?」

「「「イイエアリマセン」」」

「よろしい」

「「「（し、死ぬかと思った・・・視線で人が殺せるなら確実に死んでる）」」」

「ねえ、ユーノくん」

「何、なのは」

「私、瞬兵くんだけは何があつても怒らせないようにする」

「うん、そのほうがいいよ」

「それで、結局負けたんだ」
「・・・・・・・・・・・・・・

「…………」

「ま・け・た・ん・だ」

「はい（うう、まだ、機嫌が悪い）」

次の日、僕と星夜の前でなのはちゃんとユーノくんは正座している。

「まあ、ファルさんもフェイトちゃんもアルフさんも強いからね」

その言葉に二人は暗く沈んでいた顔をぱあつと明るくする。

「でも・・・許してあげない」

「そ、そんなあ」

「瞬兵、いいじやん、許してやろうぜ」

「・・・ねえ、星夜、君も僕の温泉を妨害した一人だつてこと分かつてる？」

「ふ、悪いな、なのはさん、ユーノ、俺には無理だ」

「かつこつけて言つても全然格好良くないから」

あ、落ち込んだ・・・

「ま、それはいいとして、なのはちゃん、僕が地獄の特訓をしてあげよう

「へ？」

「なのはちゃんが苦手な運動も克服させてあげるよ・・・それはもう地獄のような特訓で」

「ね、ねえ、瞬兵くん、温泉は？」

誤魔化そうとしたのだろうがそれは逆効果だ。

「…………聞きたいの？」

「ひつ・・・（し、視線が・・・瞬兵くんの視線がい、痛い）いいえ、けつ」

「故障中（超笑顔）」

「（断つたのに・・・）」

「僕の温泉・・・次、会つたらファルさんもフェイトちゃんもアルフさんも・・・クスク

スクスクスク」

「（か、可哀想に）」

「あ、明日には直るよきっと」

ユーノくんは慌てて僕にそう言う。

それって慰めてるつもり？

「明日までに直るかは五分五分だつて」

「うぐ・・・」

ユーノくんがうなだれた。

「ま、まあ、半分くらい直る可能性あるんだろ」

「まあ、そうだけど・・・星夜にフォローを入れられるとは・・・なのはちゃんも堕ちた
ものだね」

「「「・・・・・」」

三人は沈黙し、

「「瞬兵（くん）俺（星夜（くん））のこと何だと思つてゐるの（んだ）」」
三人して同じ質問が来た・・・仲いいね君たち、
「うんと、まずバカでしょ」

ゴンツ！

あ、何かが落ちてきて星夜が沈んだ。

「スケベだし」

ごいんつ！

「嫌つて言つてるのに同じことしてくるし・・・学習能力がない」
ごいいいいんつ！

「そのほかにも・・・・・」

ごん、がん、げん、ごいんつ！

「しゆ、瞬兵（くん）そこまで許してあげて」

混沌を背負つた星夜を見かねてか二人が止めに入る。

「でも、大切で大好きな親友だよ」

「しゆ、瞬兵（くん）」

その一言で星夜はあっさりと復活を果たしそのまま、

「むぎゅつ・・・」

抱きついてきた・・・この抱きつき癖もいい加減改めさせないとかな、
でもまあ、辛辣な言葉で撃沈して優しい言葉で引き上げるのは基本だし・・・

「星夜」

「星夜くん」

「「ちよつとお話しよつか」」

二人はいつもの黒モードだ。

「ゴメンナサイ」

「星夜・・・そんな簡単に謝らない」

「（無茶いうなよ・・・）」

がらつ！

「ちよつとあんたたちいつまで待つたら来るのよー」

襖を開けて入ってきたのはご立腹のアリサさん、

どうやらいつまでたつても僕たちが来ないから呼びに来たらしい・・・

あ、そういえば時間すぎるてる。

「そうだよ。湖に行こうって約束してたのに」

その後ろにはすずかちゃんだ。

「ごめん、アリサちゃん、すずかちゃん」

「悪い、時間になつたの気づかなかつた」

「ごめんなさい、アリサお姉ちゃん、すずかお姉ちゃん」

僕たちの謝罪に一人は仕方ないなという顔をした。

「もう、いいから行くわよ！」

「うん、時間なくなつちやうよ」

僕たちは湖に行くために旅館をでる。

どういうわけか嫌な予感がする。

自分の予感が外れないことを僕はよく知っているので周囲を警戒しながら楽しそうに話して歩くのはちゃんとたちの後をついていく。

星夜は僕の隣を歩いている。

僕の様子に気づいてか離れようとしない。

星夜が囁くように声をかけてきた。

「何が？」

「そう聞かれると分からぬけど」

僕も同じように声を小さくする。

星夜鋭いなあ・・・まあ、どうしてかと言われると僕も答えようがない。

強いて言うなら気配を感じるといったところか・・・ただ少なくとも人間の気配じやないし無論幽霊やその類でもない。

「星夜も感じるんだね」

「というよりも何か違和感があるんだよな」

「この気配・・・ひょつとしてファルさんに関係あるのかも」

「ああ、ジユエルシードを集めてるあの男か（奴は敵だ）」

「ん、僕たちを巻き込みたくない原因がこの気配の元かもどつちにしても昨日はなかつた気配だよ」

そう、昨日はこんな気配は感じなかつた。

なのはちゃんとユーノくんも気づいてない・・・二人に気づかれないということは隠しているということだ。

星夜がそれに気づくなんて、ちょっと驚いた。

明確に感じることはできないみたいだけど、なのはちゃんと達より探索魔法が得意そう・・・今度は探索魔法を教えてみよう。

「僕としては、星夜にアリサちゃん、すずかちゃんを連れて旅館に戻つてほしいけど・・

無理だよね・・・ならこつちから出向くか

「瞬兵一人でか?」

「大丈夫大丈夫、僕強いから」

「(可愛い・・・普段と違つて子供っぽいし)」

でも、本当にそのほうがいいかも・・・

「「「!?!」」」

結界!?

なんで・・・もしかして僕たちを巻き込まないよう!?

『瞬兵(くん)!?』

『分かつてる。なのはちゃん、ユーノくん、星夜、二人をお願い、何かあつても星夜とユーノくんの防御魔法があれば何とかなるから』

『分かつた。瞬兵を信じるよ』

『瞬兵くん、気をつけてね』

『瞬兵・・・』

『大丈夫・・・ちよつとだけ、本気だすから、ミラージュシルエット!』

僕は自分の幻影を一体つくりそれと同時に近くの木の上に飛び上がる。

そのまま結界のほうへ向けて木の上をひよいひよい跳んでいく、それは見る人がいた

ら忍者みたいだと思われるだろう。

「シユテルシア、アサルトフォーム、セットアップ」

『イエス、アサルトフォーム、セットアップ』

僕はバリアジャケットを纏い、さらに速度を上げる。

「見えた！」

そこに見えるのは空間の揺らぎ確かにそこは外界と隔絶されている。

僕は木から飛び下りて速度をまた上げて結界に向けて走り出す。

「天星流絶技、破邪一閃！」

ぎいいいいん！

走りながら結界を切り裂きそのまま結界の中に突入する。

やつぱりファルさんの気配がする。

結界に入つて直ぐに見えたのは体中にいくつもの牙の生えた口を持つ人型の黒い化物とそれに襲われたのだろう血まみれの男と女と少女の三人、おそらく家族だろう。

「酷い・・・けどまだ三人とも息がある。シユテルシア、スタイルチエンジ、ナックル

フオーム」

『ナックルフォーム、ダウンロード』

バリアジャケットが変化し青い胴着のようになる。

頭には長めの白いハチマキだ。

「桜花八卦掌！」

僕は瞬時に踏み込んで怪物に一発の掌底を叩き込み、怪物を後ろに弾き飛ばしそのまま突っ込んで怪物をアッパーで打ち上げ怪物を追うように飛び上がり拳を振り下ろし地面に叩きつけ其処に魔力の塊を叩きつける。

「……消えた？」

魔力を叩きつけた瞬間に怪物は光となつて霧散した。

「あ、そんなことより、降り注げ癒しの光の彼のものたちに命の輝きを！ テインクルライト！」

光が降り注ぎ三人の傷を癒していく。

「で、次は、スピリチュアル・リカバー！」

蒼い光が三人を包み込む侵された身体を浄化する。

「う、あ……」

「あ、まずい……我、汝に安息を与える一時（ひとつとき）の夢に誘わん！ スリーピング

！」

目を覚ましそうになつた三人に僕は魔法をかけて眠らせる。

ふう、これで夢だと思つてくれるよね……記憶をいじるような真似はしたくないし……

でも、さつきのなんだつたの・・・生きてないのに動いてて、しかも邪惡であんなのがいたら人は暮らせない。

彼等の気配に侵されて死んでいく・・・何なのあれ、何であんなものがこの世界にいるの・・・

僕の光の翼は周囲を常に清浄な空気に変えているためになんともないけど・・・
ずっとおおおおおおおおおおおおんっ！

卷之三

僕は音の聞こえた方に走り出そうとする。

「あ、いけない、魔に宿りし精霊たちよ、我が心を糧とし理（ことわり）を覆す法をここに顕（あらわ）しめよ！・プロテクション！」

大地に描かれた蒼穹の魔法陣から光が空に伸びる。

「これで大丈夫、後は目を覚ます前に終わらせないと」

音のした方に走りだし暫くたつ、瞬間感じたままに僕はその場を飛び退いた。

— ۱۱ —

音が聞こえ今までいた場所をみるとそこには輝く魔力の刃が数十本刺さっていた。僕はそれが飛んで来たと思われる方を向き。

「ええええええええええつ!?

思わず叫んでいた。

「こ、これはちょっと、数が……」

「殲滅する！ノーマルフォーム！」

僕の服装がいつもの白い長衣に戻る。

雷光散華

すがしゃん！

杖を掲げるとそこに雷が落ちて巨大な刃を形成する。

「ライトニング」

杖を横に構え、

ブレード!

一閃する。

「うん、今まで半分くらいかな」

さてと・・・もう一発大きいの行くよ。

第六話 謎の魔物との戦い、そしてとうとう温泉に？

「ロック・ストライク！」

「ずどおおおおんつ！」

「巨大な岩が怪物たちの上空に現れ押しつぶす。」

「お次はこれだよ。アース・バインド！」

「どがしやあああああんつ！」

怪物の周囲の大地が隆起し挟み潰す。

「グルオオオオオオ！」

怪物が吼えるのと同時に魔力の刃が現れ降り注ぐ。

「防御魔法なんか使つたら隙が大きいし」

「ばきつびきつがきいいんつ！」

僕は杖を繰り自分に当たりそうな刃だけを碎き。

「この程度なら、これで充分！」

刃が過ぎ去りすぐに杖の先端を向ける。

後、一、二撃で全滅させないと乱戦になるなこれは・・・

「どうしようかな」

思わず呟く。

あまり強い術は結界を吹き飛ばす恐れもあるし……

それでもこんなものを、こんな命を侵す存在（もの）を許しておくわけにはいかない。誰が何のためにこんなものを作ったのか知らないけど、君たちに罪はないかも知れな
いけど……

「それでもつ、消えてもらう！ 輝く刃よ。彼の者たちに裁きを！ 汝が罪……この刃でつ！」

僕は手を一気に地面につける。

「断罪のロンギヌス！」

どがしゅつ！

地面から魔力の槍が突き出し怪物を貫き消し去る。

「はあつはあつはあつ……さすがに広範囲に連続はきつい、しかも弱い術じやダメージを与えるにないし……少し時間があれば直ぐに魔力も回復するのに」

僕は荒い息をつきながら最後の一撃を睨みつける。

「すう、はあ……よし、神星の極光よ。その力をもつて闇を払え、星の裁きを！ ヴァニシング・ノヴァ！」

ひゅつゞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおんつー

強大な光が怪物たちを飲み込んだ。

「なんとか・・・終わつた・・・早く次に行かないと」

僕は息を整えて走り出す。

しばらく走り続けるとそこには傷だらけのファルさんと腐った身体のドラゴンとキ

マイラと呼ばれる伝説上の生き物

せいもあるだろうけど……

「命の輝きよ。降り注げティンクル・キュア！」

これは、一人用の回復魔法で三人の家族に使つたのは複数用の回復魔法だ。

光が降り注ぎファルさんの傷を癒す。

ちなみに僕の回復魔法は強いので多用すると自然治癒能力が弱くなったりする。でもってスピリチュアル・リカバー！」

蒼い光がファルさん身体を浄化する。

「瞬兵くん・・・」

僕に気づきこちらを振り向いたファルさんは本当に驚いていた。「余所見をしてる暇なんてありませんよ！フレイムボンバー！」

「ずどおおおんつ！」

「ファルさんに飛び掛った二体を僕の放った魔法で吹き飛ばす。」

「あ、すみません……」

「そつちのキマイラは任せます、こつちのドラゴンゾンビは僕が」

「分かりました、悔しいですけど、お任せします」

「僕とファルさんは背中を合わせて構える。」

「マジックブласт！」

杖から極光の剣を打ち出しそれと同時に走り出す。

「ファルさんも殆ど同時に動き出した。」

「極光の剣がドラゴンゾンビを直撃したがあまり効いている様子はない。」

「エルセナ！」

「ごおおおおお！」

ドラゴンが噴く炎を結界で防ぎ炎が収まつたらすぐに、

「ミクドレイヤー！」

次の魔法を放つ、極細のダイヤの結晶の刃がドラゴンゾンビに降り注ぐ。

「エール、カートリッジロード！」

『カートリッジロード』

「ファルさんの剣から空の薬莢が三発吐き出され。

『アイシクルエッジ！』

エールに水を纏わせキマイラを切り裂く。

僕はドラゴンが繰り出すしつぽや爪をかわしていく。

ファルさんも同じように爪、噛み付き、吐き出す炎をかわし、受け止め、防御魔法で

防ぐ。

「火を司るものよ我が求めに応え深淵の叡智より熱をもたらせ。ブラストファイア！」
『ごがあああああああんつ！』

繰り出された四つの炎がドラゴンゾンビに着弾し爆発する。

「エール！」

『カートリッジロード！』

薬莢が二つ吐き出される。

『インフェリアルスラスト！』

ファルさんの姿が消え。

キマイラの真上に出現したファルさんは光り輝く剣を振り下ろす。

それはキマイラを真っ二つに切り裂いた。

「その身に刻め！」

僕は着弾の爆炎が消える前に手にした杖を空高く投げ上げる。

「神技！」

ぱちんっ！

手をドラゴンゾンビにまっすぐに向けて鳴らす。

次の瞬間、三本の巨大な槍がドラゴンゾンビを貫き僕は杖を追うように空に飛び上がる。

「二一ベルン」

両手を杖の方に上げる。

杖は手に収まることなく少し浮かんで静止し僕の周囲に光り輝く魔力が現れ杖に集まる。

魔力はドラゴンゾンビを串刺しにしている槍よりもさらに大きい槍になり。

僕の背の翼が大きくなり輝きを増す。

「ヴァアレスティ！」

槍を打ち落とし目標を貫くのと同時に眩い光が炸裂する。

光が収まつた。

ドラゴンゾンビは跡形もなく消え去っていた。

「あれ・・・？」

僕は違和感を感じた。

さつきの化物もこのドラゴンゾンビも倒されると跡形もなく消えていた。

そして二つに絶たれたキマイラの身体は消えずに残っている。

それが意味するところはつまり……

「え、うわあっ！」

死んだと思っていたキマイラの体から触手のようなものが噴出し僕の身体に巻きつ

く。

「瞬兵くん!?」

「ん、くう・・・力が・・・抜ける」

僕の力を吸い取りキマイラは復活しさらに強大になる。

「くつ・・・このままでは」

「あ・・・くう・・・ひやう・・・」

「(不謹慎ですけど・・・なんだか可愛い鳴き声・・・はつ・・・私は何を)」

「う・・・く・・・そん・・・なに・・・欲しいなら・・・たつぱりあげるよ!」

僕は一気に魔力をキマイラに流し込む。

そのショックで触手は弾けとびキマイラ自身も力に耐え切れないのか端からグズグズと解けていく。

「悪いけどそんな消え方じゃ瘴気を撒き散らすからね」

僕は目を瞑り魔力を落ち着かせてから目を開く。

「（・・・一人の力でキマイラの許容量（キヤパシティ）を越えて崩壊に導くなんて・・・信じられませんね）」

「星光天牙！スターライトバスター！」

僕の杖から放たれた蒼穹の砲撃はキマイラを飲み込み消し去つた。

「ふう・・・終わった・・・」

「お疲れ様です。瞬兵くん」

「ファルさんもお疲れ・・・さてと、ちょっと話を聞かせてもらおうか」「・・・・・・・さよなら」

「あ、逃げた」

ううん、転移で逃げたか・・・

どうしよう、追いかけようと思えばできなくもないけど・・・結界も消えだし。とりあえず帰ろうかな。

でも、益々話を聞かないといけなくなつたね。

僕は湖に向けて歩き出す。

先ほどの戦闘が嘘のように静かだ、それでもそこかしこに刻まれた戦闘の後はそれが

事実だと告げていた。

「治さないと……ね」

僕は歩きながら歌いだす。

「ん……どういたしまして」
それは森に響き先ほどの戦闘でついた大地の傷跡を治し癒していく。

僕は聞こえた声に言葉を返して歩き続ける。

それは、森や大地からのありがとう、という言葉だった。

「ふう……どうしたらしいかな……もう、こんなことがないとは言い切れない。けど
なのはちゃんをこれに巻き込むのは……」

でも、巻き込まれるだろうなあ……僕もなのはちゃんも星夜も下手をすればフェイ
トちゃんたちも……もつと増えるかも、

やつぱり何がなんでもお話を聞かないとね。

そして、ファルさんは結界をつけないと、あれがファルさんの事情でそれが偶然な
んてありえない、きっと、ファルさんを追つて來たんだ。

「そして僕も標的に含まれた……力を求めて吸収する……新たに見つけたエサを逃が
したりはしないだろう……そして次は今回とは比べ物にならない……次は数か質どち
らかでくる……たつた二人にアレだけの数が殲滅されたんだから」

今回は掴み損ねたけど……次は必ず尻尾を掴んで大元の所に案内してもらう。

あれは、危険だ。

「あれ……みんな居ない、もう帰ったのかな」

僕が湖に着くとそこにはなのはちゃんとたちの姿はなかつた。

「ああ、でも、のどかな光景だなあ……って、あれはさつきの家族……よかつた、楽

しそう」

どうしや！

え……？

僕の周りにいた人たちが鼻血を流して倒れた。

「ええええええつ!?」

ん、視線を感じる？

「え？え？」

なんか見られてる……

パシヤパシヤ！

え……

なんか写真とられてる。

「えと、あの……」

な、なんか怖いよ

「あ、あの！」

「え、あ・・・なんですか」

た。話しかけてきたのは高校生くらいの少女、近くには同じく高校生くらいの少年がい

「君、瞬兵くんだろ？」

「え・・・？」

「私たちも海鳴に住んでるのよ」

「あ、はい、それでなんで僕の名前を？」

「・・・・・だつて有名人だし」

「・・・・・へ？」

声をそろえて言つた二人に思わず間抜けな声を上げてしまう。

「それに私たち翠屋の常連だしね」

「あ・・・いつもケーキと紅茶のセットを頼んでる」

「おお、よく覚えてたな」

「すぐに気がつかないでごめんなさい、僕がお店に出てる時はいつも異常に人が多いから」

「(目当てが瞬兵くんだから……それは、仕方ない)」

「えーと、確か……慎也さんに裕子さん」

「ああ、正解だ」

「あたりだよ。ん、可愛い」

ぎゅむつ!

裕子さんに抱きつかれ慎也さんに頭をわしゃわしゃとなでられる。

あ、視線がされた。

「お二人とも助かりました。ありがとうございます」
「あ、なにがだ」

「いえ、視線と盗撮が止んだんで」

「あ、なるほどね。ここでも瞬兵くん人気は絶大だね」

それは喜ぶべきことなのかな……

「今度、お店に出てるときに来てくれたらお礼に特別にご馳走しますね」

「あ、ああサンキユ／＼／＼

「あ、ありがとう／＼／＼

「(今日ここに来て本当によかつた)」

「ん、所でお二人はどうしてここに?」

「旅行だ」

「旅行よ」

「・・・高校生二人で、しかも男女ですか？」

「・・・えへ」

「フフ・・・あはははははつ」

「(か、可愛い//)」

「ああ、もう・・・可愛いなあ、よし今度のお礼はラブラブな二人にハート型のケーキだね。」

「あ、僕、もう戻らないと、じゃあ、本当にありがとうございました。お幸せに」

「あ、顔が真っ赤・・・さて、本当に急がないと、

「また、会いましょうね」

「ああ、またな」

「うん、またね」

「一人と別れて僕は旅館への帰路を行く。」

「でも、こんな所でお店の常連さんに会えるなんて思わなかつたな、後は温泉に入れれば完璧なんだけど」

「あ、瞬兵」

「フェイトちゃん!? まだここに居たんだ」

「うん、ここは気持ちがいいから」

「そうだね。でも、なのはちゃんと見つからなかつた?」

フェイトちゃんは木に寄りかかり木陰でのんびりと過ごしていた。

僕もその横に腰掛ける。

「見てないよ」

「そう、湖に来てたはずなんだけど」

「ねえ・・・どうして瞬兵たちはジュエルシードを集めてるの?」

「それを聞くの? 自分の事情は話せないので」

「う・・・ごめん」

「クスクス・・・いいよ別に」

落ち込んだフェイトちゃんに笑いかけるとフェイトちゃんもぎこちないが笑い返してくれる。

「僕となのはちゃんがジュエルシードを集め理由は頼まれたからだね」「頼まれた?」

「うん、フェレットが居たの覚えてる?」

「ええと・・・あの小動物?」

「そうそう、あの子はユーノくんって言つてジュエルシードの発掘者なんだ」

「え？」

「あ、変身魔法を使つてるだけでユーノくんは實際には魔導師だよ」

「あ・・・そなんだ」

「それで、ジュエルシードは危険だつて聞いて、だから集めるのを手伝つたんだけど」「だけど？」

「僕もなのはちゃんとジュエルシードがあるつてことに気づいてたのに逃したことがあつたの」

「・・・・・」

「それが発動して結果的に大きな被害をだした・・・だから、僕もなのはちゃんと同じ事を繰り返さないために集めてる」

「・・・話してくれてありがとう、私の事情は話せないけどでも・・・私は」

「分かってる。本当は戦いたくなんかないよね」

「うん・・・」

「あ、でも・・・これだけは言つておこうファルさんは僕と違つて手加減も容赦もしないよ。一人で戦っちゃダメだよ」

「分かってる。あの人は強い・・・」

「もう一つ、ファルさんはあまり関わらないほうがいいよ。きっとフェイトちゃん
じゃファルさんに巻き込まれたときに対処しきれないだろうから」

「それ、どういう意味？」

「ファルさんがジユエルシードを集めらる理由がね」

「知つてゐるの!?」

フェイトちゃん、実は表情豊かなんだなあ、驚いたり笑つたり優しい顔をしたり……

「詳しく述べ知らないよ。けど本当に危険だから」

「…………危険」

あ、今度は考え方である。

「クスクスクス……」

「な、なに? // /」

「いや、可愛いなあと思つて」

「(瞬兵のほうが可愛いよ……でも、嬉しい)」

「今度は顔、真つ赤だよ」

「う……瞬兵のせいだよ」

「……ちよつとだけ目を閉じて」

「え、うん」

素直に目を閉じちゃったよ・・・この子、本当に大丈夫だろうか？

「いいつて言うまで閉じててね（星よ彼の者に加護と祝福を与えるよ）」
フェイトちゃんの額に手を当てて僕は心の中で呪文を唱える。

「はい、もういいよ」

「・・・ねえ、今、何をしたの？なんだが身体が軽くて」

「うん、ちょっとした加護をね」

「??」

頭の上に？マークが見える気が・・・でも、初めてあつたときから感じる気配、僕や

星夜と同じ普通の人とは違う気配・・・

なんだろうねこれは・・・

「いいのいいの、分からなくて、じゃ、僕はもう行くよ」

「え、行っちゃうの」

「うん」

僕は立ち上がり歩き出そうとする。

「あの、フェイトちゃん、袖、離してくれないと帰れないんだけど」

「もうちょっとだけ、お願ひ」

「うわ、泣きそうな瞳で見上げてくるし・・・

し、仕方ないなあ・・・僕つて子供に甘いよなあ、
僕も子供だけど・・・

「ふう、分かったよ。もうちょっとだけね」

「ありがとう！」

僕はもう一度腰を下ろした。

本気で嬉しそうだし・・・まあ、いいか、

「お~い、フェイト~」

「あ、おかえりアルフ」

「おかえりなさいアルフさん、今日は人間形態なんですね」

「瞬兵！な、何でこんなとこにいるんだい!?」

おお、驚いてる驚いてる。

「まあ、いいじやないアルフさんもおいでよ」

「そ、そうかい、じや、遠慮なく」

「・・・なんで僕の隣に?」

「ダメかい?」

「いや、そんなことはないけど・・・」

「なら、別に構わないだろ」

・・・普通、こういう場合は主人の隣に行くものじゃないのかな？

しかも、なんか人を挟んで睨みあいをしてるし・・・何で？

「あ、そうだ、アルフさんにこれをあげるよ」

「これは・・・リボン？」

僕があげたのは真っ白なリボンだ。

本当はなのはちゃんあげようかなと思つてたけど、

「うん、ちょっと前に魔法を物に込める練習をしたんだ。このリボンには回復魔法が入つてる。ただ強力な魔法だからあまり多様すると自然治癒能力が弱くなつたりするから使用は緊急時にね」

「そんなことができるの？」

「うん、フェイトちゃんはできないの？」

「普通はできないよ」

へえ、まあ、僕はフェイトちゃんたちは違うし・・・

「使い方はリボンに魔力を込めて対象者に結んで上げればいいよ」

「ありがとう、結んでもらえるかい？」

「僕でいいなら喜んで」

そういうつて僕はアルフさんの髪にリボンを結びつける。

《アルフ・・・ずるい、またアルフだけ》

《ふふん、いいだろう・・・つてまあ、それは冗談としてフェイトもなんかしてもらつたんじやないのかい》

《うん、何か加護がどうとか》

《なんかフェイトの調子がいいせいか、私も絶好調なんだよね》

「はい、これでいいよ」

「ありがとよ。瞬兵」

「どういたしまして、でも、本当に僕、そろそろ戻らないと」

「そつか、残念だけど仕方ないね」

「えく、私はまだ、会つたばつかなのにさ」

「ごめんね。アルフさん、じゃあ、二人とも・・・またね」

僕は一人の頭を優しくなでてから今度こそ旅館に向けて歩き出した。

「ただいま」

「おかげり、瞬兵

「おかげりなさい、瞬兵くん」

「無事でよかつた」

「本当に遅いから心配したんだよ」

あれ、ユーノくんがいない……？

とりあえず僕はそこに居た幻影を消す。

「ねえ、星夜、なのはちゃん、ユーノくんは？」

「…………」「

「それが……」

「アリサちゃんに無理矢理……」

「女湯に連れてかれた？」

「うん……」

ユーノくん、気の毒に……つてあれ、

「ひよつとして、温泉、直つたの？」

「あ、うん」

「や、やつたあ！」

「「ぐはっ……（あ、全開笑顔……）」」

約二名が鼻血だしながら意識不明の重体になつたがそんなことまったく気にせずに

温泉へ向かつた。

何せ、速攻で温泉に行つちやつたもんだから、見てなくて……てへ

「ん、あ、気持ちいい」

僕はただいま待望の温泉に入っています。

「ああ、この瞬間までが長かつた」

もう、幸せ・・・この為に頑張つたんだから、

一
九
三
二
一

ああ、本当に幸せ・・・つてあれ・・・なんかお湯が赤く・・・

僕はその赤の元を探すと、

僕は悲鳴をあげた。

そこには鼻血だしながら今にも襲い掛かつてきそうなユーノくん（なんでここに居る）

の?）、そして知らないおじさん三人がいた

「ひつ
・
・
・
こ、
来ないでえつ!!」

ズバーデおおおおおん！

全員が一歩近づいた瞬間に僕は襲い掛かる衝動のままにそいつ等を殴り倒した。

「「「「「どうしたのっ!?」」」」

僕の悲鳴を聞きつけた旅行メンバーはここが男湯だということ完璧に無視して様子を見に来て・・・

そこから先は地獄絵図が展開された。
なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、星夜はいつの間にかこつちに来ていたユーノくんをたこ殴りにし、知らないおじさんズは聞かないほうが精神的によろしいと思います。

ただ僕は高町家も月村家、怒ると本当に恐ろしいのだと知りました。
特にお母さんと忍さんとお兄ちゃんとお父さん・・・美由姉は最終的にはなんとか止めようと頑張っていた。

でも、最初に参加してたから説得力皆無だつたけど・・・

「ひくつ・・・こ、怖かつたよ～」

「瞬兵、もう大丈夫だぞ」

「うん、悪は滅びたの」

「そうよ。もう平気よ安心しなさい」

「そうだよ。瞬兵くん、あつちの変態シジイたちはお姉ちゃんたちが始末したし」「・・・始末つてすずかさんその言い方はちょっと」

「せ、星夜く、う・・・ふええええええん！」

僕は星夜に抱きついて泣き出してしまった。

「（ふ、不謹慎だけど可愛い）」

その後この日この旅館にいたものたちから湯煙温泉地獄巡りと呼ばれたらしい……
僕はお母さんたちが何をしたか詳しいことは覚えていないけど、地獄巡りって……
何をしたんだろう。

「……あうあう」

今、僕は真っ赤になつて俯いている。
何故かつて？

それは、正気に戻つたらさつきの醜態が恥ずかしくなつたからだよ。

でも、星夜が何故か三人娘に一発ずつ殴られてたけど……ひょつとして僕が星夜に抱きついて泣いたからだろうか……
だつたら悪いことしちやつたかな……

「大丈夫よ瞬兵くん」

「え、何がですか？」

「今、瞬兵くんは星夜くんが自分のせいに殴られて悪かつたかなとか思つてるよね」

「・・・な、何で分かるのでしょうか？」

「だつて、顔に出てるもの」

「（僕、結構ボーカーフエイスは得意なほうなんだけどな）」

「とにかく、星夜くんはまったく気にしてないわよ。それどころか役得ラツキーとか思つてるわよ」

「役得？」

「それが余計に気にくわないんだけどね」

「（こ、怖い・・・）あの、所でアリサちゃんなどのはちゃんは？・」

「今頃は星夜くんいびりに力を尽くしてんじやないかな、私もさつきまで参加してたし」

「ごめん、星夜、やつぱり今度手作りお菓子でも持つていってあげよう。

「（何を考えてるのか分かるけど・・・それがまた、嫉妬の嵐を呼ぶのよね）」

「でも、何を作ろうかな・・・クッキー、ケーキ、アップルパイ、スイートポテト、・・・あ、カステラとかもいいかも、

「何を作ろうかな♪」

「（あ、なんか論点がずれたみたいね。よかつたわね星夜くん、助かつたわよ）」「ねえ、すずかお姉ちゃんは何がいい？」

「え、私は・・・チョコレートケーキかな」

「うん、今度作つて持つていくね」

「ありがとう」

「えへへ・・・」

「う・・・なんかすずかお姉ちゃんに頭なでられた・・・恥ずかしいけどちよつとうれし
ぱたん！」

「ええっ、す、すずかお姉ちゃん、しつかりしてえ、鼻血だして倒れないでえ」

あ、そういうえばファルさんも同じ事をしてたつけ・・・最近は表情のコントロールが
上手くいってないのかな・・・

はあ、帰る準備をしよ。

温泉にもう一回一人で行くのはやだ・・・ユーノくんは原因の一人だし、星夜はここ
にいないし、お父さんもお兄ちゃんも帰る準備中だし・・・アリサちゃんの執事さんは
やっぱり帰りの仕度中だし、なによりアリサちゃんの執事だしね。

温泉には確かに入れたけど結局、リフレッシュにはならなかつた気がする。
誰か、一緒に入つてくれないかな・・・

「こんにちは瞬兵くん

「ファ、ファルさん!?」

「はい」

「なんで・・・」

「私も温泉に入ろうかと思いまして」

「本当に！」

「はい」

「じゃ、じゃあ一緒に行こうよ」

「構いませんよ」

やつたやつた、今度こそゆつくりと温泉に

「ダメーーーツ！」

「うわわっ・・・あれ、星夜、なのはちゃん・・・アリサちゃんは？」

「ユーノくんが目を覚ましてまたおしおきを」

「そんなことより瞬兵、こんな奴と温泉なんかダメに決まってるだろ！」

「そうなの、絶対にダメなの」

「何で」

「危険だからだ（よ）」

「そりやファルさんは敵だけど」

「違う！そういう意味じゃない」

「じゃ、どういう意味」

「そ、それは……」

「大体、ファルさんはこんな子供に手を出さないよ……ね、ファルさん」「…………」

「あれ……すばらしい笑顔だけど何で、返事がないのかな、かな……」「ね、ねえ、ファルさん」

「何ですか？」

「だから、手ださないよね？」

「さあ、どうでしようかね」

「……う、どいつもこいつも」

結局、僕の平穏はここにもないんだね。

それから三人は僕を無視するように口げんかを始めた。

そういえばすずかちゃんに耳栓をしとかないと……ファルさんの事、すずかちゃんは知らないんだから、とか考えながらすずかちゃんに耳栓をして、僕は三人を置いて部屋を出た。

すずかちゃんは廊下の長椅子に寝かせた。

結局、僕は満足に温泉に入れないまま、今回の旅行は幕を閉じた。

しくしくしく・・・それから三日ほど僕はみんなと一言も口を聞かなかつた。全員が泣きながら謝つてきたので三日で許したけど本当は一週間の予定でした。

第七話 聞こえても届かない声

「え、喧嘩？」

「うん……」

「アリサちゃん達と？」

「うん……喧嘩っていうより一方的に怒鳴られたみたいなものだけど、悪いのは私だし」

「ふむ……どうせなのはちゃんとのことだから疲れた顔してる理由を聞かれて答えられなかつたんでしょ」

「……鋭いね。瞬兵くん」

「誤魔化す方法なんていくらでもあつたでしょに」

「だつて……誤魔化したくなつかつたんだもん」

「だつたら、理由を話せばいい、聞こえても届かない声があるんだつて」

「……聞こえても届かない声？」

「そのとおりでしょ、フェイトちゃんにもファルさんも」

「フェイトちゃん？」

「あれ・・・ひよつとして名前まだ聞いてないの」

誰それって言わんばかりのなのはちゃんの声に僕は思わず聞き返した。

「・・・ねえ、誰なのかなそれ」

「ちよつと、さつきまで落ち込んでたしおらしいなのはちゃんはどこにいったの」「そんなこといいから、そのフェイトちゃんって誰なの」

「さつきまでの落ち込んだ姿を消して黒オーラ全開でなのはちゃんが問い合わせてくる。「だから、ジュエルシードを集めてる女の子だよ」

「あの子、フェイトちゃんって言うんだ」

「それよりもだ。友達になりたい子がいるんだけど上手くいかない、それだけでいいのに」

「だつてその子を紹介してつて言われたら」

「私が一人でやりたいのつて言い張ればいいのに・・・二人ともなのはちゃんが頑固なのを知ってるから、待つてくれるよ」

「・・・じゃ、ひよつとして」

「うん、おもいつきり無駄な喧嘩だね」

「あ、落ち込んだ・・・暗いなあ・・・」

「ねえ、今からでも話しておいでよ」

「でも・・・」

「大丈夫、アリサちゃんやすずかちゃんにはちゃんと届くよ。なのはちゃんの言葉、なのはちゃんの想い」

「瞬兵くん」

「親友でしょ、信じなよ。分かつてくれるって」

「うん、私、行つてくるよ」

「行つてらっしゃい、僕も出かけるから、頑張つてね」

「うん！」

うん、元気になつたね。

やつぱりこうじやなきや・・・声は聞こえても届かない、そんなことはいくらでも世界にある。

それでも、声はださなきや届かない、想いは伝えなきや届かない。

僕はまだ諦めないよ。

ファルさん、フェイトちゃん、絶対に僕の声を、僕の想いを届けてみせる。

さてと、はやってちゃんにお土産を届けに行かないと・・・

「ユーノくんはなのはちゃんについていつてみたいだし」

僕も出かけるかな・・・

「あ、その前にクッキー焼いていこうかな」

というわけで小麦粉、牛乳、バターと材料をかき集めてクッキーを作り始めた。

「は～や～て～ちや～ん」

「は～い、ちよつと、まつとつてな」

あれから二時間後、僕は今はやてちゃん家の前にいる。

なぜかインターほんを使わないで直接よんだ。

温泉旅行のお土産とクッキーを渡しに来たんだけど、

「こんにちわ、瞬兵くん、待たせてごめんな」

「それは別に、構わないんだけど・・・はやてちゃん」

「ん、なんや」

何だか凄く嬉しそうな顔をしてる。

「なんか、嬉しそうだけどなにがあつたの？」

「ん・ちよつとな（シグナムたちが言うには本を開いた人物は危険かもしれないっちゅ

うことやけど)』

「なんですか・・・人の顔をジッと見つめて

もう、僕の顔に何かついてるのかな?

「あ、いや、なんでもないんよ(とても、そんなふうに見えへん)」

でも、変だな・・・

はやてちゃんから強い魔力を感じる。

この前はなかつたんだけど、思い当たる原因はあの本かな・・・
けど、はやてちゃんは幸せそうだし・・・

ジュエルシードでもないから、きつと大丈夫だよね。

「それで、何の用や?」

「あ、忘れてた。これ温泉旅行のおみやげと焼きたてのクツキーだよ」

「ホンマに? ありがとう瞬兵くん」

「本当は一緒に行ければよかつたんだけど・・・僕が連れて行くわけじやなかつたから」

「そんなん、気にせんでええよ(というかシグナムたちがおるからどつちにしても行かれ
へんよ)」

「それは、万華鏡なんだよ」

「へえ、そなんや」

うん、嬉しそう、よかつた。

でも、本当に一緒に行ければよかつたのに……

「あ、瞬兵くん、せつかくのクッキーだからな、お茶飲んでいかへん
「お誘いは嬉しいですけど……今日は、それにはやてちゃんの所、今は誰かいるんでしょ
う？」

「何で分かるんや」

あ、驚いてる。

だつて、靴が見えるし……相変わらず妙な所で抜けている。

知られたくないなら靴は隠すべきだよ。

「靴が」

「靴？」

「明らかにはやてちゃんのサイズじゃない靴が四足もあつたし……」

「……なるほど、それは分かりやすいなあ」

「だから今日は遠慮しますよ」

「すまんなあ、今度こっちから誘うわ、そんときはお茶しよな」
「はい、じやあまた……あ、それとこれも渡しておきますね」

「腕輪？」

「お守りです……きつとはやでちゃんを守ってくれますよ」
とは言つてもアルフさんにあげたのとは違つて魔力を少々、遮断するくらいしかでき
ないけど……

ううん、はやでちゃんがなんか幸せそうで……

それはいいんだけど、嫌な感じ……

僕の予感は基本的に当たるからなあ。

変なことにならないといいけど、

「綺麗やな」

「まあ、木を削つて僕が作つたんですけど」

「……は？」

あ、固まつた……そんなに以外かな……

「そんなに以外ですか？」

「あ、いや……そうゆうわけやないんやけど……凄く上手やから」

「そう言つてもらえると作つてよかつたと思いますね」

「はあ、しかし、こんな才能もあつたんやな」

「それ、できるまでに失敗作が五十個くらいあるんですよね」

「そ、そんなに作つたんか!?」

「ええ、まあ」

「そんな苦労したもん、私が貰つてええんか?」

「だつてその為に作つたんですから」

「わ、私の為に……//」

まあ、確かにやでちゃんの為に作つたのは確かだけど……

単なるお守りでしかない。

「さつきも言つた通りそれはお守りですから……何か災厄を回避すると汚れてくるはずです」

「は?」

「いえ、そういうふうに作つたので……もし壊れたり汚れきつてしまつたら捨てるか僕に教えてください」

「(いや、そういうふうについて) りよ、了解や」

「そしたらまた新しいのをあげます」

「瞬兵くん、これどういう意味で私にくれるん?」

「ただのお守りです。それ以上でもそれ以下でもありません」

「(別に好きやからやないんやね)」

「まあ……どうでもいい人にわざわざ作つたりしませんよ」

「(くうつ・・・な、なんて狡猾な)」

「本当にただのお守りですから」

「心配してくれてありがとうな」

僕はこの家に近づいてくる魔力を感じてそちを振り向く。

「あれ・・・」

「え、なに、どうかしたん?」

犬・・・いや狼?

あれ、でもこれは・・・魔法生物?

「ザファイーラ、おかえり」

「え!?

ザ、ザファイーラってこの狼の名前?

何で・・・

「えと、この子、ひよつとしてはやてちゃんが?」

「そうや、家で飼つてる子や」

「でも、犬小屋とか見えないけど

「家の中で飼つてるからな」

・・・・・どうしようか、この事態、

1、何も言わずに去る。

2、とりあえず事情を聞いただす。

3、はやてちやんたちの記憶を封じて逃げる。

4、とりあえずぶちのめす

・・・・・

は・・・何か選択肢が頭を過ぎつたけど、

「えと・・・いつから?」

「この前、瞬兵くんに送つてもらつた日の夜や」

「そ、そう・・・ん」

何か狼が擦り寄つてくる。

「お、瞬兵くん、ザフィーラに気にいられたみたいやな」

「ああ、そう・・・」

ど、どうしたら・・・や、やつぱり・・・逃げる?

つてそれは、怪しいよな・・・あ、そういえばまだ魔法の込めてないリボンをもつて
たつけ、
「じゃあ、ザフィーラちゃんにはこれをあげるね」

そう言つて僕はザフィーラちゃんに青いリボンを結んであげた。

「ぶはつ・・・

「何故かはやてちゃんが噴出した・・・なんか笑いをこらえてる・・・?

「はやてちゃん?」

「あ、いやいや、ザフィーラは男の子やから」

「じゃあ、ザフィーラくん?」

「まあ、そうやな(・・・ザフィーラにリボン・・・おまけにザフィーラちゃんにザフィーラくん・・・に、似合わへん・・・特に人型ザフィーラのリボン・・・暫くはからかって大笑いできそうやな)」

「ふうん、ごめんね。ザフィーラくん」

む、この子全然吼えないね。

「あ、じゃあ用事もすんだから、またねはやてちゃん」

「ああ、またな、瞬兵くん、氣いつけてな」

「はい」

「ああ・・・何か決定的な間違いを犯したような気がする」

はやてちゃんたちと別れてから僕は近くの公園に来ている。

「何でだろう・・・」

僕はこのときこの感覚の意味をそう遠くない未来に知ることになる。

はあ、さてと今日はこの後は予定はないんだけど・・・

どうしようかな、ファルさんでも来ないかなあ・・・

「つてさすがに来ないよね」

「誰がですか?」

「だからファ・・・」

「はい」

「な、なんでここにいるのかな・・・」

「通りすがりです」

「嘘つけっ!」

僕は思わず即答してしまった。

「この人、本当にストーカーなんじや・・・」

「いえ、実はこの間巻き込んでしまったので・・・狙われていないかなと思いまして」

「うん、きっとその内襲われるだろうね・・・」

それはもう既に決まったことだ。

あの日、ファルさんの事情に巻き込まれたときから確定した未来だ。

「でも、気配を消す結界を張つてるから簡単には見つからないよ」

「なるほど……どおりで探すのが大変だつたわけですね」

「でも、この結界は外からの気配も遮断するから、いつもより鈍くなつてゐるんだよ」

「ああ、それで気がつかなかつたんですか」

「ところで……その口ぶりだと少し前から居たみたいだけど」

「あ、ちょっと顔が引きつった。」

「いつからいたのかな？」

「それは秘密です」

「あなたはどこぞの怪しいプリーストですか？」

「とりあえず、一発殴つても許されると思うんだけど」

「そんなことよりも、身体に異常はないですか？」

「別に平氣だよ……あの触手は気持ち悪かつたけど何せ服の中にまで入り込んでたから」

「服の……中？（……くつ、殺し損ねたのがこれほど悔しいとは）」

「まつたく失礼な触手だつたよね」

「それはつまり触手ブ」

「ドゴンッ！」

「それ以上はNGだよ」

やばげな事を言いそうになつたファルさんをとりあえず裏拳で黙らせる。

「す、すみません」

「コホン・・・ファルさんにも気配隠しの結界を張るので気配に鈍くなります。が我慢してくださいね・・・いつも助けに行けるとは限りませんし」

「あの・・・何故、助けてくれるのですか?」

心底不思議そうに訪ねてくる。

「別に危ない目にあつてる人を助けるのに理由なんか必要ないでしょ」

「それは、甘くて危険な事ですよ」

「そうだろうね・・・まあ、ファルさんはお友達だしね」

「私は敵です」

「あのね。フェイエイトちゃんもファルさんもそんな顔で言つても説得力なんて微塵もないの」

「そう、そんな泣きそうで悲しそうで壊れてしまいそうな、そんな顔で何を言つても無駄・・・」

「まつたく、大人しく頼ればいいのに、まあ、自分でも甘いなあと思うけど・・・」

「まつたく・・・子供じやないんだから人に頼るのも選択肢の一つだよ」

「言つてくれますね・・・」

「ふふん、悔しいならほれほれ事情を話してみい」

「そ、それは・・・」

「ほれほれ」

「ああ、楽しい・・・ファルさんをこんなに一方的にいじれるなんて、初めてのことだ。

「まあ、いいや」

「え・・・?」

「その内、嫌でも話すことになるからね」

きつとジュエルシードはファルさんの役には立たない。

だって、ジュエルシードとあの怪物たちは力の質がそつくり。

ジュエルシードじや、あの怪物たちは倒せない逆に吸收して強くなるのがおちだ。

けど・・・言えないよなあ・・・言つたほうがファルさんの為になるんだけど、一人

で頑張つてる人にあなたがすることは無駄ですとはさすがに、

これが優しさじやないことぐらい分かるけど・・・うう、どうしよう・・・

「ま、とにかく、彼の者を悪しきものより包み隠せ、彼の者に世界の加護を!」

ファルさんの周りに結界を張り巡らせる。

「気をつけてね。この結界はあくまでも気配を遮るもので魔法とかは素通しだからね」

「あ、はい・・・分かりましたけど」

これから忙しくなりそう、ジユエルシードも、残り少ないし。
それにもしても……フェイトちゃん、大丈夫かなあ……
あの怪物たちとジユエルシードは同種の物だ。

それに気づけば必ずジユエルシードを狙つて動き出すだろう。

「もう一つ」

「はい？」

「もう一つ、聞いてもいいですか？」

「何を？」

そんな真剣な顔で何を聞こうと……

「私がジユエルシードを集めて……いえ……瞬兵くんは恋人は居るんですか？」

「居ません」

ファルさん……気がつきはじめてるんだね。

ジユエルシードを集めても無駄だつてことに……

でも、ここまで来て、それを認めたらやつと見つけた希望が無くなる。

口に出したくないよな……
でも……ここで告げないと

「あの、ファルさ」

「!?」

「ジユエルシードの気配……しかも、魔力を流して強制発動させたみたいだし、無茶するなあ」

「ふむ……では、私は先に行かせてもらいます」

「え!? ちょっと、まつ」

もう、転移しちゃった。

「……言い損ねた」

なのはちゃんと話す機会は必要だよね。

今日は行くのやめよう。

僕はその場で戦いの場の魔力を探る。

「あ、瞬兵」

「星夜!」

「行かなくてもいいのか?」

「うん……なのはちゃんと話し合う機会は必要だから」

「なるほど……まあ、話し合いは大事だからな」

「でも星夜の感覚も段々鋭くなってきたよね」

「そうなのか?」

始めの頃はジユエルシードの発動も分からなかつたのに、

「だつてジユエルシードの発動をちゃんと感じ取れるようになつてるもん
『そういや最初は分からなかつたな』

「ねえ、エリアサーチの練習してみない？」

「エリアサーチ？」

「探索魔法だよ・・・なのはちゃんや僕は魔法を練習してるから色々とできただけど星夜は
ちゃんと練習を続けてたわけじゃないでしょ？」

「まあ、偶に防御魔法や結界の練習はしたけどな」

「それでも探索関係は教えてもらいないのに」

「俺つてひよつとして凄いのか？」

「まあ・・・才能はあるだろうね（なのはちゃんと同じかそれ以上に）」

「そつかそつか」

「すぱーんっ！」

「調子に乗らない！」

「ま、またハリセン」

「才能が有ろうと無かろうとまずは練習！」

「はい・・・」

「魔法って才能があつても修行しなきやなんの役にも立たないんだから」

「修行つて言つたつてよ」

「術式の構築の仕方は防御魔法で覚えたよね」

「ああ・・・」

「なら今度は理論かなどこをどうすればどうゆう魔法になるかとか」

なのはちゃんは術式の構築がまだまだデバイス任せだからね。

後でそこらへんをじつくりと教え込まないと・・・僕もシユテルシアなしで魔法を扱うのをもつと頑張らないとね。

「じゃ、ちょっと練習してみようか」

「練習?」

「エリアサーチの練習だよ」

「でも今はなのはさんたち戦闘中だろ?」

「あ、そういうえばそうだつたね・・・」

「今ここで結界を張るのはまずいだろ」

「戦いは何があるか分からぬもんね」

「また、今度教えてくれよ」

「うん」

「!?」

感じたのは膨大な魔力……

「……なにこの魔力、まさかあの三人が居て封印が失敗したなんてことは本当に何この馬鹿魔力は、このまま爆発したらここらへん一帯が吹つ飛ぶ。とにかく行くしかないか……

「ジュテルシア、セットアップ」

『イエス』

「瞬兵、気をつけるよ」

「うん……大丈夫だよ」

やばいかもしれないけど放つておくわけにはいかない。

何が何でも止めないと……

「じゃ……行つてこい」

「うん、星夜は帰つて……いつてきます」

僕は転移する。

転移して見た光景は今にも暴走しそうなジュエルシードと壊れたレイジングハートとバルディツシユ、エールを持ち吹き飛ばされそうな三人の姿……

そして何か吹き飛ばされてきた物体を思わず受け止め。

「うわっ！」

吹っ飛んできたアルフさんに潰された。

「いたた……アルフさん、どうなつてのこれ？」

「いや、周りからの過剰魔力のせいで暴走してるんだね」

「ということは……周りの魔力を遮断して三人を引き離してから封印しないとかな、
「あの三人の魔力を排除か……難しいな……けど、やるしかないか」

僕は杖の先端をジュエルシードに向けて構える。

「アルフさんバインドで三人をジュエルシードから引き離して」

「わ、分かった」

「全ての力よ。闇へと墮ちて消えよ。暗き深淵、虚空の狭間、真空の呪縛よ。彼のものに
宇宙（そら）の鎖を！」

「チエーンバインド！」

アルフさんが三人をジュエルシードから引き離したのを見て僕は術を発動させる。

「アブソリュート・ゼロ！」

ジュエルシードの周りに全ての力を無に返す鎖が絡みつくフィールドを作り出す。

「つつ……」

身体にかなりの不可がかかる。

「くうつ・・・凄い重圧・・・」

氣を抜くと杖が弾きとばされそう・・・でも、ここで杖から手を離したら暴走するの
は間違いない。

「・・・・・ぐつ」

放出する力に耐え切れずに手から血が流れ出す。

「・・・とつとと」

僕は流れ出る血に構わずに杖を強く握り締め、
杖を大きく振るつた。

それと同時に腕からも血が流れた。

「・・・消えろおおおおっ！」

空が一際強く輝き背の翼の輝きがます。

そして・・・光がきえた。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・なんとか収まつた・・・早く、封・・・印」

そこで僕の意識は途切れた。

「う・・・あ・・・」

「瞬兵くん!!」

意識を取り戻した僕をなのはちゃんが心配そうな顔で僕を覗き込む。

「なのは・・・ちゃん?」

「よ、よかつたあ」

僕は上半身を持ち上げる。

するとなのはちゃんは突然すがり付いて泣き出した。

「え、あ・・・ちょっと、泣かないでよ」

「し、心配したんだから」

「ごめん」

あれ、そういうえば手と腕・・・手当てされてる。

「ねえ、これなのはちゃんがやつたの?」

「・・・右はファルさん、左はフェイトちゃんが

あの一人・・・後でお礼を言わないとね。

「ジュエルシードは?」

「フェイトちゃんが」

そつか・・・フェイトちゃんが・・・

「痛つ・・・・・」

「だ、大丈夫!?

「うん、ちょっと手が痛んだだけ」

「本当に大丈夫なの?」

「うん、強い力を長い間出し続けて体が耐え切れなかつただけだからね」

「そう・・・・・」

何せ三人分とジュエルシードだからね。

「なのはちゃんも気をつけてね。人の身体は強い力に耐え切れない。それを補うために人は訓練をする。身体を鍛える」

「・・・・・・・・・」

「それでも、追いつかない場合はこうなる。僕はお父さんやお兄ちゃん、美由姉との訓練もしてる。それでもこうなった」

「うん、気をつける・・・無茶はしても、無理はしないよ」

「うん、なのはちゃんは頑固だからね。心配だよ」

「・・・反論できないけど、瞬兵くんも無茶しないでね」

しまつた、返された・・・・

そりや自分でもちよつと無理しちゃたかなくとか思わなくも無いけどさ。

「わ、分かってるよ。今回は緊急事態だつたから」

「うん、しかしファルさんもフェイトちゃんも包帯巻くの上手いな・・・

「あ、ねえ、どうして今日は遅れて来たの？」

「必要だと思ったからね」

「どういうこと？」

「ちゃんとフェイトちゃんの口から名前、聞けたでしょ」

「え、うん」

「僕の言葉に領きそれがどうしたのと目で問いかけてくる。

「なのはちゃんの名前も伝えられたでしょ」

「うん」

「僕が行くとできないから」

「そう、僕が行けばきっと二人は満足に話せないで終わるだろう。

「・・・ありがとう」

「お礼を言うことじやないよ。何せ僕はさぼつたんだから」

「ううん、私、もつとフェイトちゃんの事知りたい、友達になりたい」

「ああ、なのはちゃんのスキル、頑固が発動中だ。」

「じゃ、頑張ろう、僕たちの声を、想いを届かせよう」

「うん」

「あ、そういえば喧嘩はどうなったの？」

「無事に解決したよ。本当にありがとう瞬兵くんのおかげだよ」

嬉しそう・・・よかつたよかつた。

まあ、大して心配はしてなかつたけど・・・なのはちゃんと達だからね。

「違うよ」

「え?」

「三人が友達だからだよ」

「あ・・・うんっ!」

三人はこれからもつと仲良くなれるだろうから、ちょっと羨ましいかな。

僕も星夜も偶には喧嘩があるし・・・いや、喧嘩と言うより僕が怒つてゐるんだつけ・・・

星夜、懲りないからなあ。

「あ、この怪我は治さないと」

「あ、お母さんがどうしたのって大騒ぎするよね」

「なのはちゃんもそう思う?」

「うん」

さて、本当はこれくらいの怪我は自然治癒のほうがいいんだけど、

まだ、魔法とかジュエルシードとかの話はしたくないしね。

「仕方ない、ティンクル・キュア」

光が手の怪我を癒していく。

「すごいね。こんな強力な回復魔法はそうそうないよ」

「ユーノくん・・・居たんだ」

「ひ、酷い・・・確かに話に入れなくて黙つてたけど」

「あ、あはは・・・ご、ごめんね。ユーノくん、あ、後でクツキー焼いて上げるから」

「・・・瞬兵のクツキーはおいしいけどさ」

「あ、ねえ、レイジングハートは大丈夫なの?」

「それが・・・」

なのはちゃんの赤い宝石には鱗が入っている。

「心配しないで自己修復してるから明日には直つてるよ」

「そか、よかつたね。なのはちゃん」

「うん・・・」

「ふう・・・そろそろ帰ろうよ」

「・・・そうだ。私がおんぶしてあげるよ」

「え・・・」

「なに、その反応」

「だつて運動音痴のなのはちゃんと僕を背負えるの？」
「あのね。瞬兵くん、自分の小ささを忘れてない」

「どしゅっ！」

何かが心を貫いた気がする・・・

「そうだよね・・・僕、小さいもんね。」

「(なのは・・・それ、結構酷い)」

結局この日僕はなのはちゃん背負われて帰ったのだった。
家についたら大騒ぎされたので貧血って言つて誤魔化しました。

「はう、疲れたよ」

「ご苦労様、瞬兵」

「ユーノくん・・・ユーノくんはどうしてそんなに一生懸命にジュエルシードを探すの？」

「ジュエルシードを世の中に出したのは僕だから
だつて悪いのはユーノくんじゃなくて・・・

「ねえ、護衛とかいなかつたの？」

「え？」

「だからジュエルシードなんて危険な物を運ぶのに護衛は居なかつたのかつて聞いてるの」

「それはもちろん居たよ」

「じゃあ、別にユーノくんは悪くないじゃない」

「でも……」

责任感が強いのは結構だけど正直無謀な行為だなど僕は思う。

それでも見捨てておけないんだけど……

「これは推測だけどね。そういう危険なものは専門に扱う機関もあると思うんだけど」

「確かにあるけど……」

あ、やっぱりあるんだね。

「深くは聞かないけどさ……誰かに頼るのも大切だよ。僕やなのはちゃんを頼つたみたいにさ」

「それは分かつてるけど……本当は魔力が戻つたら此処から出て行くつもりだつたんだけど」

なのはちゃんは頑固だしレイジングハートもなのはちゃんをマスターとして認めちゃつたからね。

「つまりは一人でどうにかするつもりだつたと……」

「うん……ごめん」

「ユーノくんが謝ることじやないよ」

「でもねえ、正直な話ただの危険物回収が厄介なほうに流れてる。

「ただの危険物の回収……のはずだつたんだけどねえ」

「僕もそのつもりだつたよ」

「これ以上増えないよね……厄介事……」

「ふう……寝ようか」

「うん……また明日も頑張ろうね。瞬兵」

「そうだね。早く全てのジユエルシードを回収しなくちゃね」

「戦いは避けて通れないと思うけど」

「仕方ないよ……二人は諦めない」

「ファルさんもフェイトちゃんも諦めたりしない。

「そして……僕たちも」

「ごめんね瞬兵……巻き込んで」

「気にしなくていいよ。僕もなのはちゃんも自分で決めたことだから、ユーノくんが自分でジユエルシードを探すことを決めたのと同じようにね」

そう・・・自分で決めた。

だから逃げない、投げ出さない。

そしてそれはフェイトちゃんとファルさんについてもだ。

「ごめん・・・」

「え・・・なんで瞬兵が謝るの?」

「だってユーノくんの目的はジュエルシードの回収でしょ。フェイトちゃんのことも、ファルさんのことも関係ないじゃない」

「・・・それこそ謝る必要ないよ。一人と戦わなくてすむならそれに越したことはないし・・・何より僕は二人を危険な事に巻き込んだ側なんだから」

「ユーノくん・・・」

「だから瞬兵もなのはも思うとおりにやつてくれていいんだよ。二人の想い、きっと届くよ。届かないはずがないよ」

「ありがとう、ユーノくん」

そして僕たちは眠りにつく。

みんなで仲良くお茶してる夢でもみたいな・・・それが現実になるにはまだまだたくさんの方々がいるだけね。

第八話 出会いは砲撃と共に？・・・ごめんなさい

ジュエルシード暴走未遂の次の日、

レイジングハートもちゃんと治つて一安心だ。

「おはよう、アリサちゃん、すずかちゃん」

元気に二人に挨拶をするなのはちゃん、笑顔で挨拶を返す二人・・・
本当に世話が焼けるお姉ちゃんたちだよね。

「おはよう、星夜」

「おはよう、瞬兵」

「ね、今日は放課後空いてるかな？」

「あ、ああ、大丈夫だ」

僕の突然の言葉に戸惑っているようだ。

「じゃ、放課後、翠屋に来てよ。僕がごちそうしちゃうから」

「いいのか？」

「うん、偶にはね。あ、なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん」
こっちを・・・正確には星夜を睨みつけていた三人にも声をかける。

「なに?」

「どうしたの?」

上からなのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんだ。

返事一つとってもこれだけ違うのに縁つて不思議なものだよね。

「放課後三人も翠屋においでよ。僕が仲直り記念ケーキを焼いてあげるから」

「「行く!」」

声がハモツた。

・・・息ぴつたり、本当に仲良しだ。

いいことなんだけど、なんか目が血走つてない?

「うん、じゃあ・・・そうだなあ・・・四時くらいから五時くらいに来てね。作つておくから」

そんなやりとりがあつた放課後、僕は翠屋の厨房でケーキが焼きあがるのを待つてい
る。

「瞬ちゃん、悪いけどちょっとお店、手伝ってくれる」

「あ、お母さん、いいよ」

つてなわけでただいま僕は臨時でお手伝い中、

「すいませ〜ん」

「は〜い、ただいま」

呼ばれたテーブルに行き。

「ご注文はお決まりですか?」

「紅茶セットを二つ」

「はい、紅茶セット二つ、三番テーブルで〜す」

「すいません」

「はいはい、お待たせいたしました」

「チーズケーキとこの瞬兵特製日替わりケーキセットを」

「はい、チーズケーキと日替わりケーキセット、八番テーブルです」

「紅茶セット二つできたわよ〜」

「は〜い、お待たしました紅茶セットになります。ご注文は以上でおそろいですか、どう

ぞごゆつくり」

「カラんカラん!」

「あ、なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、星夜、みんな、いらっしゃい」

「あれ、今日は瞬兵くんお手伝いの日じゃないよね？」

「うん、でも厨房を使わせてもらつてるしお客さんも多いし……あ、席はこっちね。ケー
キまだ仕上げが終わつてないからちょっと待つてて」

「すいすませくん」

「あ、はい、ただいま、じゃね」

僕は四人を残して次のテーブルに向かう。

「お待たせいたしましたご注文はお決まりですか？」

「サンドイッチのセットを」

「はい、サンドイッチセット五番テーブルさんです」

「瞬ちゃん、美由希が来たから、戻つていいわよ！」

「あ、はい」

僕は厨房に戻つてケーキの仕上げにとりかかる。

「ふんふんふん……つとよしこれででき」
「がつしやくんつ！」

「わきやつ！」

「ぐしゃつ！」

「あ……」

突然、店のほうから響いた大きな音に僕は思わずケーキを落としてしまった。

「・?・?・?・?・?」

お店のほうでなにかがあつたのは間違いないだろう。

僕は様子を見にお店のほうに顔だす。

「あんたたちいい加減にしなさいよね！」

倒れたテーブル、割れた食器、そしてガラの悪い高校生らしき三人組みにくつてかかるアリサちゃん。

「ねえ、これ何の騒ぎ？」

僕の一言は騒がしかつた店内を一瞬で静かにした。

「しゅ、瞬兵くん・?・?・?」

「しゅ、瞬兵・?・?・?」

「あの・?・?・?瞬ちゃん?」

「ね、これはなんの騒ぎ?」

「そ、そこの三人が美由希さんに痴漢を・?・?・?」

星夜、説明ありがとうね。

「お客様、ここは喫茶店ですので暴れなければ出て行つてもらえませんか?」

「「ひい」「」

僕は笑顔で三人組に近づく。

三人は短く悲鳴を上げて後ずさりする。

「い、いや」

「そ、その」

「だ、だから」

「問・答・・・無用！」

その日・・・僕に三人の下僕ができた。

「ごめんなさい」

「い、いや落としちやつたの仕方ないさ」

「そ、そうだよ。そんなに落ち込まないで」

「ま、また、作りなさいよ。待つててあげるから」

「そうそう、責任はある三人にとつてもらうから」

「〔〔すずか（ちゃん）（さん）・・・〕〕」

「本当にごめんね・・・」

うう、せつかく作ったのに・・・

「僕、お店の手伝いに戻るね」

「うん、頑張ってね」

ああもう・・・最低・・・
せつかくみんなと楽しくお茶しながらケーキ食べようと思つたのに・・・
とにかくお仕事をしないとね。

「は〜い、今行きます!」

しかし、急にお客が増えた気が? (→原因)

「は〜いケーキセット二つお待たせいたしました」

世の中不幸な出来事は続くものっていうけど僕はこの時完璧に油断していた。

一日に二度も三度も事件は・・・痴漢は起こらないだろうと・・・
昔の人は言いました春やら何やらになると変態が多くなると・・・
しかしそれは間違いで奴等は年がら年中活動している・・・
と言つていた人もいます。

「ひやつ!?

僕その場にへたり込んで小さな悲鳴を上げる。
響いた悲鳴に店内は静まり返る。

・・・い、今の感触は

「瞬兵、どうした!?

「星夜・・・その、あの・・・ち」

どゞがしゃどゞ！

大きな音と共にそばのテーブルの男が殴り倒されたのが視界に移った。

「お母さん、警察呼んで警察！」

男を殴り倒した美由希さんが声を張り上げる。

「この人今瞬兵くんのお尻触つてた！」

ぴきいいいいん！

空気が音を立てて固まつた。

次の瞬間、全員参加、痴漢をタコ殴り大会が開催された。

あれから一時間、男はボコボコにされ警察に連行されて行つた。

僕たちは今は僕の部屋に居る。

「あうう・・・」

「瞬兵しつかり」

「そう、悪は滅びたの」

「そうよ。痴漢は許されざる犯罪なんだから」

「うふふ、大丈夫だよ。顔は覚えたから二度と近づけさせないよ。そう二度と」

「「「「（す、すずか（ちゃん（さん）怖い）」」」

ああ、でもお店が滅茶苦茶だよ。

まさかのはちやんたちだけでなくお客さんまでタコ殴りに参加するとは...
でも、痴漢は初めてじゃないのにあの醜態は、

「くう...いつものように自分の手で殴れなかつたのが」

「「「「いつものように？」」」」

んげ...ユーノくんまで声を上げちゃつた。

「ん、ちょっと、何か今声が一つ多くなかつたかしら」

「アリサちゃんもそう思う？」

「き、気のせいだよ。気のせい、アリサお姉ちゃんもすずかお姉ちゃんも怖いこと言わな
いでよ」

僕は慌てて否定する。

「「「「（そ
うかなあ？）」」」」

「うだよ。ね、なのはお姉ちゃん」

「う、うん、私も聞こえなかつたよ」

『ユーノくんの馬鹿!』

『ごめん』

「所で瞬兵・・・さつきのいつものようにって言うのを説明してもらおうか」

「え?・・・いや、あの」

ひええ・・・みんな目が怖いよ。

星夜、話を逸らしてくれたのは感謝するけど、

「な、何も言つてないよ」

「へえ・・・」

「せ、星夜・・・目が怖いよ」

「じゃあ、嘘はやめよう、嘘は」

「そうだよ。瞬兵くんは嘘はダメなの」

「な、なのはちゃん・・・」

「瞬兵、大人しく白状したほうが身のためよ」

「ア、アリサちゃん・・・」

「瞬兵くん、白状するのとこれから私たちとじつつくりお話するのどっちがいい?」

「す、すずかちやんまで・・・」

「「「さあ、どうするの?」」」

「はい、僕の完敗です。」

「いや・・・その・・・偶にバスとか電車で痴漢されそうになることがあって」

「「「「ふうん、 そうなんだ」」」

「で、 いつもなら触られる前に殴り倒すんだけど・?・? 今日はちょっと・?・? その落としたケーキのことを考えてて」

「触られたのは初めて?」

「なのはちゃん、 何でそんなことを」

「い・い・か・ら・答える」

「えと・?・? 三度目です」

「瞬兵、 その痴漢はどうしたんだ?」

「一度目はお父さんが二度目はお兄ちゃんが・?・? 後で聞いたら怖い笑顔で始末したつて」

「「「「当然の報いね (だな (なの))」」」

・?・? そうなのかな?

そりや、 僕だつて殴り倒したりするけど・?・?

「瞬兵くん、 今度から電車やバスで絶対に私達から離れないでね」

「いや、 離れてるんじやなくて逸れてるんだけど」

一応言い訳してみる。

「じゃあ、 今度から手をつないで行こうか」

「それじやなのはだけずるいじやない」

「私は瞬兵くんのお姉ちゃんだもん」

あ、このパターンは・・・

「だったら男同士のほうがいいよな瞬兵」

「星夜くん、抜け駆けはダメよ」

やつぱり口喧嘩が勃発した。

ま、僕には好都合、僕は気配を消してユーノくんだけ連れて部屋から抜け出した。

「ふう・・・危なかつたねユーノくん」

「うう・・・本当にごめん・・・つい声を上げちやつて」

「いいよ別に、心配してくれたんだよね。ありがとう」

僕は抱いたままのユーノくんなでる。

とても気持ちがよさそうだ。

「ユーノくん、お散歩に行こうか」

「でも・・・いいの、なのは達を放つておいて」

「気にしないでいいの」

つきあつてたらいくら時間があつても足りないよ。

「じゃ、公園にでも行こうか」

「うん、じゃあ行こうよ」

あつという間に公園です。

まあ、ただ移動するだけで特筆すべきことなんてないしね。

「んく、青い空、緑の芝生・?・?気持ちがいい」

「うん、本当にね」

「でも、痴漢くらいで大騒ぎしすぎだよね」

「そんなことないと思うけど」

「むく、ユーノくんまでそういう意見なのか・?・?

「あれ・?・?アルフさん?」

視界の隅に映つたのは白いリボンを結んだ赤い狼、
「瞬兵、珍しい所で会うね」

「そうだね」

「ちょ、瞬兵、何でこの使い魔と仲いいの!?」

「使い魔つてアンタもあの白い魔導師の使い魔だろう」

「違うつ!どうせ使い魔になるならしゅ・?・?コホンツ、それよりこんな所でなにをやつてるんだ」

「何つてジュエルシード探索に決まってるじゃないか！」

「そのリボンちゃんと着けてくれてるんだ・・・ありがとう」

「ああ、瞬兵がくれたものだからね」

「(なに―――つー)」

《ふん、羨ましいだろう》

卷之三

ユーノくんがアルフっさんを睨みつけてアルフさんがふんぞり返つて。はたから見ると犬を睨みつけるフェレットと余裕綽々な犬つて感じ・・・

『ぼ、僕は瞬兵と一緒に寝たことがあるし』

『はつ、あたしだつて瞬兵と寝たことあるし寄りかかつてもらつたこともあるんだよ

2

◎ な、なら—9 d f : p : ; j o l ;

《くつ、それなら l d f u : ; 8 0 l g f v y》

途中から念話・・・まる聞こえだけど、最後の方はもう何を言つてゐるのか分からぬ。
というか、それは決して人語じやないような・・・どこぞの雷の精霊じやないんだからさ。

というか、何の話をしている。何の話を・・・

「二人とも仲がいいんだね」

「いいわけないだろつ!?!」

えー、だつて息ピツタリだし。

「アルフ！」

「あ、フェイトちゃん」

「ここにちは、瞬兵」

あれ・?・?なんだろう・?・?違和感が・?

「ここにちは、ジュエルシード探しは順調?」

「ダメ、全然捜らない」

「しゅ、瞬兵?、一応敵なんだよ。分かつてる!?!」

「分かつてるけど・?・?」

敵対はしてるけど僕は明確に敵つて決めた訳じやないし・?

「今はジュエルシードも見つかってないんだし、今だけでも仲良くしなよ」

「瞬兵がそう言うなら・?・?」

「・?・?ちょっと、ごめんね」

「きやつ!?!」

僕はフェイトちゃんの服の背中をめくる。

まるつきり変態のようだが気にしてはいけない。

「やつぱり……どうしたのこの傷」

フェイトちゃんの背中は傷だらけだ。

それにこれ……戦闘の傷じゃないまつたくの無抵抗だ。

これから導き出されるのは虐待されているということ。

「これは……その……」

「…………」

ううん、やつぱり答えはないか……

仕方ないか……でもこの傷をつけた奴を見つけたらおしおきしてやる……たっぷりとね。

「ごめん……言えない」

「そう、分かった……」

僕はフェイトちゃんの背に片手を翳す。

手がぼんやりと輝きフェイトちゃんの傷を治していく。

「瞬兵？」

「じつとしてて、治してるんだから」

「あ、うん……ありがとう」

「どういたしまして」

それから暫く穏やかな時間が流れる。

いいなあ、こういうゆつたりした時間つて・・・

「そうそうジュエルシードを発掘したのがユーノくんだったフェイトちゃんには話したよね」

僕は気になつていたことを聞いてみることにした。

「うん、聞いたよ」

「ジュエルシードを運んでた一団を襲つたのつてひよつとしフェイトちゃんにジュエルシードを集めるように命令してる人じやないの?」

「多分、そうだと思う」

あ、落ち込んじやつた。

「べ、別に責めてるわけじやないから、ただ今までして叶えたい願いがなんなのかフェイトちゃんは知つてるの?」

「知らない」

「そう・・・理由によつては協力できるかもしけないのに」

理由が分かれば・・・話も進むのに、このままじやいつまでたつても平行線だ。

「瞬兵!」

「ごめん、ユーノくんでも」

「分かってるよ……けど、ジュエルシードは本当に危険な物なんだ」

「そんなの……あたし達にだつて分かってるんだよ」

「それでも私は」

「言わなくていいよ」

「え？」

「分かってるから……フェイトちゃんが止めないこと、諦めないこと」

「あ……ありがとう」

顔を赤くして俯いやつてもう、

「フェイトちゃん、そういう顔はあまりしないほうがいいよ」

「どうして？」

「その手の趣味がある人が見たら一発で潰われそう」

「え……」

「まあ僕にはそんな趣味ないけど

「ごいんつ！」

お、何でフェイトちゃんが地面に突つ伏してるのかな？

おまけにタライが落ちたような音までしたし。

「クリティカルヒット」

「(フェイエイト可哀想に)」

「フェイエイトちゃん、大丈夫?」

「(瞬兵のせいだよ。敵とは言え哀れな)」

「(おもいつきり振られたようなもんだよ)」

「「「!?!」」」

「ユーノくん!」

「分かつてる」

「行くよ。アルフ」

「あいよ、フェイエイト」

フェイエイトちゃんとアルフさんが飛び出していく。

僕はシユテルシアを取り出す。

「シユテルシア、セツトアップ!」

『イエス、マスター』

僕はバリアジャケットを纏う。

「ユーノくん、乗つて」

「うん」

ユーノくんが肩に乗り僕は転移した。

「ま、また木なの」

転移したのと同時にユーノくんが結界を張る。

そこで目についたのは巨大な木の化物・・・前の失敗が頭をよぎるがそんなことを気にしてゐる場合じゃない。

手のような枝、顔らしき窪み・・・舐めとんのかと言いたくなる。

「瞬兵くん！」

「なのはちゃん・・・随分早いね・・・」

「その星夜くんと偶々ここに居たんだ」

「え・・・星夜も居るの?」

下を見回すと確かにそこには星夜が居た。

こつちに向かつて手を振つてゐる・・・あの馬鹿は、

ちやつちやか隠れろ——つ！

僕の怒鳴り声にビクツとしてから慌てて隠れに行く星夜・・・後でおしおき。

空が破れそこから入つて来たのは言わずとしれたフェイトちゃんとアルフさん……まあ転移したんだから僕のほうが早いのは当たり前か……

「なのはちゃん」

「うん、フェイトちゃんは私が……」

「僕の相手はこっちだしね」

そこには当然のようにファルさんが居た。

「行くよ」

「うん」

僕となのはちゃんは背中を合わせるように構え……同時に動き出す。

「ディバインバスター！」

「マジックブラスト！」

なのはちゃんの砲撃は木の化物のバリアを一瞬で貫き（今の結構強力な防御だつたんだけどな）ジュエルシードを停止させそのままフェイトちゃんへと迫る。

なのはちゃん強くなつたよなあ……

僕の放つた極光の剣はファルさんに迫る。

当然の如くどちらも避けられたけど、僕はその一瞬で距離を詰め、なのはちゃんも同じようにフェイトちゃんのほうへと向かつて言つた。

「はあっ！」

「はあっ！」

がきいいいいいいいん！

シユテルシアとエールがぶつかりあう。

「ファルさん、すいませんが・・・今日は付き合つてられないんです。何せ誰かに見られているので」

「・・・・・」

「まあ、敵ですから話す必要はありませんけど・・・ちょっと・・・犯則させてもらいます」

「犯則・・・?」

「マジックブласт！」

「ずどんっ！」

ファルさんの後ろに剣が現れファルさんを貫いた。

「ぐはっ・・・・」

「まだだよ。ブレイク！」

「ずどどどどどんっ！」

一番最初に放った消えたと思われた極光の剣が分裂し雨のように降り注ぐ。

「あ・・・・」

意識を失ったファルさんが落ちていく。

「わわわっ！」

落ちていくファルさんを慌てて掴んで引き上げる。

「星夜、ファルさんのことお願ひね」

星夜にファルさんを預ける。

「今のいいのか？」

「いいんだ。戦いだし情けは禁物だよ」

「そういう問題か？」

「ちゃんと手加減はしてるよ・?・?容赦はしないけど（ぼそつ）」

「・?・?今なんか不穏な言葉が

む、鋭い星夜、

「ま、とにかく僕はなのはちゃんの所に行くから、ファルさんの事頼んだからね」
後はもう後ろを見ずになのはちゃんの所に向かつていった。

フェイトちゃんの攻撃をなのはちゃんが避けてそこに、

「デイバインバスター！」

なのはちゃんがデイバインバスターを打ち込む。

だがそれもフェイトちゃんは避けた。

どつちも最初の頃より格段に強くなってるそれは間違いない。

フェイトちゃんは早くなってるし、なのはちゃんの魔法構築もかなりの早さだ。

フェイトちゃんの攻撃はなのはちゃんの強固なプロテクションに阻まれ届かない。

逆になのはちゃんの攻撃ではフェイトちゃんに当たらないようだ。

「もつとも長引けば不利なのはフェイトちゃんか……いや防御に魔力を多量に割いているなのはちゃんもどっこいか」

それにも気に入らない……ずっと僕たちを見てる……

少し強力なジャミングをかけて向こうからこちらを見えないように細工して僕は二人を見守る。

「やっぱり……強いね、フェイトちゃん」

確かに……ユーノくんのバインドにもちゃんと避けてるし……

「もう……負けられないから」

「私も……負けられない。勝つて……フェイトちゃんに私のお話を聞いてもらうから」

フェイトちゃんは大切な人と自分の為にそれが誰かは僕には分からないけど · · ·
なのはちゃんはフェイトちゃんと自分の為に · · ·
どちらも負けられない戦い · · ·
けどあの二人 · · ·

なんか戦場がジユエルシードの方に近づいてない?

この間のことでもう忘れたのかあの二人は · · · 仕方ないなあ。

「スターライト」

僕は砲撃の体制に入り。

「バスター」

「スト」

「すごどおおおおおおんつ!

僕の放った砲撃はジユエルシードと転移してきた人物を巻き込み三人を纏めて吹き飛ばした。

三人は完全にダウンドだ。

「あれ · · · えつと · · · てへつ」

まあ仕方ないか、なにせこの魔法なのはちゃんのディバインバスターの倍以上の攻撃力だから · · ·

さあて、どうしたものかな・・・この状況は

第九話 時空管理局？世の中酔狂な組織もあるもんだね

ええと確かここをこうすれば、

「えい！」

「ん……あ、あれ、私

あ、よかつた気付けが成功した。

もうしないけど……失敗したら嫌だし……

「フェイトちゃん大丈夫？」

「な、なんとか」

ありやりやフェイトちゃんボロボロだね。

いや、僕がやつたんだけどね。

「いきなり何するの」

「いや……あのまま行くとさ……またジュエルシードが暴走しちゃいそうで」

「だつたら口で止めてくれても」

本気で言つてるのかな？

「あのさ……僕が何か言つて本当に止まつた？」

「・・・ごめん、止まらない」

「あ、やっぱりね。

「まあ、このジュエルシード持つていつていいからさ」

「いいの？」

「うん、ついでにジャミングもかけてあげるよ」

そう言つて僕は気を失つてる少年を指差す。

「この人達に見つかつたら困るんでしょ」

「うん・・・」

「所でこの人なんなか分かる？」

「えと・・・」

「そいつは時空管理局の魔導師さ」

答えたのはアルフさんだ。

「時空管理局？」

「あー、この世界の警察みたいなものさ」

「ふうん・・・まあ、今のうちに逃げなよ。少し強力な妨害魔法を使つてるから今なら見
つからないよ」

「ありがとう」

「気にしなくともいいよ。人の事をこそそと除いてるのに腹がたつただけだから」

「悪いね・・・行こうフェイト」

「うん」

二人が転移したのを見届けて僕は気絶しているなはちゃんと少年を星夜の元に連れて行く。

「大丈夫か瞬兵?」

「うん、大丈夫・・・ファルさんは?」

「気がついてすぐに逃げてつた」

「・・・逃げられたか、まあ仕方ないね。」

「・・・ま、気にすることはないよ」

そう言つて僕は気絶した二人を寝かせる。

「なんで膝枕?」

「いや・・・僕が吹き飛ばしたんだしあ詫びも兼ねて」

「どうかいつになつたら目を覚ますんだ?」

「・・・多分、二、三時間かな」

ううん、本当に二、三時間で目を覚ませばいいんだけど・・・

で、結局四時間がたつた……しくしく自業自得とはいえた・足が痺れた。

「ぐ……う……」

「あ、目を覚ました」

少年の方がゆっくりと目を開け、

「あの……大丈夫ですか?」

微笑んだらボンツと音がして少年の顔が赤くなつた。

「え……や……あの……えと」

パニックに陥つたようだ。

「とりあえず自己紹介を」

少年が身体を起こし僕を見る。

「僕は如月瞬兵と申します」

自己紹介と共にペコリと頭を下げた。

「ん……ん……?」

あ、なのはちやんも目を覚ました……やつと話が進む。

「あ……と、とりあえず……時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせてもらおうか?」

「・・・今更そんなことを言われても」

「ちつとも決まってないな」

僕と星夜の言葉にクロノくんは沈んだ。

「・・・いや、そんなに落ち込まなくても」

言いかけた僕だが突然クロノくんの目の前にモニターらしきものが現れた。

そこには女性の姿が映っている。

星夜も同じような反応だ。

『クロノ』

「艦長、すみません」

『突然強力な術式でそちらのモニターができなくなつたの、それでちょっと話が聞きた
いから、そつちの子達をアースラに案内してくれるかしら?』

『分かりました。ということですまないが一緒に来てもらおうか』

どうやら話の内容からして僕たちはアースラとか言う所に連れて行かれるらしい。

それが何なのか分からぬけど・・・事態はさらに複雑な方に向かつてているような気がする。

モニターが消え、彼は振り向きながら僕たちについてくるように言う。

そして、僕たちはアースラとやらに転送された。
 そういうえばなのはちゃんと起きてから一言も喋つてないや……事態がポンポンと進んでるからついていくてないんじや……」

「ここがアースラつて所？」

なんだかファンタジーとはかけ離れた設備だ。

暗い照明……壁の巨大な魔法陣だけが魔法という存在を主張している。

これって船……なのかな？

「そうだ。ここが時空管理局所属の船、アースラの中だ。簡単に言うと幾つもある次元世界を自由に移動する為の船だ」

「へえ、やっぱり船なんだね」

「なのは、星夜、そろそろ話を」

ユーノくんが二人に声をかけるが時既に遅し。

「…………いい加減にせんかうつ！」

スパスペーンツ！

僕は会話に参加せずに周りキヨロキヨロと見回してゐる二人を容赦なく張り倒した。

「「い、いたひ・・・」」

「瞬兵・・・いいの?」

「いいんだよユーノくん・・・まつたく、どこのおのぼりさんだ」

「ごめん瞬兵くん」

「ごめん瞬兵」

「に、賑やかだな・・・そろそろいいか?艦長の所に案内したいんだが
はつ、しまつた僕としたことが初対面の人の前で・・・

「す、すみません」

「あ、いや・・・構わないさ」

あ・・・また顔が赤い・・・

「じゃあ行くぞ、ついてきてくれ」

僕たちはクロノくんの案内で動き出した。

大人数人が移動できる自動ドアが開いて通路を歩いている時、前を歩いていたクロノ
くんが振り向いて声をかけてきた。

「ああ、何時までもその格好だというのも窮屈だろう。バリアジャケットとデバイスは
解除しても平氣だよ」

「え、あ、そうですか？じやあ・・・」

「あ、じやあ僕も」

そう言つて僕となのはちゃんはバリアジャケットを解除する。

それにしても星夜・・・君はまだ懲りないのか・・・星夜は相変わらず周囲をもの珍しそうに見回している。

「君も元の姿に戻つたらどうだ？」

「そういえばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れていました」

「・・・・・？」

なのはちゃんはなんで不思議そうにしているんだろう？

僕の横で、ユーノくんの周りに魔方陣が広がり。

ユーノくんが光に包まれて、人間の姿に戻つていた。

なのはちゃんは何が起こつたのか分からぬままのようで、驚いた顔をしている。

「なのはどうしたの？」

「えつと・・・・・ユーノくんつて・・・・・人間だつたの？」

「そういえば・・・・・僕なのはちゃんに言つてないかも・・・・・

「そただけど・・・・・言つてなかつたつけ？」

ユーノくんも言つてないんだ・・・それともフェレットが板についてたから忘れたの

かも・・・

「え・・・・ええええええええええ!!!」

なのはちゃんの声が周りに響き渡る。

僕とクロノくんは既に耳を塞いでいた為余り驚いていないが、星夜とユーノ君は物凄く驚いている。

なのはちゃんは何がなんだか分からぬ状態で、もうめちゃくちゃだ。

「えつと・・・・一人の間で見解の相違があつたようだけど・・・」

「・・・誰?」

クロノくんの言葉を遮つてようやつとこちらに目を向けた星夜がユーノくんを見て言つた。

「・・・・星夜」

「な、なんだ瞬兵」

ビクッと一瞬震えてから何とか言葉を返す星夜に近づき頭に手を載せる。

「人の話はちゃんと聞けえ!」

「あいだだだだだ、痛い、いだい、わ、悪かつた!」

一話以来久しぶりに登場のアイアンクロー・・・効果はばつぐんだ?

「この子はユーノくんなの、分かつた?!」

「わっ、分かりました！」

そこまで聞いてようやく僕は手を離した。

「・・・いいのか？」

「別に構いませんよ。それより急ぐんじゃないんですか？」

「ああ、そうだった。四人とも、この先で艦長が待っている。ついてきてくれ」

「はい」

「「「・・・は、はい」」」

なのはちゃんと達はなんだか少し緊張してるみたい・・・まあ、船の艦長に会いにいくんだから普通の反応だろう僕の落ち着いた反応の方が異常じやないかな。

それについて・・・ただ人に会いにくだけなのに妙に疲れた。

それから暫くして僕達は目的の場所に辿り着いた。

「なるほど、そうですか。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはあなただつたんですね？」

「はい……」

僕達は今案内された部屋で話をしている。

けどこの部屋……盆栽やお茶立て、しそうどしつて何を考えてこんな内装に……

金属の部屋だから……怪しい。

そんな人為的な異空間といつてもいい空間で話をする女性（リンディさんというらし
い）はお茶とようかんをつまみながら、ユーノくんが経験した事を話している。

「それで僕が回収しようと……」

一通り聞き終わつたリンディさんが感想を口にした。

「立派だわ」

まあ確かに……

「だけど、同時に無謀もある」

クロノくんが言葉を継ぐ。

・・・そこは僕も同感、その言葉を聞いてユーノくんは悲痛な面持ちで沈黙する。

ううん、事実だからなあ……否定できないなあ。

そんな様子を横目に見ながら、なのはちゃんと控えめに手を上げた。

「あの、質問しても良いでしようか？」

「答えられることなら」

「ロストロギアって何なんですか？ジユエルシードもその一種らしいですが」
ちよつと・・・前にユーノくんが説明したじゃない。

それともあれじや分からなかつたのかな？」

「そうね。ロストロギアってのは、異世界の遺産。つまり・・・」

リンディさんは人差し指をアゴに当てて天上を仰いで言葉を続ける。

「次元世界の中には幾つもの世界があるの。それぞれに生まれて育つていく世界。の中に、ごく稀に進化しすぎる世界があるの。技術や科学、進化しすぎたそれが自分達の世界を滅ぼしてしまつて、その後に取り残された失われた世界の危険な技術の遺産。それがロストロギアと呼ばれるものなの。使用法は不明だけど、使いようによつてはその世界どころか次元空間さえ滅ぼすほどの力を持つている危険な技術」

やつぱりあれも人が作つたものか。

「しかるべき手続きを持つてしかるべき場所に保管しておかなければいけない代物。君達が探しているロストロギア、ジユエルシードは次元干渉型のエネルギー結晶体。幾つか集めて特定の方法で起動させれば空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層さえ巻き起こす危険物と判明した。少し前にジユエルシードが本格的な暴走状態になつたことがあつただろう？あれが次元震だ」

え〜とこの間のあれか・・・あの時は僕の魔力で無理矢理押さえ込んだけど、次元震

とやらを引き起こしそうになつてたのか・・・だからここに来た。

あれがこの人達をこの世界に呼んだ原因つてわけか・・・

「たつた一つのジュエルシードの全威力の何万分の一の発動であれだ。数個集まつた時の影響は計り知れないだろう」

「聞いた事があります。旧暦の462年、次元断層が起こつたときのこと」

ユーノくんが口にしただけでクロノくんとリンディさんの表情が曇つた。

その顔から想像するにかなりの被害をだしたのは間違いなさそうだ。

「ああ、あれは酷いものだつた」

「隣接する次元世界が幾つも崩壊したの。歴史に残る悲劇・・・繰り返す訳にはいかないわ」

確かにそんな事を繰り返すわけにはいかないだろう。

人が作り出した危険極まりない代物、ほんの一瞬の内に数百万、数十億という命を奪う物・・・

既に兵器と言つてもいいような物だ。

けど、それもまた人が作つてしまつたものだ。

どんよりとした沈黙はしばらく続き、その沈黙はリンディさんによつて破られた。

「これより、ロストロギア・ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちま

す

「えつ・・・・・？」

「ふうん・・・・・」

「そういうことで、君達は今回のことば忘れて、それぞれの世界に戻つて元通りに生活するといい。なにしろ次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入して貰うレベルじやない」なるほど・・・まあ、確かにそうだろうけど・・・でもねえ・・・

「でも、そんな・・・・・」

なのはちゃんとユーノくんは食い下がる。

あれだけジユエルシードの深刻性を話題にした後じや、僕たちの立場は無い。
けどね・・・

「そうですね。・・・けどあなたたちだけでは無理だと思いますよ」

「あら、どうしてかしら」

「この船の戦力で役に立ちそなのはクロノくんとリン・ディさん・・・他は僕どころかなのはちゃんのレベルにも及ばない・・・そんな程度でフェイトちゃんとアルフさん、それにファルさん・・・フェイトちゃんの後ろにはさらに命令を出してる人までいる。この船の乗組員の能力を考えるとなのはちゃん、フェイトちゃんレベルの人物はいない。ユーノくんも結界魔導師としては一流です。船の大きさはかなり物です。・・・にも関

わらず戦力が小さすぎる。時空管理局というものがどれほどの規模のものか知らないけど・・・優秀な魔導師は極少数だと思います・・・つまり応援を望めるほどの数はない」

「そのとおりだ・・・ところでフェイトというのはあの金髪の少女か?」

「そうです。なのはちゃんと闘つてた子がフェイトちゃん、僕と戦つてた男の人がフェルさん」

「そうか・・・続けてくれ」

「クロノくん一人で相手をするにはフェイトちゃん、アルフさんの二人を同時に相手にすれば苦戦するのは間違いありません。けれどリンデイさんは艦長ですからそんな簡単に戦闘にはでられません」

「そうね」

「ファルさんにとっては管理局もフェイトちゃんも敵です。両者が戦つてる隙をついて両者を亡き者にすることもファルさんの実力なら簡単です」

「そう、ファルさんなら間違いなくそうする。」

「なにせ追い詰められてるから・・・それはフェイトちゃんも同じだろうけどフェイト

ちゃんは正々堂々つてタイプだしね。」

「戦いを見た限りここまで手強い相手とは思えないが?」

「それは少々の反則技と魔法を使われる前に気絶させたからですよ。真正面から戦えば少なくともクロノくんと同程度、もしくはクロノくん以上です」
妨害魔法を使ったのはファルさんを倒した後だから最初のほうはやつぱり見られてたらしい。

「そうね・・・確かに魔法を使わせる前に終わらせていたわね」
「それに今から応援を呼んでも手遅れです」

「・・・・」

「さてさて、そこで提案ですけど僕達を協力者として迎えませんか?」
「は・・・はい!!私、頑張ります。だから、協力させてください!!」

僕の言葉を聞いてなのはちゃんは大声で言つた。

まあ、このチャンスを逃したらこの件にはもう関われないだろう。（尤も僕もなのはちゃんも断られた所で関わるのをやめたりしないけど）

「そして・・・」

僕はクロノくんの後ろに回りこむ。

その動きにその場にいたものはクロノくんを除いて反応できず、クロノくんは反応はできただが反撃に移る前に杖を突きつけられて動きを止めた。

「今のに反応できないんじやファルさんの相手は務まりませんよ・・・それで、どうしま

すか?」

「何かを考えていたリンディさんが僕となのはちゃんと目を向けた。
「本当に協力してくれるのかしら?」

「はい!!」

「もちろん、自分から言い出したことですから」

「でも、本当に良いのかしら?」両親も心配すると思うし、何よりあなた達には戦う理由
が無いわ。その理由を、あなたは持つているのかしら?」

「理由ならあります! 何も知らないまま世界が滅亡するなんて耐えられません!」

それに、私決めたんです! フエイトちゃんともう一度お話しするつて。

あなたは何でそんなに悲しい日をしているのつて。だから、私は戦います。

お願いします、足は引っ張りません!!

「理由ねえ・・・そんなものは自分のために、それだけで十分です」

いやいや、なのはちゃんは立派な考えを言うね。

まあ、結局は自分の為だけど・・・

リンディさんはそうね、と前置きして

「・・・良いわ、やつて貰いましょう」

「母さん?」

「じゃ、交渉成立ですね」

「ええ、実力的には問題はなし・・・なにより勝手に行動されるよりはね」

「よく分かっていることで・・・」

「そのかわり条件が二つあるわ。四人とも身柄を時空管理局の預かりとすること。それから指示を必ず守る事」

「はい。あの、細かい事項を記載した契約書みたいなものは無いのでしょうか?」

「別にそんなものは特に無いわ。少しの間この艦に乗る事と、あと一人で勝手な行動はしないこと。それだけよ」

「口約束で構わないんですか?」

「ええ」

なのはちゃんは少し拍子抜けした顔をしているけど、まあこんなところだよね。

「分かりました、約束します」

「じゃあ、今日のところはお家に帰つてゆっくりして。それから明日のお昼にでも改めて連絡するわ」

「あ、後はできればでいいんですけど星夜にもデバイスをあげられませんか?」

「その子に?」

「ええ、魔法の素質はかなりのものです。特に探索系に秀でた能力を持つていて補助・:

ブースト系にも高い適正があります。その他も平均より高めの適正が認められます

「そこまでどうやつて調べたんだ?」

「僕も気になるんだけど」

「私も」

「俺もだ」

「調べたというよりもデバイス無しでの魔法特訓の結果で適正を割り出しただけです」

「「「「そ、 そ う な ん だ ・ ・ 」」」

技術はまだ未熟だけど単純に魔力を込めて打ち出すならなのはちゃんと同程度の砲撃も可能だろうし・・・

「それは構わないけれど

「艦長!?

「落ち着きなさいクロノ」

いや・・・ここはクロノくんの反応の方が正しいと思う。

「星夜くんはどう思ってるの?」

「・・・それが瞬兵の力になれるなら」

「いいわ・・・クロノ」

「はい、 星夜だったな・・・ついてくるといい」

「分かりました」

「一人が部屋を出て行くとリンディさんは今までの雰囲気を一転させて、それにしても可愛いわね……あなた歳は」

「へ……えと……一応七歳ですけど」

「それにしては小さいわね」

「……き、気にしていることをズバリと言つてくれたね。」

「それよりもファルさんの事を調べてほしいんですけど」

「……何かあるのかしら?」

「少なくとも私利私欲でジュエルシードを集めている訳ではなさうなので」

「ファルさんが何処の世界の人であの魔法陣はなのはちゃんと違うからどういうものなのか、そしてファルさんの世界の現状はどうなつているのか……知らなきやならないことはたくさんある。」

「ジュエルシア」

『イエッサー』

「首から提げた宝玉が掌サイズの折りたためるパソコンになる。」

「……それはデバイスではないのね」

「ユーノくんの話ではそうらしいですね……使い方を確かめていくうちにこのパソコン

も使えるようになつたんですが・・・この中のデータによるとデイヴィアインつていうらしいですよ】

【確かにデバイスとは違います】

【デイヴィアイン・・・聞いたことはないわね・・・】

【ちなみにこれは魔律式魔導コンピューターシュテルシアです】

僕は片手にシュテルシアを乗せて片手でキーボードを操作する。
さつきの星夜の平均値とかもこれで割り出した。

『お久しぶりですマイマスター』

【え、今の声シユテルシアから?】

【そうだよユーノくん、インテリジエントデバイスより少し高度なAIだと思えばいい
よ】

【・・・瞬兵くん、よくそんな速さで操作できるね・・・指が霞んで見えるよ】

【ふふん・・・と、そんなことよりこれがファルさんが使っていた魔法陣です】

【・・・残念ながら見覚えはないわ】

【そうですか】

【そのデータ、後でこちらに渡せるかしら?】

「大丈夫です……とりあえず今までのフェイトちゃんとファルさんのデータと星夜の魔法の練習のデータを渡します。それと僕どなのはちゃんとユーノくんの戦い方のデータも」

「なんだか手馴れてるわね」

「ただ必要な情報を提供してるだけです……それとこちらが協力するのだからそちらからも協力してほしいんですが」

「なにかしら?」

「もちろんファルさんへの協力です……どういう理由にしてもファルさんの故郷が危険なのは確かですから」

「時空管理局としては放つておけない話ね……そのファルさんの出方しだいだけど協力はできると思うわ」

ううんリンディさんやクロノくんは信用してもよさそうだけど……基本的に組織つてのは信用できないからなあ……

「それと……この画面に触れてください」

「ここに?」

「はい」

リンディさんが画面に触れる。

よし、契約完了……

「ありがとうございます。これで契約は完了です」

「契約?」

「はい、僕があなたたちに協力しなあなたたちが僕に協力する強制力のある契約です……
破ると雷どつかんですので」

笑顔でいつた僕に三人は絶句して固まつた。

「何も言わない所が瞬兵の凄いところだよね」

「さすが瞬兵くん抜け目がないの」

「こ、子供と思つて侮つたら負けそうね」

ふふん……この程度は当然……組織つてのは……特に正義の組織なんてのはその為なら何をしてもいいと思ってる馬鹿も多いからね。

「まあ、変わりに色々お手伝いしますから……自分で言うのもなんですがけど僕、優秀ですから」

それにして僕、なんか性格がおかしくなつてるような……

「でも……時空管理局ねえ……酔狂な組織も世の中あるもんだね」

「どういうこと瞬兵?」

「人は自分の生まれた世界すら管理できないのに他の世界まで管理しようなんて」

「それは……でも……」

「ユーノくんの言いたいことも分かるけどね。ロストロギアを放つておけないのも確かにただけどさ。それでもやつてることは一歩間違えば人攫い、ロストロギアについてだつて泥棒、強奪つてなことになりかねないよ。何せ他の世界に一方的に入つて勝手を行うんだから」

「「「…………」「」」

三人とも沈黙した……何か意見はないのか意見は、それとも反論できないのか……

「艦長」

「瞬兵」

「あ、クロノくん、星夜」

二人が部屋へと戻ってきた。

「それでどうだつたのクロノ」

「はい、確かに素質はありそうです……少し訓練を積めば補助に限れば足手まといにはならないでしよう」

「デバイスは?」

「デバイスは明日にはできると思います」
仕事が速いね。

「スタッフが優秀なんだな・・・まあ戦力が多いに越したことはないよね。」

「じゃ星夜、デバイスができたら早速特訓だよ」

「お、お手柔らかにおねがいします」

「ふつふつふつ・・・たっぷりと叩き込んであげるのです。」

「「「「(、)れは無茶な特訓を考えてる)」「」」

「はっ・・・うん、もちろんゆっくり教えてあげるよ」

「「「嘘つけっ!」「」」

「リンディさんを除いた四人に即答された・・・何で?」

「さて・・・じゃあ、今日のところはお家に帰つてゆつくりして。それから明日のお昼にでも改めて連絡するわ」

「送つていこう。元の場所で良いね?」

「ありがとう。行こう、瞬兵くん、星夜くん、ユーノくん、」

「そうだね」

「おう」

「あ、うん」

「その後僕達はクロノくんに送られて戦闘があつた場所へと戻ってきた。
「それじゃあ明日、迎えに来るから」

それから僕達は星夜と分かれて家に帰ることになった。

僕はなのはちゃんとユーノくんと話し合って、お母さんに今までの事を話そうという話になつた。

「後はタイミングだけどどうしようか」

「そうだね・・・なのはちゃんはどう思う?」

「やつぱり夜かな」

うくん・・・まあそんなるかな。

その夜、お父さんとお兄ちゃん、美由姉が夜の訓練に出かけた後、僕となのはちゃんははお母さんと一緒にお皿洗いを終わらせた。

「お母さん」

「どうしたの二人とも?」

「お母さん・・・私・・・」

言い辛そう・・・当たり前だよね・・・うん、ここは

「僕たち、明日から・・・ううん、今日の夜から少し家を空けないといけない。だから・・・・・・・・真剣な詰みたいね。いいわ・・・お話を聞きましょう」

「ありがとうお母さん」

僕達は居間に移動して、ソファに座り。

正面に座つたお母さんに向き合う形で僕達は座り。

僕達はお母さんの目を見つめる。

なんとなく目を逸らしたい衝動に襲われるけど、ここで目をそらしたら面白いことはなるだろうけど・・・許してもらえなくなりそうだからやめないとね。

そして僕達は話し出す。

ユーノくんと出会つてから今日までのことを、魔法のことははぐらかしつつ話したけど、お母さんもそのことは分かつているようだ。

価値があつて危険なものがこの町に散らばつていてそれを集めていると。

協力してくれる人たちが現れたのでその人たちのところでお世話になること。

もちろんフェイトちゃんとファルさんのこともお母さんに話した。

危険な物を奪い合つていると言う事を。

普通に考えたら心配されて精神病院に連れて行かれる所なんだけど、お母さんはお父さんを通じてそういうた常識が少し異なる世界にいたことがあるみたいで、僕達の話を真剣に聞いてくれた。

困惑するかと思つたけど、信じてくれた。

正直凄く嬉しいそれは僕達を信頼してくれていてことだから・・・

それにしてもやっぱりこの家つて色々とずれてるよね。

「危ない事だけど、放つておく訳にはいかないの。私達には、それだけの力があるから……」

「それに届けたい声が想いがあるから」

「うん」

「心配かけちゃうかもしれないけど」

「本当に心配だと思うけど」

「それは……それはもう」

お母さんは顔に手を当てて、息を吐き、もう一度息を吸つて、

「何時だつて心配よ。お母さんはお母さんだから、なのはのこととも瞬ちゃんのこととも凄く心配。でも、もう決めちゃつたんだものね？」

「……うん」

「僕も決めたから……自分の為に頑張るつて」

「お母さんにこうやつて話してくれたつてことは、もうお母さんが何を言つても聞いてくれないのよね」

「うん」

「ごめんなさい」

「謝ることはないわ……でも本当に気をつけてね」

「そう言つてお母さんは僕達をぎゅっと抱きしめた。

「お父さんとお兄ちゃんは、お母さんが説得しといてあげる。だからいつてらっしゃい。後悔だけはしないようにな」

「うん・・・・いつてきます」

「はい・・・必ずここに帰つてきます」

「星夜・・・どうだつた?」

「それが・・・瞬ちやんをしつかり守るのよ・・・だつて」

「・・・そ、そ」

僕達は昼間の公園に集まり星夜と合流した。

クロノくんには念話で連絡済みだ。

「さすが誠子さんなの」

「星夜のお母さんつて・・・一体」

「そういうえばユーノくんつて誠子さんと孝也さんに会つたことないつけ・・・まあとに

かく行きましようかね。」

「準備はいいのか？」

僕達の後ろに唐突に現われたクロノくんに僕達四人は一瞬目を合わせて、「「「もちろん！」」」

声をそろえて言つた。

「そうか・・・なら、行くぞ」

クロノくんが言つた瞬間僕達はその場から消えた。

着々と役者はそろいはじめている。

ここから先は危険な道・・・でも、僕達は諦めるつもりはない。

これはきつと必要な戦いだから。

第十話 星夜の初めての実戦とアースラでの生活・・・ せっかく作つたケーキが（涙）

「ディバインバスター！」

「すどおおおおおおおんつ！」

なのはちゃんの放つた砲撃は見事に星夜を直撃した。

「はい、なのはちゃん、星夜、ここまで模擬戦しゆくりよ～」

僕は今まで見てた二人の戦いにストップをかけた。

なのはちゃんは飛んでいるのでそのまま僕のほうに飛んできて星夜はさつきの一撃で落ちたので歩いてこっちに向かつて来た。

「つ、疲れた・・・」

「星夜くん強くなつたね・・・プロテクションを抜かれるとは思わなかつたの」

「なのはさん固すぎです。抜けてもまつたくダメージ行かなかつたじやないですか」

「第三戦目も星夜撃墜でなのはちゃんの勝ち」

僕達がアースラに来て早三日、僕たちは魔法の訓練の合間に模擬戦を行っています。

ちなみに今の所の戦績は僕が二人に三勝のなのはちゃんと僕に三負けの星夜に三勝・・・まあ、当たり前な結果です。

ただどちらも一日ごとに強くなつて嬉しい限りです。

「今日もやつてるな」

「あやクロノくん・・・どうしたの?」

「いや、頑張つてるなと思つてな・・・しかしやりすぎは禁物だ」

「大丈夫しつつかり計算してぶつ倒れるギリギリでやめてるから」「そ、そうか・・・」

あ、何か額いでつかい汗が・・・うん明日からもう少し穏やかな訓練にするべきかな?

ただぶつ倒れるまで砲撃を打つて最大量のアップ（やつた後にちゃんと魔力を分けてるから問題はない）砲撃魔法を防御魔法で防いでの防御魔法の能力アップ、他にもエトセトラ、エトセトラ・・・確かにちょっとやりすぎかな・・・でもちゃんと二人は最後までついてこれたし。

「ま、とにかく今日の訓練はこれでおしまいだよ。それともクロノくん僕と模擬戦する?」

「遠慮する。僕には君の馬鹿魔力を防げるほどの防御魔法は使えない」

・・・失礼な

「一発当たつたらおしまいじや君としても模擬戦のしがいがないだろ」

「クロノくんは受け止めるんじやなくて避けるほうが得意なんだから当たり前じやない・・・そもそも自分で言うのもあれだけど僕の砲撃は手加減してるとはいえ受け止められるなのはちゃんや星夜が異常なんだよ」

「瞬兵ひどつ」

「瞬兵くんそんな言い方しなくてもいいじやない」

「事実だよ。ユーノくんにも聞いてみればいいじやない」

「え・・・僕?」

「・・・・・・・」

あ、ユーノくんが二人にじーっと見られて冷や汗かいてる。

ちよつと悪かつたかな・・・後でなんかお菓子つくつてあげよ。

「・・・あー、そ、そんなことないよ」

・・・滅茶苦茶棒読みだし。

「嘘はいかんぞ嘘は」

クロノくんが突っ込んだ・・・クロノくんつて結構愉快な人なんだな。

「実際に昔から魔法に関わってしかも防御魔法の得意なユーノくんがキツイって言つて

るんだよ」

「う・・・」

「それを魔法覚えて一年もたたない人間が防ぐんだからやつぱり異常だよ
「僕から見たら君も充分過ぎるほどに異常なんだが」

「クロノくん、僕は自分で自覚してるから自分普通の人間からかけ離れてるって
「そうか・・・まあ何であれ君は君だろう」

「当たり前じやん僕は僕だ。誰かに変と言われたって僕は気にしないよ
そんなこと気にしてたら身がもたないよ。

「さて・・・そろそろ夕飯にしようか、食堂に行こうよ」

「賛成！」

「ユーノくんはどうする？」

「僕も行くよ」

「クロノくんは？」

「すまないが僕は一回戻らないといけないんだ」

「そう・・・残念だけどお仕事じや仕方ないよね」

『みんな訓練終わつたところ悪いんだけど一仕事お願ひ』

「エイミイさん？」

通信をつないで来たのはアースラのオペレーターのエイミイさん・・・なんでもクロノくんとは同期なんだって、

『ジユエルシードの発動確認したよ。今回はでつかい鳥よ』

「鳥ねえ・・・今日は僕と星夜で行つてくるよ」

「俺もか!』

「初陣だよ初陣』

「わ、分かつた』

「そ、そんなに緊張しなくても・・・僕も一緒にからちゃんとフォローするから』

ぶつつけ本番だつたなのはちやんでも大丈夫だつたんだから訓練してきた星夜なら大丈夫だと思うし。

「実戦に勝る授業はないし僕のプリズミックスファイアにマジックブласт、シャイニン グレイン、なのはちやんのディバインバスターと幾つか直々に教え込んだし星夜が自分で作つた魔法もあるから問題はないよ』

「気をつけてね瞬兵くん』

「なのはちやん心配するなら僕じやなくて星夜のほうだよ』

「そうだけどファルさんとかフェイトちゃんが出てくるかも』

「まあ、大丈夫だよ。何かあつたら呼ぶから』

「うん」

「よし、星夜行くよ」

「ああ了解」

「じゃゲートを繋ぐよ・・・場所指定完了、ゲートオープン！」

僕と星夜が転移したのはでつかい鳥の真後ろ。
しかしジユエルシードってなんか色々大きくしてるけどどんな願いに反応してるんだろう。

「星夜」

「ああ、マジックブلاスト！」

星夜の持つデバイスから放たれた極光の剣は鳥に迫る。

鳥は剣を宙返りするようにかわしそのまま僕たちの後ろに回りこみ突っ込んできた。

「うわわわっ!?」

「へえ・・・」

僕と星夜は別々の方向に飛び体当たりを避ける。

「う、後ろからの攻撃を避けてそのまま反撃とは」

「結構頭いいんだね。この鳥」

「か、関心してると場合か！」

まあ確かに速いけど僕にとつては別にたいした相手じやない。

「ルーンバレット！」

星夜の周りに現れた四つの魔力弾が現れる。

「シユート！」

「ズドおおんつ！」

星夜がデバイスを振り下ろすと四つの弾は一気に鳥に向かい直撃する。

「あんま効いてねえな」

よく言うよ・・・大して力を込めずに撃ったくせに・・・

鳥は攻撃が当たつたことに怒ったのか星夜の方に一直線に駆け抜ける。

星夜はそこから動かずに鳥を見つめ、あと少しで直撃するというところで鳥が動きが止まる。

「ふふん、所詮は鳥だな」

「お見事」

鳥には黒い光の輪が幾つも絡み付いている。

「うん、ディレイトバインドも上手く使いこなせてるね」

「そりや（ここで失敗したら瞬兵の訓練がパワーアップするし）」

「星夜ちやつちやか封印しなくちや」

「あ、そうだつた。降魔覆滅！ブレイク」

星夜のデバイスに光が集まり、

「クラッシャー！」

ずしやああああんっ！

放たれた黒い光の砲撃は巨大鳥を吹き飛ばしジュエルシードを機能停止に追い込む。
「星夜！」

「分かつてるよ！グラムレイド、頼むよ！」

『お任せを我が主』

「封印！」

『封印』

本体だけになつたジュエルシードは星夜のデバイス、グラムレイドに吸い込まれた。
グラムレイドはレイジングハートの色違いのようないわゆるデバイスだ。

宝玉は青で後は全体的に黒が主体のデバイスだ。

「お疲れさま」

「あく、緊張した」

あらあら本当に疲れちゃつたみたい。

まあ、初めての実戦だし。

「さ、帰つて夕飯にしよう」

「そうだな」

「じゃ、ゲートオープン！」

「おかえり瞬兵くん、星夜くん」

「ご苦労だつたな瞬兵、星夜」

「ただいまのはちゃん、クロノくん」

「ありがとうございます。クロノさん」

アースラに戻つた僕たちをなのはちゃんとクロノくんが迎えてくれた。

あれ・・・ユーノくんは?

「ねえ、ユーノくんは？」

「フェレットもどきなら写真を買いに行つてる」

「写真？」

「なんで写真……？」

「俺の分も頼んでくれたか？」

「もちろんだよ星夜くん、立て替えておいたから後で払つてね」

「ありがとうございます。なのはさん」

「あの……何の写真？」

「君の写真だ」

「…………は？」

「僕の写真？」

「ここは学校じゃないのに……」

「ちなみに元締めはエイミイだ。母さんも絡んでいる」

「…………あの二人はそんなに鉄拳制裁が欲しいのかな。」

「この際ちょっと怖い目にあわせるつてのも……」

「まあ気にするなアースラの人員は全員購入しているらしいしな」

「…………それはクロノくんもなのかな？」

「い・・・いや・・・それは」

「鑑賞用、保存用、予備用と3枚買つてたの」

「さ、3枚・・・1枚じゃなくて3枚・・・ク、ク、ク、クロノくんの・・・馬鹿うつ！」

「ぐはつ」

とりあえず泣きながらアッパーをかましてその場を走り去る。

「な、なんで僕だけ・・・ガクツ」

「どがばんつ！」

「エイミイさん!! リンディさん!!」

走りながら気配を探り二人の気配のするほうに向かつた僕は扉を蹴り開けた。

「あ、あら瞬兵くん、こんにちは」

「こんにちは・・・じゃないですよ！ リンディさん人の写真を勝手に売るなんて何を考えてるんですか!!」

視界の端にこそそと逃げようとしているエイミイさんが映つたので、
「ごどんつ！」

エイミイさんの眼の前に拳を打ちつけた。

壁に拳がめり込んだが気にしないことにする。

僕はゆつくりとエイミイさんの方に顔を向け。

「逃げようとしても無駄です」

凶悪な笑顔で忠告する。

「は、はい」

おや、何か泣きそうだ。

「とりあえず・・・二人とも・・・おしおきです！ボルテックレイド！」

「どがごどがごつどがしゃくん！」

で、おしおきを実行しました。

そしたら最終的に嘘泣きに騙されて写真の売買を認めさせられてしまった。

くつ、なんたる不覚・・・やつぱり一筋縄ではいかないと心に刻み込んだ僕でした。

「ううう・・・悔しい！」

「あゝその瞬兵、すまない」

「ふんだ。クロノくんの馬鹿」

一つの写真を3枚も買つたくせに・・・

「もういいよ。それより何か分かつた？」

「ファルの事か？残念だが」

「情報なしか・・・ああもう、もしかして情報がないってオチじゃないでしょ？」

「もういいや・・・デバイスの勉強の続きしよ」

「ただいま僕は、デバイスについて勉強中です。」

「シユテルシア、モードチエンジ」

『イエスマスター』

シユテルシアがパソコンに変わる。

「この前の続きを」

『はい』

僕は左手を顔の前にあげる。

すると青い半透明のゴーグルが現れる。

ゴーグルに次々と情報が映し出される。

「この前の続きをだけどこれならどうかな？」

『そうですね。これなら魔力の伝達も充分です・・・しかし強度の方が』

「うん、やっぱりそうなるか・・・じゃあ、これは」

キーボードを操作しさらに改良を加える。

『これなら完璧ですね』

「じゃここからは強化だね。これを強化するならここをこうしてこつちをこう」

「・・・・・」

「ん、どうしたのクロノくん、ぼけっと人のこと見て」

「いや・・・君は本当に凄いなそれは今までのデバイスとはまつたくの別物だろ」

「あ、分かりますか」

「僕も知識があるからな画面をみれば分かる・・・これで今までのデバイスとほぼ同等の能力だ・・・これをさらに強化しようとしているんだろ」

「はい・・・とこれでどうかな?」

『そうですね魔法の威力は上がります。ただ使用者への反動も大きいから・・・まあちゃんと使いこなせばいいだけですけど』

「それでも万人に扱える物ではないか・・・もう少し改良が必要だね」

「なるほど・・・こういう方法もあるか・・・それならばこつちをこうしてみたらどうだ

?」

「ああ・・・確かに・・・でもそれならこつちをこうだね」

「そうだな・・・だとするとこつちをこうして

「ここをこうだね」

「む、楽しいな」

「うん、本当に・・・クロノくん凄いよ」

「瞬兵もな」

「あははははは」

何だが妙に話が弾み僕とクロノくんなんだか可笑しくて同時に笑い出した。

「あ、ねえクロノくん」

「なんだ?」

「聞いてもいいかな」

「何をだ?」

「そのクロノくんはどうして執務官になつたのか」

「・・・・・」

あー・・・やっぱり聞いや不味かつたみたい。

表情が哀しそう。

「ごめん、やっぱりいや」

「すまない・・・いつか話せるだろう」

「いいよ。それよりもう少し手伝つてよ」

「ああ僕で役に立つならな」

「ありがと」

「いや、僕も楽しいから構わないさ」

「じゃあさ……で……こう」

「なら……して……これなら」

「ああ、うんでも……だから」

「そうか……ならダメだな」

「……な、なんだよあのいい雰囲気は」

「く、悔しいけど私たちじや話についていけないの」

「僕もデバイスについては専門外だから」

「「(くそ)クロノ(くん) めーつ)」「」

横でごちやごちやと言っているのはいわずと知れた星夜、なのはちゃん、ユーノくん
だ。

「・・・ごめんクロノくん、また今度でいいかな。外野が煩い」

「ああ、いつでもとは言えないが」

そう言つて僕はクロノくんと分かれて三人の方へ向かう。

「三人ともちよつと煩いよ。せつかく話が弾んでたのに」

「「(ごめん」」

「ごめんなさい」

「それでどうしたの？」

「何がだ？」

「だから、何で僕の方を見てごちやごちや言つてるの？」

「や、その・・・」

「えくと・・・」

「その・・・」

「「さ、寂しくて」」

「・・・はい？」

寂しい？

三人一緒に居るのに？

「それはつまり・・・僕に相手してもらえないくて寂しいってこと？」

「「はい、その通りでござります」」

・・・こ、子供じゃないんだから、あ、いや、みんな子供か。

にしても・・・

「まつたく・・・構つてあげたいけど・・・なのはちゃんと僕がやつてることについて

これる？」

「「無理」」

即答だし……仕方ない。

「じゃ、お茶にしようか……食堂にケーキとクッキー焼いておいてあるから」

「賛成」

「ぜひとも」

「早く行こ瞬兵くん」

「……こ、こひつらは、まあ、アースラに乗つてから訓練以外であまり話していないし。

「ねえ、何のケーキ焼いたの？」

「ショートケーキ」

「ん？ 瞬兵つて生クリーム苦手じやなかつたか」

「僕は甘すぎるものが苦手なだけだよ。生クリームやあんことか……だから自分で作るの」

「（ふむふむ、瞬兵は甘いものが苦手か……プレゼントから甘いものは除外しないと……）

今度なのはにクッキーの作り方でも教えてもらおう

か……いや誰にあげるのとか聞かれたら死ぬから辞めよう」

「くん……ユーノくん前！」

「え？」

「ごんつ！」

「うわっ!?」

・・・な、何を考へてゐるのか知らないけど壁にぶつかったよ。この人・・・

「だ、大丈夫、ユーノくん」

「大丈夫か、アホフェレット」

「まつたく何をやつてるんだか、ユーノくん、ちゃんと前見て歩こうよ。」

もう・・・仕方ないね。

「ほら、行こう」

「うん」

僕の差し出し手をユーノくんは握り返して來た。

そして僕たちは食堂に辿り着く。

「ちよつと待つてね冷蔵庫に入れてあるから持つてくるから」

僕は三人を席に着かせて厨房の方へ向かう。

厨房の手伝いをする代わりに材料と機材を使わせてもらつてから食べ終わつたらまた手伝わないと、

などと考へながら冷蔵庫を開ける。

「・・・あれ？」

ケーキもクッキーもなかつた・・・

「・・・あの料理長」

「ん、どうした?」

「ここに入れておいたケーキとクッキー知りませんか?」

「知らないな・・・ああそれと夜は約束どおり」

「あ、はい・・・手伝いに来ますけど・・・」

「うん・・・どこいつちやつたかな」

とりあえず紅茶を入れてテーブルに運ぶ。

「ごめん、みんなケーキもクッキーもなくなつてる」

「じゃあ仕方ないよ。とりあえずお茶飲んでおしゃべりしようよ」

なのはちゃんの気遣いが嬉しいけど僕が誘つたのに・・・

「うん・・・ごめん」

「しゅ、瞬兵のせいじゃないだろ気にすんなつて」

「そ、そうだよ。紅茶だけでも充分だよ」

「ありがとう、星夜、ユーノくん」

それについても本当にどこにいったのかな調理場の人たちは僕が作つたの知つてゐるはずだし。

「お~い」

「あ、どうもです」

声をかけてきたのはコックさんの一人だ。
今日の朝に同じシフトで仕事した人だ。

「どうしたんですか？」

「その・・・な・・・さつき冷蔵庫からリミエツタさんが
「リミエツタ?・・・エイミイさんの事だよね」

「その・・・」

「・・・そういうこと」

ケーキとクッキーを持つてたのはエイミイさんなんだね。

「言わなくていいです。分かりましたから」

「そか・・・じやあな」

「ありがとうございます」

コックは慌しく調理場に戻つて行つた。

「さて、みんなはこのままお茶してて、ちょっと行つて来るから」

「・・・い、いってらっしゃいませ」

（棒読み）

「・・・お、お気をつけて」

・・・三人とも何でそんなに怯えてるのかな、かな。

さあ、エイミイさんの気配はブリッジか・・・

僕はゆっくりと歩き出す。

頭の中でおしおきの方法を考えながら、

「「（エイミイ（さん）後愁傷様です）」」

そしてブリッジ目指して走りだす。

ブリッジの扉が見え僕は床を軽く蹴つて飛び身体を捻る。

「はあっ！」

どごんっ！

回し蹴りでブリッジ扉を吹き飛ばした。

「エイミイさん!!」

ブリッジ居た人間は何事かとこちらを振り向いてすぐに視線を逸らした。

それはクロノくんも同じだ。

すばやく辺りを見渡すとばっかりみなさんがケーキを食べた後があつた。

「あ、あら、ど、どうしたのかな・・・」

「全員纏めてお・し・お・き・です！」

「ちよつ、ちよつと待て僕は」

「問・答・無用!!」